わたしたちの過去に，未来はあるのか

第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館

Is There a Future for Our Past?—The Dark Face of the Light

Japanese Pavilion 2007, the 52nd International Art Exhibition-La Biennale di Venezia

岡部昌生

「物質と記憶をテーマの中心に据えた日本館の展示は，個人の顔を強調する西欧とは明らかに対照的なものとして受け止められたようである。岡部さんが続けてきたフロッタージュ（こすり取り）は，他者にたいして徹底的に開かれているところに特徴がある。このことは，やはりいまだに個人主義的色彩の強い西欧美術のなかでは，特異な表現と映ったのかもしれない。「解説の必要もない」と書いた批評もあったが，頭で理解するのではなく，触覚で感じてもらいたいという意図が通じたとも言えるだろう」

「個々の記憶をどのように未来へつなげるかという緊急の問題意識がある。日本館が試みた一連のワークショップは，他者と共に探求することのなかから，記憶の未来が生まれるのではないかという問いでもあった。水の都での未知の人々との多くの出会いが，新たな探求の旅へとつながってゆくことを予感している。」（港千尋「ヴェネチア・ビエンナーレ報告」東京新聞 2007.11.24）

2007 年，イタリアで開催された第 52 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館[1] の代表展示作家としてコミッショナー港千尋さんと組みたてた「わたしたちの過去に，未来はあるのか」[2] というコンセプトは，たしかに，継続し，引き継がれ，問い続け探求する旅だったと思える。この旅の始まりから三年。私の旅の寄港地は，広島，東京，根室，沖縄，ヴェネチア，パリ，ローマ，リヨン，台北，札幌とつながり，都市の近代の深部へとむかうひとつの軌跡をつくる。アドリア海からいくつもの海峡を抜け，海の道をたどって戻ってきた膨大なモノがいま，スタジオで静かに次の旅への束の間の時間を過ごしている。広島／ヒロシマから生まれた 1500 点の作品，4 トンもの被爆石とそれを載せた錆びた鉄製の展示架台，資料と記録のファイルと制作ノート，写真と映像，雑誌や報道記事が載った新聞の束，いくつもの都市に触れ，擦り減ったちびた鉛筆。それらを手元に置き，感触しながら「特別な年」の「特別なヴェネチア」を振り返ってみたい。

Ⅰ　都市に触れて

ヒロシマを擦りとる

紙と鉛筆。シンプルでエレメンタリーな記述の方法で，都市に触れてきた。凹凸のあるものに紙をあて，その上から鉛筆などで擦ると，紙を突き抜けかたちが浮き上がってくる驚きと不思議。そのワクワクした経験を思い起す人の多くは，眼の記憶というより，指先から伝わるかたちの感触，擦過する響きとともに手が覚えたそのことを通して蘇るようである。手は露呈した大脳の先端，センサー。鉛筆がつくる緩やかな曲線のかたまりがかたちづくるのは，超音波のつくるエコグラフィーの画像にもにて，時間や記憶の層にも触れているのかもしれない。モノに手のひらをのせ，手で撫ぜる。手で見る，眼が触っているのだろう。手を動かした分だけかたちが表れ，その自分の行為も同時に写され（移され），像を結ぶ。この手でかたちを写し，記録し，伝達する東洋に伝わる拓本によく似たフロッタージュは，古い印刷術や版画技術として親しまれてきた手法である。

都市のかたちや人々の生活の営みの痕跡や軌跡，場に積層する時間／歴史をなぞり，そこに刻まれた記憶を想起する，過去を現在に引き寄せることだった。私のこの手法の美術の始まりは 1977 年。ヒロシマという主題をもって制作したのは 1986 年。きっかけは，広島市現代美術館の制作委託だった。1979 年のパリの路上での 169 点の「都市の皮膚」の制作と作品に関心と評価をもった美術館長からのオファーだった。しかし，「ヒロシマを知らない人間に，ヒロシマを主題とした作品をつくることができるのか」という煩悶が自身にはつよくあった。たどりついたのは，ヒロシマにつながる私が体験した空襲の光景だった。

私は，北海道東端の地，根室生まれである。原爆が投下される三週間ほど前，日本列島を北上するように移動してきた米軍の艦載機からの空爆の二日，日本の東の町にも及んだ戦争だった。町の八割が焦土と化し，生家も失った。三歳の子に焼きついた火の光景は，私の原風景となった。さらに，これは後で知ったことだが，根室空襲の被害と背中合わせにあった朝鮮人の強制連行・労働による根室牧之内旧海軍飛行場滑走路の造成がひそかに進められていた加害の史実の衝撃。この遠い記憶を内面化することなしには，広島へは向かえなかった。それ以後，「ヒロシマ以後」の時間は，私の生の歩みの時間と重なり，符号し，並走するように在りつづけたということが，ヒロシマの主題をもち抱えながら美術をやることにつながっていった。やはり，「時代の子」だったと思う。

日本が近代化を駆けるなかで，開拓という名の〈近代〉の受皿として担わされた北海道。〈近代〉の帰結としての広

1)
第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館
二年に一度開催される現代美術の国際展。1895年から開催し，世界中の美術関係者が注目するアートイベント。ヴェネチア・ビエンナーレ財団が主催。
日本の公式初参加は1952年の第26回展。国際交流基金が主催。1956年から建築家吉阪隆正設計によるパビリオン日本館を使用する。国別参加形式と授賞制度のあることから美術のオリンピックとも称される。横山大観，岡本太郎，棟方志功，川俣正，舟越桂，草間弥生，日比野克彦，宮島達夫，石内都，やなぎみわらが参加。
2007年 6 月10日－11月20日，ジャルディーニ（公園）とアルセナーレ（旧造船所）を主会場に76カ国146組のアーティストが参加，市内で34の関連イベントが開催され街中が現代美術一色になった。

2)
アーティスト岡部昌生とコミッショナー港千尋「わたしたちの過去に，未来はあるのか」
今回の参加は指名制コンペティションによった。1995年第46回展以来二度目。6 人のコミッショナー候補を指名し，4 人の応募案のなかから最終二案の選考で決定された。「展覧会そのものの問題提起は甲乙つけがたいものの，コンビを組む両者が共有する記憶というテーマを深化させ，それを開催地であるヴェネチアの都市空間へと拡散させていこうとする強い意志が浸透していた一点において，港案のほうが勝っているように思われた」（暮沢剛巳／難波祐子『ビエンナーレの現在』青弓社2008）

島の悲劇と惨状。都市に深く刻まれた傷にふれ，この二つの場(都市)を往還しながら，私が今日，美術しつづけること，それを問うこと，あるいは問われることの思索の連続であったと思われた。そのように広島に向きあってきた。

都市の／痕跡 記憶

たった一度の港さんとのラウンド・テーブルの出会いが「ヴェネチアの大きなステージ」から展開していった共同作業は，ヒトがつながる必然と不思議を思わせた。「2002年に岡部さんが日仏会館で個展[3]を開かれたときに，ラウンド・テーブルに誘われて，パンフレットに短い文章を書いたことがありました。その時の印象がとてもつよく残っていました。テーマ的には記憶をはじめとして共通するものが多いということもあるんですが，その時に見たフロッタージュの印象がすごく強かったわけですね。それでいままでのキャリアを含めて，作品の総体をヴェネチアでやったら面白いだろうなあ，と思ったわけです。そもそも自分が面白いと思わなければ，観客が面白いと思ってくれないだろうし。もうひとつ，美しいと思ったことですね。それが決めた理由でした」(暮沢剛巳／難波祐子『ビエンナーレの現在』青弓社 2008)。

「痕跡／記憶／想起／皮膚／歴史／都市のキーワードからすれば，「都市は巨大な版である」と都市の記憶を，皮膚(皮層)を捲るようにフロッタージュという手法で擦りとってきた岡部昌生氏と，「われわれの記憶は，符号化されてどこかに貯蔵され，検索されるような性質のものではない。われわれの記憶とは，現在の前後関係や情動によって，現在に適合されるように築かれる過去なのである。」(「創造」と「想起」の力と副題された『記憶』)と「記憶は現在との関係においてつねに生成する」ことに言及して，「記憶を想像力として考えたい。断片化する世界のなかにとどまりながら，しかも世界を断片という形式で記録しながら想像力を駆使して世界を再構築することは可能か。」(『予兆としての写真―映像原論』)と提示した港千尋氏とのふたりの共同作業は必然であったかと思われる。」(小室治夫『PHOTON No.6』2007)

挑戦するコンセプトに挑戦

突然の電話とファクスが挑戦するステージを生みだした。「ひとつの企画があってご相談なのですが，来年2007年夏にヴェネチアで第52回のビエンナーレが開かれます。毎回国際交流基金が主催していますが次回から数人のキュレーターを選んでの指名コンペティションになり，小生のところにも参加依頼がきました。アーティスト1名を選び，5月末までに応募とのことで，私としては初めての経験ですが，チャレンジすることにしました。そこで是非岡部さんに参加していただきたいと思い，単刀直入は承知の上，ご連絡するしだいです。」

「とつぜんでさぞ驚かれたことと思いますが，率直なお考えを聞かせていただけると幸いです。ビエンナーレの詳細は追ってFAXしますが，まずご興味があるかどうかだけ，お聞かせくださいますか。指名コンペでは，作家とともに展覧会のコンセプトがかなり重視されるようですが，岡部さんと組むことができるならば，説得力のあるプロポーザルをする自信はあります。」(2006.4.15 港千尋)

「たいへんおどろきました。でも，とても嬉しく思います。参加させていただきます。チャレンジする港さんのコンセプトなら，わたしもチャレンジしてみます。プロポーザルに必要な資料などご指示ください。早めに取り揃えて送付いたします。今年は，札幌CAIの個展「AFTER UJINA」。岩手県土澤での「まちかど美術館」。川口での「かつて川口を舞台とした『キューポラのある街』という映画があった」。山口県周南「廃校を美術館に」という高校生企画の「恋文(らぶふみ)プロジェクト」。神戸の教会でのインスタレーションと講演。いずれも夏から秋の動きです。桜前線日本列島北上中というのに，札幌はまだ冬のつづきの季節です。」(2006.4.16 岡部昌生)

「早速のお返事，ありがとうございました。実現に向けてベストをつくしたいと思います。交流基金から送付された資料をとり急ぎお送りします。会場の見取り図と写真を収めたCDです。具体的なプロポーザルは，これからご相談しながら練りあげていきたいのですが，基本的には次のように考えています。A)［シンクロニシティ(同時生起)］で発表された作品を中心とする。B)これにプラスアルファで，ヴェネチア特別プログラムを追加する。Bの部分でより強い説得力をもたせることができれば〝場所性〟や〝郵便〟というコンセプトも打ち出せるのではないかと考えています。詳しくはまた追ってご連絡いたします。(2006.4.18 港千尋)

向き合ったヒロシマの総体再現する構想

「ヴェネチアの日本館の図面をいただきました。ありがとうございました。イメージしていたニュートラルな

3)
岡部昌生展(日仏会館2000.3.20―30)
企画：スイリーさゆり
岡部昌生×港千尋　ダイアローグ「記憶のフロッタージュ」
鉄製のバインダーに綴じられた「N'OUBLIEZ PAS」，「国際シンポジウム〝戦争とメディア〟によせる100の手紙」「宇品のフロッタージュ(映像)」，アエログラム・プロジェクト「N'OUBLIEZ PAS」など。
スイリーさゆりさんは，札幌大谷短期大学美術科卒業。港千尋さんの言う美術における〈縁〉を思う。

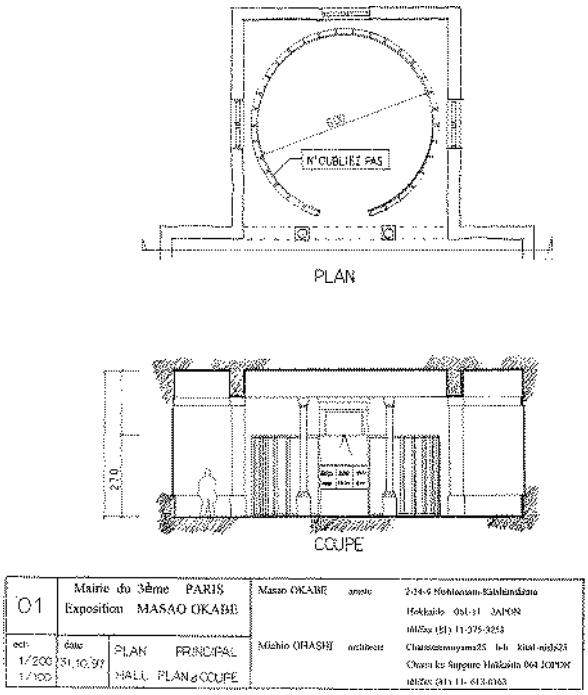
キューブな空間ではなく，正直うなってしまいました。方形の中心に空気孔があり，四方の壁から平面を卍のかたちに区切るように突き出してくる袖の壁があり，空間に固有の表情を生んでいるという印象です。これまで，数多くのアーティストがこの空間に挑んできたことに敬意を称するとともに，これから，どのように挑戦していくのか，とても大きな悩みを抱えてしまいました。」(2006.4.28 岡部昌生)

「今日までヨーロッパですね。この 10 日間ほど，土澤，花巻，盛岡，川口，東京と動いてました。ヴェネチアの日本館の図面を携帯しながら，ここで何ができるのかという宿題を抱えての，いい旅でした。何度もスケッチして，以前の展示プラン[4] も読みながら，またプランを起こす繰り返えしでした。円環による構成の不可能を知り，方形の空間を斜めに直線で構成する。主題はヒロシマの被爆列石。都市のなかにひっそりとあった石に触れながら，そこに保持された時間と刻まれた出来事。それに関わった私の身体の記述。そこから記憶と問いに触れ，それを取りだすことができればという構想です。広島・宇品にかつて存在していた軍港宇品港につながる，軍用鉄道最終駅の 560 m のプラットホーム。高速道路建設により 100 年の時を刻んで 2004 年，消滅しました。この石に 9 年間触りつづけ，4000 点のフロッタージュ作品を生みました。この総体と総和を展示とする構想です。壁面のすべてを埋めつくす。高さ 5 m，壁面総延長 82 m。石のフロッタージュ。そのネガフィルム。周辺に生える植物標本。プラットホーム喪失以後の宇品の土によるドローイング。これにライトボックスという壮大な構成。ほぼ 1400 点。黒くあるいは錆びた鉄のグリッドの構成のなかに塡め込み全面ガラスの額装によって覆われます。プラットホームの直線性は被爆石によって(当初は被爆石のフロッタージュ反転ネガリスフィルムによるレントゲン写真のようなライトボックス。直線の先端が崩壊しながら積み上げる構成)。この石による構成は，昨年の広島市現代美術館での個展「シンクロニシティ(同時生起)」でインスタレーションしました。石の生成の時間。二度火をくぐり再焼成された倉橋島産の被爆石。全長ほぼ 16 m。会場に現場のレアリティが生まれます。いま，考えうる構成です。

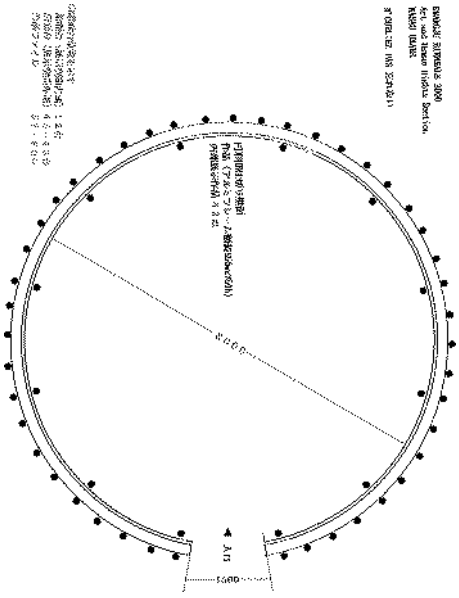
もうひとつの，ヴェネチア特別プログラム。都市から発信されたアエログラム・プロジェクト。ここ 10 年，パリ[5]，広島，光州(韓国)，根室から発信した航空書簡は 1000 通を越えました。そこに擦りだされたかたちは，20 世紀の都市に刻まれた悲劇を伝え読みとることのできるかたちです。これに，パリ，マレの銘版に刻まれたことばを，一語づつ航空書簡に擦りとり発信返送してもらうという，往復書簡のプロジェクト。全てが届くとき，銘版に刻まれたメッセージを読みとることができる。この秋のパリゆきの機会をとらえて制作する構想があります。(2006.5.10 岡部昌生)

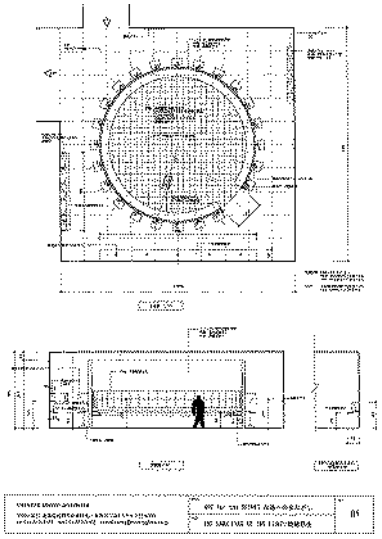
4)
「N'OUBLIEZ PAS」「THE DARK FACE OF THE LIGHT」や被爆石を円環や直線にインスタレーションする展示プラン。
①GALLERY BAZAREZ(1996 広島)②三区の区役所(1997パリ)③エスパスOHARA(1997東京)④オホーツクのエッジ(1999北見)⑤光州ビエンナーレ(2000光州)⑥越後妻有アートトリエンナーレ(2000新潟)⑦永遠へのまなざし(2001札幌)⑧日仏会館(2002東京)⑨札幌の美術(2002札幌)⑩コンチネンタルギャラリー(2005札幌)⑪根室市図書館(2005根室)⑫広島市現代美術館(2005広島)⑬トキ・アートスペース(2005東京)⑭旧日本銀行広島支店(2005広島)⑮旧関西学院大学教会(2006神戸)

5)
パリ―ヒロシマをつなぐアエログラムプロジェクト。1996年 2 月，パリ 3 区マレー，ユダヤ人居住地区ロジエ街の「ここから拉致された史実を刻む」石の銘板をフロッタージュ・アエログラムとして広島に発信するプロジェクト開始。8 月，広島から原爆の惨状を銅版に焼き付けた「原爆被災の銘板」を発信。二つの都市の書簡は組み合わされ「N'OUBLIEZ PAS　忘れない」という作品となり，札幌，広島はじめ各都市を巡る。
当初，パリ三区役所での展覧会を構想したが，実現間際中止された。この年三月，パリの自宅でマルグリット・デュラス逝去。再び「HIROSHIMA MON AMOUR」を読みはじめる。展覧会の冊子のテキストは，ニドラ・ポーラ「忘れてはならない」，吉増剛造「無言の／強度」。

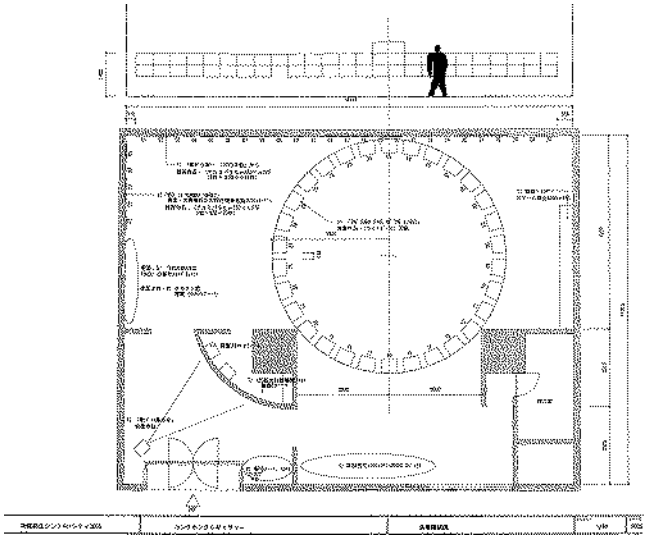


「N'OUBLIEZ PAS」パリ三区役所のインスタレーション案 1997年


「N'OUBLIEZ PAS」第 2 回光州ビエンナーレ特別展「芸術と人権」インスタレーションプラン 2000年



「ART for the SPIRIT 永遠へのまなざし」
北海道立近代美術館インスタレーション案 2001年



「岡部昌生シンクロ＋シティ」
コンチネンタルギャラリーインスタレーション案 2005年

日本館の展示構想

ひとつの場から生まれた多様な表情をもつ作品群，それが生まれたマトリックスともいえる被爆石。図面や以前のプランを取込ながらスケッチを繰り返す。

「スペースの特異性がこれまでのインスタレーションの手法にはむかない空間であることから広島の仕事の総和を示しながら，広島の地に刻まれた時間と記憶を取り出せればと，構想しました。空間を分断する直線は，宇品のプラットホームの被爆石。床のイタリアの大理石と呼応させます。擦りとられた像，反転したネガティブな図，生の再生像としての植物標本，プラットホーム消滅後の宇品の土による手の痕跡，そしてライトボックスの装置。それら壁面に埋め込んだ 1400 点がヒトを包み込むような空間を設定します。広島市現代美術館，北海道立近代美術館の借用も受けながら，「ヒロシマの皮膚」のような痕跡に入り込む，抱かれる，ヒロシマの記憶の再生装置としての空間を意図します。港さんとの話し合いなくしての進行でしたから，コンセプトとのツキアワセもあります。ともに構築していくことが重要です。プロポーザルのためにこの展示プランのスケッチをもとに，友人の建築家[6] に図面を起こしてもらいます。」(2006.5.15 岡部昌生)

6)
コンセプトとスケッチを図面にしてくれたのは建築家大橋三千雄氏(北海道造形デザイン専門学校)と濱田枝恵さん，室田麻生さん。
コンペのプロポーザルには基本コンセプトと展示コンセプトとともに展示計画の図面が有効に作用した。大橋氏とはこれまで展示設計の共同作業を幾度も実施している。
日本館の展示計画は広島市在住の彫刻家石丸勝三氏が担当。グリッドと展示架台も含め緻密な設計と石の配置に卓越した技術で，ヴェネチアのHarmogeと大空間の展示を実現させた。

II わたしたちの過去に，未来はあるのか
ヴェネチア・ビエンナーレ・コンセプト案[7]—港千尋

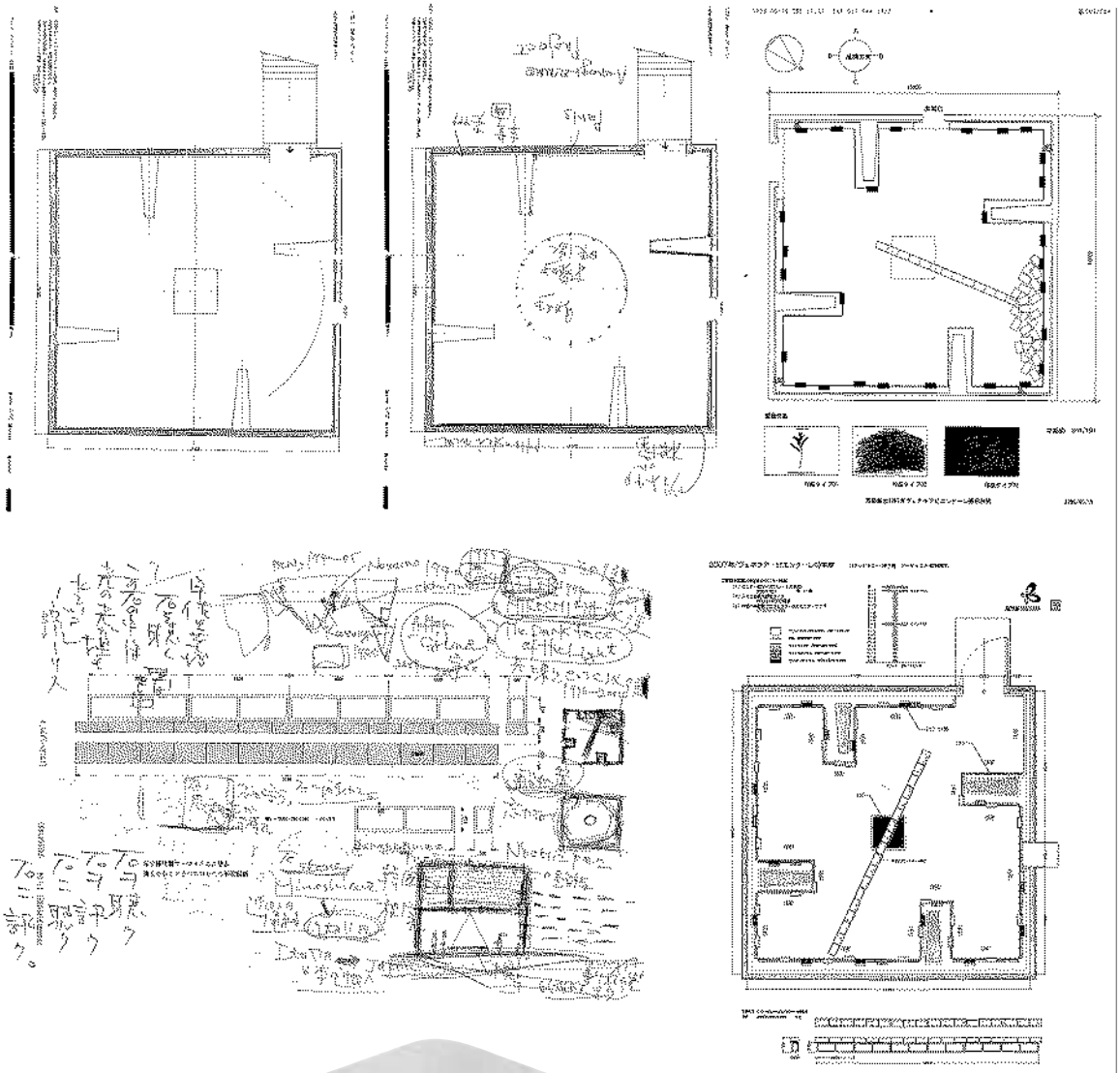
基本コンセプト

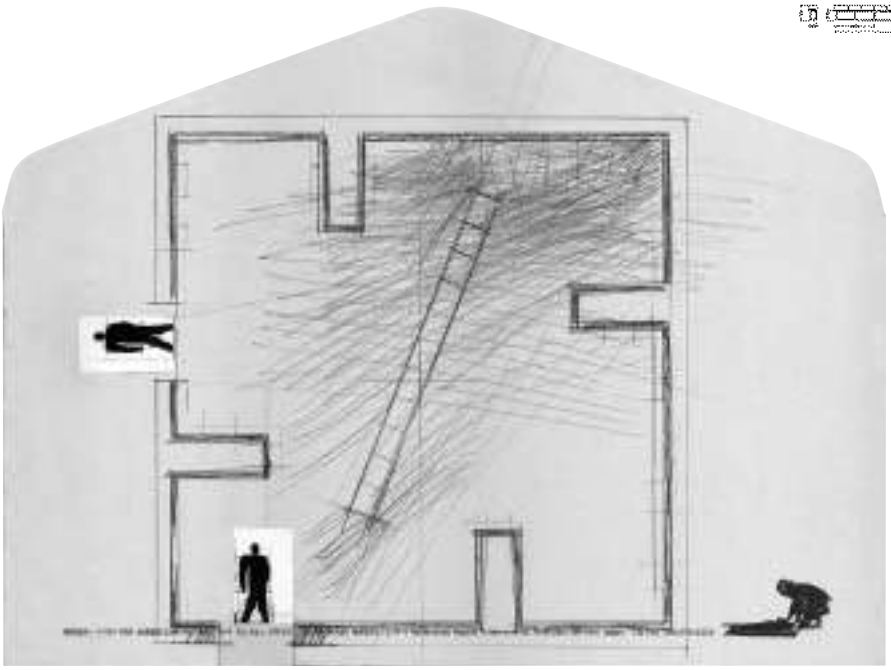
わたしたちの過去に，未来はあるのか。

「時」との関係において，わたしたちの時代はひとつの矛盾に直面している。科学技術の発展によって人間は，その過去をより詳しく知り，より正確に複製し，復元し保存することが可能になった。その一方，急激なグローバリゼーションや人口急増にともなう社会の高速化と都市化によって，あるいは公害や地域紛争によって，過去はかってない規模で消滅の危機を迎えている。後期資本主義社会における情報化は，記憶と物質の両面において重大な変化をもたらしており，現代人は自らの過去をどのように未来の世代へと手渡すべきかという問いを突きつけられていると言えよう。

この展覧会は，美術家岡部昌生のライフワークであるフロッタージュ作品を中心に，人間の過去が未来へと受け継がれる可能性と条件について，美術の側から問おうとする試みである。フロッタージュ作品の対象である宇品は，かつて広島の軍港であった。その駅は，日清戦争以降太平洋戦争終結まで，おびただしい量の物資と人間がアジアへ運ばれた場所であると同時に，原爆の被災地でもある。岡部昌生は 9 年間にわたって，このプラットホームの縁石を擦りつづけ，総数 4000 点におよぶ記録を残した。高速道路の建設によって消えてしまった遺構の

7)
ヴェネチア・ビエンナーレ
コンセプト案—港千尋
コンセプト：
過去の未来
社会活動としての考古学
プログラム：
会場の場所性への言及
都市と建築のワークショップ
葉書という通信手段





Is There a Future for Our Past?
The Dark Face of the Light
第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館インスタレーション案スケッチ

痕跡であるが，美術家は紙と鉛筆というエレメンタルな記述の方法をつかい，過去を擦りとった。

これは，美術する身体が行なう，「歴史の記述」である。その場所がアジアにおける日本の現在地点を考えるうえで重要であることは言うをまたないが，それ以上に，市民とともに数多くのワークショップ[8]を行い，展覧会だけでなく，擦りとられた痕跡をアエログラムという「手紙」の形式によって各地から発信してきた作家の活動は，世界的にみても重要な意味をもっていると思われる。戦後60年を経てあらたな紛争の危機のなかにある今日の世界において，ひとつの芸術表現が，「過去の分有」と「未来へ向けた対話」のための，社会的活動になりうる。ヴェネチアという，かつて諸文化が出会い交流してきた歴史の土地で，本展覧会は文明論的な意味を内包しながら，建設的な対話に貢献できると信じている。

8)
1988年初めての海外個展。オーストラリア，クィーンズランド州，ヌーサ現代美術館の「NOOSA A NEW DIMENTION」に招請され実施したワークショップ。「ハイスティング街150㍍のフロッタージュ」。
ヌーサは長期滞在型リゾート地で知られる。
制作スタッフ15人と多くの市民が参加。建国200年祭に沸く一方で，先住民族の側から「建国の200年は侵略の200年だ」という声のある中で実施。初めてのワークショップが，参加者のアイデンティティーを問われるという経験は，鮮烈な印象を刻んだ。
最も古い街区のメインストリート150㍍を擦り，街路に平行する海岸で一日だけの展示をした。
これ以降，国内外の都市で市民とのコラボレーションをワークショップとして位置づけ，30回以上実施している。市民とともに都市に手をふれ，生活する場に視線を注ぐ美術の行為だ。

展示コンセプト

展示の中心は壁面を埋め尽くす，およそ1400点の石のフロッタージュである。高さ5m，総延長82mの壁面は，フロッタージュ，そのネガフィルムをはさんだライトボックス，植物標本を埋め込まれた鉄製のグリッドによって覆われる。会場の中心には，広島倉橋島産の被爆石が直線をなして置かれる。長さ16mの石列は，昨年広島市現代美術館でインスタレーションされたものであるが，それがヴェネチアの会場に運ばれることによって，テンポラリーな「歴史の場所」をつくりだす。

会場には，これに加えて市民との「ヒロシマを擦りとる1万人のワークショップ」に呼応する，アムステルダムやバルセロナなど各地の都市に住む市民によって，自発的につくられ作家のもとに送られたフロッタージュのアエログラムを中心に，それ以降もヒロシマ，パリ，光州，根室から発信されつづけられるアエログラムが，痕跡のアーカイヴとして展示される。

またヴェネチア特別プログラムとして，ヴェネチアの歴史と建築を対象にしたワークショップを行い，その成果も新作として反映される。

III 展覧会をつくる

「今回の選出は作家主体と言うよりも企画主体でなされている。つまり，複数のコミッショナーによるプランを競わせるというコンペ形式によって，四つの企画案の中からコミッショナー港千尋，作家＝岡部昌生という組が選ばれたのである。他の組合せは，神谷幸江―小沢剛，椹木野衣―榎忠，清水敏男―李禹煥＋隈研吾といういずれも美術の境界／限界に触れようとする企画と顔ぶれだが，内容を比較すると確かに，「記憶」について長年考えてきたことをまとめた港案の深さに一日の長がある。「記憶」は保護しなければ記憶として機能しない。とりわけ「負の記憶」は。記憶の保護手段は，発展する一方で，急激な社会の高速化・都市化によってかつてない規模で負の記憶が失われていく。それをフロッタージュというシンプルな手段で人々の心に刻印しようとする岡部芸術と，記憶が過去から未来へと受け継がれていくための社会的な方法論を模索する港の思考には深い親和性がある。ベネツィアという諸文化の交流と衝突の歴史を持つ場所でどのような記憶の場が実現されるのか，来年夏の開催への期待がたかまるところである。」(穂積利明「季評美術」北海道新聞 2006.10.18)

ヴェネチアにむかうこの一年

●港千尋→岡部昌生／Tel／2006.4.8●港千尋→岡部昌生／Fax／06.4.15●港千尋→岡部昌生／Fax／06.4.16●港千尋→岡部昌生／Fax／06.4.18●高橋あい→岡部昌生／Post／06.4.19●港千尋→岡部昌生／Post／06.4.21●岡部昌生→港千尋／Post／06.4.29●土澤，花巻，盛岡，川口，東京／06.4.30−5.8●岡部昌生→澤口紗智子・真下紗恵子／Post／06.5.7●ストーンスタジオ石丸勝三架台図面→岡部昌生／Fax／06.5.8●岡部昌生→港千尋／Fax／06.5.10●徳山高校坂本和美・山崎優子→岡部昌生／Fax／06.5.2●展示プランの構想／06.5.9●岡部昌生→コンチネンタルギャラリー樽野真生子／Fax／06.5.10●岡部昌生→らぶふみ企画／Post／06.5.10●大橋三千雄と展示プランの打ち合せ／06.5.11●大橋三千雄展示プラン→岡部昌生／06.5.22●「北海道の美術・この100点」／北海道立近代美術館／06.4.5−6.16●岡部昌生→萬鐵五郎記念美術館平澤廣／Post／06.5.13●岡部昌生→港千尋／Fax／06.5.15●岡部昌生→アイワード奥山敏康・小山学／Post／06.5.16●北海道デザイン専門学校大橋三千雄・濱田枝理→岡部昌生／Fax／06.5.18●岡部昌生→村上美智子／Post／06.5.18●国際交流基金展示会場画像→岡部昌生／Mail●北海道立近代美術館より作品画像提供●展示構想・展示プラン作成●港千尋コンセプト案→岡部昌生／Post／06.5.22●岡部昌生→佐藤友哉／Fax／06.5.23●岡部昌生→港千尋／Fax 釧路／06.5.24●港千尋展示コンセプト→岡部昌生／Fax／06.5.24●岡部昌生→澤口紗智子・真下紗恵子／Post 中標津／06.5.25●岡部昌生→佐藤友哉／Fax／06.5.26●岡部昌生→大橋三千雄，濱田枝理，室田麻生／Fax／06.5.30●港千尋→岡部昌生／Fax／06.6.26●岡部昌生→加藤玖仁子／Post／06.6.27●岡部昌生→港千尋／Fax／06.6.27●岡部昌生→港千尋／Fax／06.6.27●港千尋→岡部昌生／Fax／06.6.29●岡部昌生→港千尋／Fax／06.7.3●高取秀司→港千尋→岡部昌生／Fax／06.7.3●日本旅行→岡部昌生／Fax／06.7.6●第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の参加―岡部昌生／06.7.7●岡部昌生→佐藤友哉／Fax／06.7.7●「第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の参加」→柴田泰，鈴木正實／06.7.7●父逝去／06.7.8●札幌―広島―札幌―広島―周南―神戸―広島―東京―土澤―東京―札幌／06.7.28−8.16●広島芸術学会「ヒロシマの記憶と痕跡のかたち」／広島平和記念資料館メモリアルホール／06.7.29●「オーイ円山」徳山高校らぶふみ企画ワークショップと一日だけの展覧会／旧大潮小学校／06.8.4−8.7●加藤玖仁子→岡部昌生／Post／06.8.5●「平和への祈り，そして，希望」／旧関西学院大学教会／06.8.6●「@つちざわマトリックス2006」／土澤／06.8.10−8.12●国際交流基金→岡部昌生／Fax／06.8.23●岡部昌生→国際交流基金／Fax／06.8.27●北の美術「夕張の子どもたち」／朝日新聞／06.8.27●国際交流基金→岡部昌生／06.9.5●国際交

流基金→岡部昌生／Fax／06.9.8●国際交流基金→岡部昌生／06.9.19●第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館展示記者発表／国際交流基金国際会議場／大久保良夫／桜井友行／清田とき子／高取秀司／建畠晢／港千尋／岡部昌生／2006.9.20●第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館展示計画概要／コミッショナー:港千尋／参加作家:岡部昌生／主催:国際交流基金／協力:森田克巳，澤口紗智子／06.9.20●市丸洋子→岡部昌生／祝電／06.9.20●「北広島の岡部昌生さん，道内で初　ベネチア・ビエンナーレ出品へ」／北海道新聞／2006.9.21●「来年のベネチア・ビエンナーレ日本館の出品作家に「ヒロシマ」テーマの美術家岡部昌生さん」／中國新聞／2006.9.21●国際交流基金サイト／第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展概要／http://www.jpf.go/venezia-biennale/art/j/52/index.html●阿部典英→岡部昌生／祝 Fax／06.9.21●Bien→トキ・アートスペース，岡部昌生／取材依頼／06.9.22●石内都展／東京都写真美術館／06.9.23●岡部昌生→国際交流基金清田とき子・高取秀司／06.9.26●美術科パリ研修旅行／ヴェネチア構想・idem での制作「STUDIO MONTPARNASSE」／06.9.30−10.8●「港千尋さんが日本館を企画」／朝日新聞／06.9.28●「広島の〝皮膚〟で日本館を覆う」／読売新聞／06.10.2●「文化往来／ベネチア・ビエンナーレで「ヒロシマ」問う」／日本経済新聞／06.10.6●国際交流基金　PRESS RELEASE No.190／国際交流基金／06.10.10●中國新聞→岡部昌生→港千尋／Fax／06.10.19●「ベネツィア・ビエンナーレ出品決定岡部—港に高まる期待」／季評美術／北海道新聞／06.10.18●街かど美術館アート@つちざわ／土澤／06.10.7−11.5●札幌—東京／06.10.20−11.11●KAWAGUCHI　MATRIX　2006／KAF／川口／06.10.22−11.3●KAWAGUCHI MATRIX 2006／アートギャラリーアトリア／川口／06.10.22−11.3●ヴェネチア・ビエンナーレ日本館展示事前調査／港千尋，岡部昌生，高取秀司，高内利枝，武藤春美／展示構想，ワークショップのプログラム，ヴェネチア「古井戸のプロジェクト」／06.10.25−10.29●川口市立元郷中学校生徒130人との「カワグチ・マトリックス」／川口／06.11.1−11.12●「場の記憶・歴史こすり取る」岡部昌生展／朝日新聞／06.11.2●シンポジウム「美術で街が活き活き」／@つちざわ／06.11.4●美術館「廃校に華を咲かせよう」／徳山高校らぶふみ実行委員会／旧大潮小学校／周南／06.11.3−11.12●北海道文化奨励賞受賞／06.11.2●「かつて川口を舞台とした『キューポラのある街』という映画があった」／トキ・アートスペース／東京／06.11.6−11.12●国際交流基金／日本館床のパターン→港千尋，岡部昌生，石丸勝三／Mail／06.11.6●広島市現代美術館岡本芳枝→岡部昌生，竹澤雄三／Mail／06.11.17●石丸勝三／展示計画図面→岡部昌生／Mail／06.11.27●岡部昌生→港千尋，高取秀司，高橋あい，澤口紗智子／準備の打ち合せ／Fax／06.11.27●岡部昌生／図面表記→石丸勝三／Fax／06.11.30●2007ヴェネチア・ビエンナーレ日本館プレリポート／BT 美術手帖 12／06.12.1●岡部昌生→港千尋／札幌ミーティング／06.12.5●ヴェネチア・ビエンナーレ準備のための札幌ミーティング／港千尋，岡部昌生，高取秀司，高橋あい，鈴木正實，佐藤友哉，久米淳之，澤口紗智子，真下紗恵子，古家昌伸／札幌大谷短大，北海道立近代美術館／06.12.9−10●「市民がつくった展覧会—岡部昌生と市民サポーター会議」／岡本芳枝 LR RETERNS／06.12.10●カタログのための写真編集／岡部昌生，澤口紗智子，真下紗恵子／06.12.12−26●岡部昌生→広島市現代美術館小松崎拓男／作品借用／06.12.11／06.12.22●広島市現代美術館小橋祥子→岡部昌生／特別利用許可申請書／06.12.27●広島市現代美術館岡本芳枝→岡部昌生／作品輸送計画／06.12.28●「現代アート広がる　ベネチア・ビエンナーレ岡部氏が出品」／北海道新聞／06.12.22●世界のアートシーンと日本作家／Bien／06.12.25●「作ってます!／読売ウィークリー／06.12.31●「現代美術の動向」／週間金曜日／06.12.31●「岡部昌生さんの作品から—加山隆」／南信州新聞／07.1.11●東京大学出版会羽鳥和芳→岡部昌生／カタログ編集／Mail／07.1.12●岡部昌生→港千尋，高取秀司／ビエンナーレ財団に提出する資料／Fax／07.1.12−14●「ベネチアに触れる—港千尋」／UP／07.1.15●岡部昌生→東京大学出版会羽鳥和芳／カタログ編集／Fax／07.1.15●国際交流基金高取秀司→岡部昌生／カタログ提出資料・写真関連／Mail／07.1.24−26●国際交流基金高取秀司→岡部昌生／カタログ英訳関連／Mail／07.1.29●岡部昌生→国際交流基金高取秀司／作業計画／07.2.1●東京大学出版会矢吹有鼓→岡部昌生／Fax／カタログ編集／07.2.2●おおたにの100点／札幌市民ギャラリー／札幌／07.1.31−2.4●岡部昌生→港千尋，高取秀司／東京額装準備／Fax／07.2.7●第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展への協賛についてのお願い／石丸勝三／07.2●出品作品の額装作業・撮影・梱包輸送／澤口紗智子・真下紗恵子／札幌大谷大学／07.2.17−3.15●ビエンナーレ出品作品額装，撮影，シルク印刷，ファイル整理など／澤口紗智子・真下紗恵子／札幌大谷大学／07.2.17−3.31●『街かど美術館アート@土澤シンポジウム・ワークショップ記録集』／街かど美術館実行委員会／07.2.20●「夕張美術館の軌跡，明日へ」／夕張市美術館／夕張／07.2.11−3.25●「浮き上がる84の自刻像—上木和正」／北海道新聞／07.2.21●国際交流基金→札幌大谷短期大学／出張派遣依頼／Post／07.2.28●「ベネチアビエンナーレ岡部昌生氏道内から初参加—古家昌伸」／北海道新聞／07.3.7●読売新聞社編集局文化部高野清見→岡部昌生／取材依頼／07.3.7●札幌大谷大学奨学金支給申請／07.3.7●石丸勝三→岡部昌生　港千尋　高取秀司／HARMOGE 施工図面／Mail／07.3.8●第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展への参加／maitri 66／07.3.9●岡部昌生→アイワード・大丸藤井セントラル協賛依頼／Post／07.3.10●岡部昌生→港千尋・高取秀司／Fax／07.3.10●国際交流基金→港千尋，岡部昌生／ローマ日本文化会館記者発表資料／07.3.13●作品額装東京作業／babot／港千尋，岡部昌生，高取秀司，澤口紗智子，真下紗恵子，高橋あい，吉岡裕記，牧口秀樹，江連尚子，今井里江子／07.3.17−3.23●国際交流基金→港千尋，岡部昌生，石丸勝三／HARMOGE の展示図面／Mail／07.3.20●国際交流基金→札幌大谷短期大学／日本館展示打合せ出張派遣依頼／Post／07.3.23●読売新聞社文化部高野清見記者から取材／広島宇品プラットホーム遺構／07.3.26●岡部昌生→港千尋・高取秀司／Fax／07.4.1●G スクールスペシャルトーク岡部昌生×港千尋／広島市民交流プラザ／広島／07.4.7●「記憶の継承世界に問う—守田靖」／中國新聞／07.4.5●「触れる　広島とヒロシマの境目で—高野清見」／読売新聞／07.4.7●国際交流基金→札幌大谷短期大学／日本館展示打合せ出張派遣依頼／Post／07.4.10●貨物通関・出航／東京—ジェノヴァ／07.4.13●「夕張市美術館　存続の途を探って—吉田豪介」／21ACT／07.4.15●岡部昌生→朝日晃／Post／07.4.15●「ヴェネチア攻防史　アジア=パシフィック各国のビエンナーレ戦略」／ART iT／07.4.17●「美術のオリンピック　ベネチア・ビエンナーレ美術展日本代表」／札幌大谷大学大学案内／07.4.17●日本館展示計画／岡部昌生，石丸勝三，澤口紗智子，真下紗恵子，今井里江子，高橋あい／作業日程・作業分担・展示図面・作品シール・梱包計画・作業用品・作品管理・ワークショップ関連●澤口紗智子→岡部昌生←港千尋／タカトリメール／Mail／07.5.8−9●『第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展総合カタログ』／07.5.10●Bon Lavoro!ボン・ラヴォロ!岡部昌生氏壮行会／はるや／07.5.13●貨物ジェノヴァ到着・通関●札幌→東京／07.5.17●『MasaoOkabe-Is There a Future for Our Past? ／Edited by Chihiro Minato』／国際交流基金／07.5.17●『岡部昌生　わたしたちの過去に，未来はあるのか／港千尋[編]』／東京大学出版会　7.5.17●東京大学出版会，国際交流基金／07.5.18●成田→パリ／07.5.20●パリ idem で制作／07.5.21●パリ→ヴェネチア／07.5.23●日本館展示打ち合せと作業　作品＋架台＋被爆石＋ファイルボックス＋ライトボックス／港千尋，岡部昌生，高取秀司，武藤春美，石丸勝三，澤口紗智子，真下紗恵子，今井江里子，高橋あい，吉岡祐記，牧口秀樹，江連尚子，マッシモ・コンサ，アレッジオ・パスコーロ／展示・ワークショップシフト作成／07.5.24●ヴェネチア・古井戸のプロジェクト開始／07.5.25●広島から竹澤雄三ツアー，内藤瑞保サポーター／07.5.26●壁面展示作業終了／07.5.28●架台，石の設置作業開始・ワークショップの準備／07.5.29●「喪失と再生問う　岡部昌生さん」／岩手日報／07.5.25●「ヴェネチア通信　岡部昌生 in ビエンナーレ第1信　パリ・モンパルナスからの第一歩」／澤口紗智子・真下紗恵子／北海道新聞／07.5.28●加納士朗サポートに参集／07.5.29●ヴェネチア建築大学とのワークショップのためのセミナー／港千尋　岡部昌生　高取秀司フランチェスコ・アルヴィーゼ／ヴェネチア建築大学／07.5.30●「ヴェネチア通信　岡部昌生 in ビエンナーレ第2信　日本館で展示作業スタート」／今井里江子／北海道新聞／07.5.31●港カテリーナ san，北海道新聞社文化部古家昌伸記者ヴェネチア入り／07.6.1●「Dear Mr. Masao Okabe Bill Viola の私的なメモ」／07.6.3●映像とインタヴュー（荒木隆久ほか多数）／07.6.3●サン・ジュゼッペ小学校（サン・マルコ）で打ち合せ●IMAI San BIRTHDAY／07.6.4●ヴェネチア建築大学とのワークショップ／アルセナーレ（旧造船所）／07.6.5●「歴史や記憶の継承問う」／信濃毎日新聞／07.6.5●「ヴェネチア通信岡部昌生 in ビエンナーレ第3信　作業も終盤，スムーズに」／今井里江子／北海道新聞／07.6.5●ビエンナーレ財団特別内覧／06.6.6●広島からサポーター／07.6.7●プレス内覧会日本館で「ヴェネチアのヒロシマ」のワークショップ　メディア等の取材殺到／07.6.7−6.10●日本館ヴェルニサージュ／港千尋＋岡部昌生　オープニングあいさつ／ヴェネチア／07.6.8●写真家ユジェン・バフチャルとのコラボレーション＋プレス発表＋ワークショップ＋レセプション／日本館／ヴェネチア／07.6.8●「ヴェネチア通信　岡部昌生 in ビエンナーレ第4信　盛況　初のワークショップ」／古家昌伸／北海道新聞／07.6.8●「ベネチアでヒロシマ問う」／中國新聞／07.6.8●グッケンハイム美術館一行来館（日本館）／07.6.8●「Scheletri della Corea, le tragiche revine di Hiroshma」／IL GAZZETTIINO／07.6.9●グッケンハイム財団理事長主催夕食会／07.6.9●「ヴェネチア・ビエンナーレ　岡部さん参加　現地で今日開幕」／北海道新聞／07.6.10●サン・ジュゼッペ小学校生徒とのワークショップ／サンフランチェスコ・デッラ・ヴィーニヤ修道院／ヴェネチア／07.6.11●ヴェネチア・ビエンナーレ財団ガイドツアーのためのワークショップ／日本館／ヴェネチア／07.6.12●「ヴェネチア通信　岡部昌生 in ビエンナーレ第5信　内覧会そして開幕　他者とともに希望問い続け」／古家昌伸／北海道新聞／07.6.12●ヴェネチア建築大学とのワークショップ／日本館／ヴェネチア／07.6.12●ヴェネチア・ビエンナーレ財団教育プログラム子どものためのワークショップ／日本館／ヴェネチア／07.6.13●グランドオープン開会式（ジャルディーニ，イタリア館前）／07.6.10●日本館ワークショップ「ヴェネチアのヒロシマ」／全会期中 07.6.10−11.21●日本館サンクス夕食会（リド島）●第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館／岡部昌生　わたしたちの過去に，未来はあるのか／ジャルディーニ日本館／国際交流基金／ヴェネチア／07.6.10−11.21

40日の海の道の旅を経て，ヴェネチアに運びこまれたモノは，わたしのヒロシマにかかわった総体とも言えるものだ。

9年間にわたる広島・宇品から生まれたフロッタージュ作品ほぼ4000点の中から，「AFTER UJINA」の植物標本，中國新聞，宇品の土のドローイングなどふくめた1555点。フロッタージュのリスネガを装填したライトボックス30個，フロッタージュ・アエログラムのファイル120冊1500通，被爆石27個4トンの重量，ワークショップの用紙4000枚と鉛筆，錆びた鉄製架台，鉄製ボックスそして工具類。これらのモノがわたしたちのコンセプトによって組み立てられ，大きな空間をつくりあげることができた。多くのサポーターたちの手の作業によって，

なにより，多くの人とつながり共有できるものがある美術の時間であったことが嬉しい。当初，「壮大崇高な空間」の創出を意図したが，出来上がった空間は，「ヒロシマ」の皮膚に抱かれる，歴史の痕跡に入り込む，記憶と向き合わせるという印象をもつだろうと思った。静かだが，強い。美しい空間の生まれたことの実感である。

Ⅳ 希望，他者とともに問い続け ヴェルニサージュあいさつ[9)]

過去を現在に引き寄せる，問いのかたち―岡部昌生[10)]

みなさん　こんにちは。
広島から生まれた作品が，40 日間の海の道の旅を終え，アドリア海の交易都市ヴェネチアに着きました。ここに三つのヒロシマを持ってきました。

ひとつは，
1500 点ものフロッタージュによって取りだされた（記述された）ヒロシマの皮膚のような場の痕跡です。いまは，消滅してしまったかつての軍港につながる宇品駅のプラットホームの石を擦りとったものです。ここは，四つの大きな戦争で夥しい兵士と兵器がアジアへと出ていった場所であり，1945年8月6日，原爆によって被爆した場所でもあります。いわば，戦争の加害と被害の境界線を象徴するような場所です。 9 年間この場に立ち，この石に向かい，4000 点を超えるフロッタージュによって過去を擦りとった，その一部です。日本館の壁面を埋めつくす。この皮膚のような空間に抱かれる，歴史の痕跡に入り込むという印象を受けるだろうと思います。

ふたつめは，
ほぼ 4 トンの広島宇品のプラットホームの縁石です。この石（倉橋島産の花崗岩）は，地球創世の強い火と光のエネルギーから生まれ，61 年前，核の光と火によって再び焼かれた被爆石です。隙間に潜む閃光の記憶。石に刻まれた膨大な火の記憶。手に伝わる火照り。触れると手に記憶が宿るかのように思われます。空間に設置されたプラットホームの直線性は，テンポラリーな歴史の現場をつくります。

三つめは，
私の広島での作業を支援してくれた多くの人々の気持ちです。紙と鉛筆というエレメンタルな記述の方法で都市に触れ，記憶を記録することを 30 年にわたりやってきました。それは，過去を現在に引き寄せる行為でした。このダイレクトでシンプルな手法はまた，多くの人々と共有できるもので，しばしば，市民の方とのワークショップを展開してきました。

私は「ヒロシマの記憶の継承とは」という問を問いながら，ヒロシマの痕跡に触れてきました。なにより，取りだされた都市の断片が，断片ゆえにイマジネーションをかきたて，手に触れる都市の感触が身体に刻まれる，その触覚の記憶の記述こそめざす私の美術であり，プリント・ワークであり，広島の地で広島の人々となしえた美術の行為でした。これに参加した一人が言います。「フロッタージュは，現在のわたしたちの生にふれることのできる普遍性をもつ行為です。ヒロシマを擦りとるプロジェクトは，アーティストと市民とのコラボレーションであり，ヒロシマの記憶に触れ，次代へと継承することのできる美術の行為です」と。

このヴェネチアでもワークショップの計画があります。展示の被爆石を擦りとるというワークショップは，展覧会のコンセプトをわかりやすく伝え，体験してもらえる機会として，会期中継続して行なう重要なことと位置づけています。また，市民とのヴェネチアを巡る計画。広場の中心には必ずある井戸を擦りとるプロジェクトも進行中です。水の都の水を確保する切実な戦いの知恵のかたちに触れると同時に，界隈のコミュニティの問題にもどきます。

私の美術は，「他者の力」「他者の手応え」というものに支えられてきました。今回のヴェネチア・ビエンナーレのインスタレーションもまた，多くの方がたの力をえて，私の「美術の力」といたしました。感謝し，お礼申し上げます。ありがとうございました。

9)
2007年 6 月 8 日午後 5 時半，ジャルディーニ（公園）日本館の前庭で美術関係者，メディアに向けて行なわれた。レセプションには300人程が参加。はじめにコミッショナー港千尋が英語のスピーチで，次にアーティスト岡部昌生が英訳つきでともに今回のコンセプトにそいながら話した。このあと，会場に設置している被爆石を擦りとる「ヴェネチアのヒロシマ」のワークショップが，参加者とサポーターもまじえて行なわれた。

10)
岡部昌生
1977年よりフロッタージュによる制作を路上から始める。
79年，パリ，イヴリ・シュル・セーヌに滞在，169点の「都市の皮膚」を制作。
87－88年，広島市現代美術館の制作委託「ヒロシマ― 8 月の路上 1987／88」（ 7 点組）を制作。
96年，パリ三区マレのユダヤ人居住地ロジエ街で，拉致の史実を刻む銘版を擦りとった「N'OUBLIEZ PAS　忘れない」を制作。この時期からパリ，ヒロシマ，ネムロ，光州からのフロッタージュ・アエログラム（航空書簡）・プロジェクトを開始する。
88年，オーストラリア，ヌーサで市民との150mのフロッタージュ・コラボレーションを実施。以来，国内外の都市でワークショップや制作，展覧会を展開している。
2007年，第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館代表展示作家となる。
2009年，台湾，新荘市楽生院ハンセン病棟群で「MASAO OKABE 楽生1929－2009」を実施した。

記憶―創造と想起のちから―港千尋[11)]

こんにちは。
今日こうして，みなさんといっしょに第52回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館の展覧会をオープンできることを心から嬉しく思います。展示の企画から一年以上かかったこの展覧会は，岡部昌生のライフワークであるヒロシマの作品を，可能な限りその総体において提示するものであり，その意味でここにはひとりの美術家の歩みが凝縮されていると思います。ひとりの人間が，ひとつの時代とどのように向き合い，どのように格闘し，どのように他者と分かちあってきたのか。自由にご覧いただきたいと思いますが，まずコミッショナーとして簡単に，ここに含まれる時間について述べたいと思います。

フロッタージュには，1894，1945，2004という三つの数字が記されています。1894年は，広島の宇品駅が建設された年であり，1945年は原子爆弾の投下によって被爆した年です。ちょうど第一回目のヴェネチア・ビエンナーレが駅の建設の翌年1895年です。これらは歴史的時間であり，特にわたしたちの近代性を再考するために重要な年号といえるでしょう。

次の2004年は，美術家が遺構として残された宇品の石を擦り取った年を表しています。彼は9年間の年月をかけて同じ場所の同じ石を繰り返し繰り返し，擦り続けました。紙の表面に浮かび上がる形は一枚一枚少しづつ異なり，それらのイメージはときに地震計のような震えを，ときに胎児の姿を描くエコグラフィーのような波動を思わせます。なぜなら，それらの痕跡は石の表面を写しているだけでなく，ひとりの人間の肉体と精神の状態を反映しているからでしょう。フロッタージュは外の世界と内なる意識とを同時に擦り取る技術なのです。ここにあるのは個人的時間，ふつう「人生」と呼ばれる時間です。

紙を擦ると見えなかったかたちが現われる。その不思議は，誰もが子どものころに体験したものでしょう。アジアでは書かれた文字を拓本というかたちで伝達し，共有するという，もっとも古い印刷技術として，今日まで親しまれている方法でもあります。岡部はこの初源的な手法をつかい，都市そのものを版とする活動を行なってきました。その過程で，多くの人々といっしょに擦り，ディスカッションを重ねるという共同作業を実現しました。美術への参加として生まれたその時間は，社会的時間とよぶべきものでしょう。

「記憶」という言葉は非常に幅の広い意味をもっていますが，少なくとも人間に関する限り，そこには以上のような，異なる時間の相が含まれていると思います。これら三つの時間は互いに互いを包含しあいながらも，ときに対立し，矛盾をさらけ出し，時間の裂け目を露わにする。今日，そのような裂け目はいたるところに見ることができるでしょう。東アジアも含め，いまこのときにさえ，世界では歴史の認識をめぐる裂け目のみならず，核兵器の脅威さえもが現実となりつつある。人類が蒙った核の惨禍は忘れられたのでしょうか。記憶の問題をめぐる混迷は，深まるばかりと言わざるをえません。「希望」や「平和」という言葉は，どんな言語でも数秒で言うことができるでしょう。しかしそれをかたちのあるものとするには，何年もいや何十年もかかることを忘れるわけにはいきません。

この展覧会は，ひとつの問いの形であり，けっして答えを出そうとするものではありません。しかしながら，わたしたちは希望も平和も，問いを続けることを通してのみ，実現が可能であると思います。さらに言えば，他者とともに問い続けることにこそ，わたしたちの力があると信じなければなりません。この展覧会もまた，その企画から実現まで非常に多くの人々との協同作業によって実現されました。ひとりひとりのお名前はあげませんが，これまで力を合わせてこられたみなさまに，深い感謝の気持ちをささげます。

この二週間あまり，一点一点の作品をみなでいっしょに展示しながら，わたしはこれらの痕跡のなかから立ち上がってくる人間の気配を，少しずつ感じてきました。それはすこし不思議な，見知らぬ誰かにそこで待っているという感じでもありました。もしかすると，わたしたちはすべて，過去に生きた誰かに期待されて生まれてきたのかもしれません。それは死者たちの期待でもあるとともに，彼らの問いでもあるでしょう。

わたしたちの過去に，未来はあるのか。

もしわたしたちが，死者たちの期待を背負って生まれてきたのなら，それに応えることは，いま生きているわたしたちの責務でありましょう。人間の想像力はそのために与えられたものであり，そこにおいてこそ，わたしたちの創造性は最大の強みを発揮するものであると，わたしは深く信じています。ありがとうございました。

11)
港千尋
写真家，批評家，映像人類学者。1960年生まれ。多摩美術大学情報デザイン学科教授。2007年にヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館コミッショナーを務め，岡部昌生の作品を紹介。著作に『群衆論』(リブロポート1991　ちくま学芸文庫2002)，『記憶』(講談社1996サントリー学芸賞)，『映像論』(日本放送出版協会1998)ほか多数。
写真集に『瞬間の山』(インスクリプト2001)，『文字の母たち』(同2007)，『レヴィ=ストロースの庭』(NTT出版2008)ほか。
編著に『岡部昌生　わたしたちの過去に，未来はあるのか』(東京大学出版会2007)ほか。
写真家として日本，アジアおよび欧米各地で展覧会を開催。

ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展　日本館展示作業からヴェルニサージュまで

文化

季評「美術」

7―9月　穂積利明

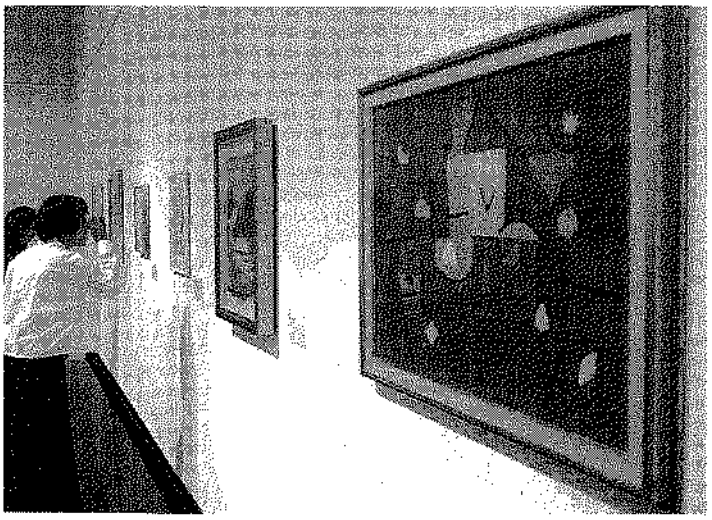
ベネツィア・ビエンナーレ出品決定
岡部―港に高まる期待

比較的穏やかに推移したように見える今年の夏の北海道アートシーンだが、九月の後半になって大きなニュースが飛び込んできた。北広島市在住の岡部昌生が、来年開催予定のベネツィア・ビエンナーレの日本館出品作家に選ばれたのである。

このもっとも長い歴史を誇る大型国際美術展は、国別の展示によって各国が競い合う形式をもち、美術のオリンピックとも称される。国別のあり方には「大時代的な帝国主義」といった批判もあるが、ベネツィア・ビエンナーレはこのシステムのおかげで、数ある国際展の中でも、最も注目度が高い展覧会となっていることは否定できない。ここに日本館の唯一の作家として出品することは、いわばアートの「メダル候補」としての活躍が期待されているということでもある。

ただし、今回の選出は作家主体と言うよりも企画主体でなされている。つまり、複数のコミッショナーによるプランを提出させて競わせるというコンペ形式によって、四つの企画案の中からコミッショナー＝港千尋、作家＝岡部昌生という組が選ばれたのである。他の組み合わせは、神谷幸江＝小沢剛、椹木野衣＝榎忠、清水敏男＝李禹煥＋隅研吾といういずれも美術の境界／限界に触れようとする企画と頷ぶれだが、内容を比較すると確かに、「記憶」について長年考えてきたことをまとめた港案の深さに一日の長がある。

「記憶」は保護しなければ記憶として機能しない。とりわけ「負の記憶」は。記憶の保存手段は発展する一方で、急激な社会の高速化・都市化によってかつてない規模で負の記憶が失われていく。それをプロッタージュというシンプルな手段で人々の心に刻印しようとする岡部芸術と、記憶が過去から未来へと受け継がれていくための社会的な方法論を模索する港の思考には深い親和性がある。ベネツィアという諸文化の交流と衝突の歴史を持つ場所でどのような記憶の場が実現されるのか、来年夏の開催への期待がたかまるところである。



道立近代美術館で展覧会が開催されたパウル・クレーの道程にも、「負の記憶」が刻印されている。クレーの絵画には初期から一九二〇年代までの細やかな線と水彩画のようなみずみずしい色合いをベースにした繊細な表現の時期と、三七年ごろから没年までの太くゆったりとした線によるユーモラスな表現の時期というふたつの安定期があり、これら安定期の間は、造形的にも揺れに揺れ、時にはっとするほどの悪魔的なイメージを見せたりする。三二年の素描作品「助けを求めて」にあらわれた人物の身ぶりのうちには、ナチス体制への強烈な皮肉と救済への願いがこめられている。「パウル・クレー　創造の物語」（八月二十九日―十月九日）＝写真＝は、作家のささやかな手仕事の中に、そうした時代の傷に癒しをはせることができるような展覧会であった。

他に美術館の展覧会としては「板津邦夫展」（七月八日―八月二十七日、道立旭川美術館）、「北の彫刻展二〇〇六」（八月二十六日―十月九日、札幌彫刻美術館）というふたつの彫刻展に注目した。いずれも素材から立体表現の可能性を探ったように見える企画だが、むしろ各作品に使われた素材の限界を忘れさせてくれるところに面白さがあろう。また、札幌芸術の森美術館の「ガンダム展」（八月六日―九月二十四日）も、ガンダムという人気アニメーションをエクスキューズとして使いながら、多様な素材技法を厳使する現代アートの先鋭を見せるような部分が、意外に楽しい展覧であった。

ギャラリー展では、札幌での個人の展覧会に意欲的な発表が目立った。名前をあげると、合田尚美（ギャラリー門馬アネックス）、中橋修（同）、笠原康大（札幌アーティストギャラリー）、村田由紀子（紀伊国屋ギャラリー）、矢崎勝美（札幌時計台ギャラリー）、千代明（同）、田畑卓也（SOSOカフェ）、武田浩志（CAI）、渋谷俊彦（同）など。いずれも今後の表現の深化が楽しみだ。

（ほづみとしあき＝道立三岸好太郎美術館主任学芸員）

◇

三カ月に一回掲載します。

北海道新聞　2006年10月18日夕刊

ベネチア・ビエンナーレ出品

北広島の岡部昌生さん、道内初

北広島市在住の美術家岡部昌生さん(六四)=札幌大谷短大教授=が、来年六月から十一月までイタリアのベネチアで開かれる第五十二回ベネチア・ビエンナーレ美術展の日本館出品作家に唯一選ばれ、二十日に東京で会見が行われた。一八九五年に創設され、国際美術展で最も長い歴史を誇る同展に道内在住の作家が選ばれたのは初めて。展示を企画するコミッショナーと作家の組による四つの応募案から、港千尋・多摩美大教授と岡部さんの組が選ばれた。

来年のビエンナーレに向けた抱負を語る岡部さん

岡部さんは二十年以上前から、歴史的な建造物や街路に紙を当て、鉛筆などで凹凸をこすり取り作品化する「フロッタージュ」という技法で制作を続けてきた。十年前からは広島の市街地とかつての軍港を結んだ旧宇品駅のプラットホームの作品化に取り組んできた。被爆六十年の昨年は、広島と道内各地で市民参加のワークショップを展開した。

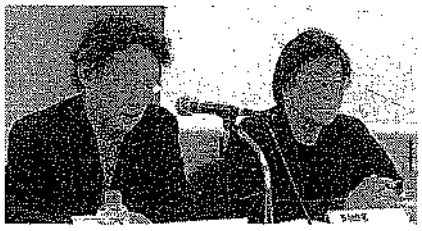
今回の展示は、広島で制作した約四千点のうち約千四百点で日本館の壁を埋め尽くすように展示する予定。岡部さんは「広島での九年間の仕事の総体を見てほしい。ワークショップを行うことも考えている」と抱負を語った。

北海道新聞　2006年9月21日朝刊

港千尋さんが日本館を企画

ベネチア・ビエンナーレ

イタリアのベネチア市で来年6月に始まる国際美術展ベネチア・ビエンナーレで、日本館を主催する国際交流基金が同館の内容を発表した。展示を企画するコミッショナーに写真家で評論家の港千尋さん=写真左=を選び、出品者は北海道在住の美術家岡部昌生さん=同右=に決まった。



岡部さんは、地面や壁に紙を当て、鉛筆でこすり取る「フロッタージュ」という技法で知られる。日本館の展示では、被爆地で軍港にもつながっていた旧宇品駅（広島市）の縁石を写した作品1400枚を壁に張る。岡部さんは「広島の皮膚のような作品で会場を覆いたい」と述べた。

同基金は近年、最初から1人のコミッショナーを選んできたが、今回は10年ぶりに6人を指名、案を募った。国際展事業委員（建畠晋委員長）が選考し、提案があった4人から岡部展を企画した港さんを選んだ。会期は07年6月10日から11月21日まで。（西田健作）

朝日新聞　2006年9月28日

来年のベネチア・ビエンナーレ

日本館の出品作家に

「ヒロシマ」テーマの美術家 岡部昌生さん

フロッタージュで構成

来年、第五十二回を迎える世界屈指の国際美術展ベネチア・ビエンナーレの日本館の出品作家に、ヒロシマをテーマに制作を重ねる岡部昌生さん(64)＝北海道北広島市＝が決まった。日本館展示を主催する国際交流基金が二十日、発表した。

岡部さんは、路上や建造物の凹凸を歴史の記憶として紙に擦り取るフロッタージュ作品で知られる。一九八〇年代後半から三十回余り広島入りし、被爆遺物から無数の作品を生み出してきた。

イタリア・ベネチアでの展示は来年六―十一月。構想では、現在は撤去された広島市南区、旧国鉄宇品駅プラットホームの石のフロッタージュをメーンとする。「多くの兵士を送り出した加害の記憶と、原爆の閃光を浴びた被害の記憶をともに刻んだ石」として、岡部さんが九年間に四千枚もの擦り取りをした執念の作で、日本館の壁面を埋め尽くす。

岡部さんは指名コンペティションに応募した四組の作家から選ばれた。「広島の人々に支えられて制作してきた。そのつながりごとベネチアに持参し、世界につながりを広げたい」と意気込みを語った。（道面雅量）

旧国鉄宇品駅跡でフロッタージュの制作に打ち込む岡部さん（2004年）

中國新聞　2006年9月21日

「広島の〝皮膚〟で日本館を覆う」

第52回ベネチア・ビエンナーレ

来年6月開幕する第52回ベネチア・ビエンナーレ美術展の日本館展示の概要が、国際交流基金（東京・赤坂）から発表された。

展示を総括するコミッショナーの選考は第46回以来、12年ぶりに評論家や学芸員から企画案を募る指名コンペ形式で行われ、港千尋・多摩美術大学教授(46)に決まった。港氏が選んだ美術家の岡部昌生氏(64)が出品する。

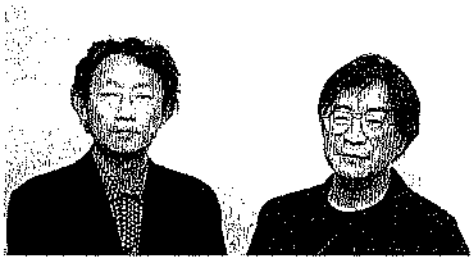
岡部氏は北海道根室市生まれ。路上や建物に紙を当て、鉛筆などでこすり表面を写し取るフロッタージュという手法で、都市や人々の記憶を喚起する作品を発表。近年は広島の被爆建物などを対象に制作してきた。

ベネチアでは、外地に兵を送り出した軍都・広島の宇品港にあった駅のプラットホームの敷石を、9年間かけて4000枚写し取った中から1400点と、敷石の現物などを展示する。

港氏は「歴史的現実の記憶と物質を、どのように未来へ受け渡していけるのか、世界に問うことが出来るのではないか」と述べた。岡部氏も「ヒロシマの〝皮膚〟のようなもので日本館の内部を覆い、歴史の現場を仮設したい」と語った。

コミッショナー応募者は4人で、港氏と美術評論家の椹木野衣氏の決選投票となり、3対2で港氏に決定したという。椹木氏が選んだ美術家は榎忠氏だった。

同ビエンナーレは2年に1度開かれ、最も注目される現代美術の国際展。日本は1956年完成の日本パビリオンを使用する。会期は6月10日から11月21日まで。



ベネチア・ビエンナーレ日本館のコミッショナーに決まった港千尋氏（左）と、参加作家の岡部昌生氏

読売新聞　2006年10月2日朝刊

文化往来

ベネチア・ビエンナーレで「ヒロシマ」問う

日本人が「ヒロシマ」を語るとき、多くが原爆投下を受けた被害者の側に立つだろう。しかし広島は戦時中、六百万人もの兵士と物資をアジアに送り出した大日本帝国屈指の軍港の街でもあった。

被害者と加害者、その二つのヒロシマを見つめ、表現してきた美術家、岡部昌生が来年の国際的美術展、ベネチア・ビエンナーレの日本代表に選ばれた。

岡部は物の表面に紙をあて凹凸を鉛筆でこすり取る「フロッタージュ」を制作する。一九九六年から九年間にわたり広島に通って、軍の遺構である旧宇品駅のプラットホームをこすり続けた。日本一といわれたプラットホームの長さは、約五百六十㍍あった。全部で四千枚に及んだフロッタージュ作品から千四百枚をベネチアに持ち込み、日本館の内部を覆う。被爆したプラットホームの石も床に並べる計画だ。

企画したコミッショナーの美術家、港千尋は「戦争や開発によって過去の文化の破壊が進む現在、記憶と物質を次代にどう受け継ぐか、という社会に突きつけられた重い問いに対する美術側の一つの答えにしたい」と語る。展示テーマは「わたしたちの過去に、未来はあるのか」。忌まわしい過去の記憶から、未来に続く対話の糸口を探す試みだ。

日本経済新聞　2006年10月6日朝刊

文化往来

ベネチアで街の「記憶」を掘り起こす

イタリア・ベネチアで開催中の現代美術展、ベネチア・ビエンナーレ日本館に出品している美術家の岡部昌生とコミッショナーの港千尋がこのほど行った中間報告は、美術と街の関係を考える上で興味深い問題を示唆した。

港は、ベネチアが観光都市として多くの来訪者を集める一方で、自動車が街中を走れず近代化が難しいなどの理由による人口の激減が問題になっていることを指摘。同ビエンナーレも世界中から人を集めるものの、市民の入場は少なく、国際美術展と開催地の住民のかかわり方についても見直すべき点があることに言及した。

岡部はそうした状況を踏まえて、市民を対象にしたフロッタージュ（鉛筆によるこすり出し）のワークショップを会場の外で開いたことを報告した。フロッタージュは、それぞれの場所にしみついた「記憶」や「歴史」を紙に写し取ることを目的に岡部が三十年来続けている技法だ。五、六月のワークショップでは、修道院の中や造船所跡周辺で小学生から高齢者までの多くの市民が路面や壁など思い思いの場所でフロッタージュに臨み、街の「記憶」を掘り起こす体験を楽しんだという。

岡部は「美術に人と街をつなぐ力があることを少しでも分かってもらえたのでは」と話している。

日本経済新聞　2007年10月8日朝刊

オープニングパーティーにも異色の趣向があった「FIX・MIX・MAX!」＝11月11日

美術

現代アート広がる

ベネチア・ビエンナーレ　岡部氏が出品へ

秋から年末にかけて、現代美術にかかわる話題が豊富だった。

九月、北広島市在住の美術家岡部昌生＝札幌大谷短大教授＝が、第五十一回ベネチア・ビエンナーレ（二〇〇七年六―十一月）日本館の唯一の出品作家に決まった。岡部は広島の戦争と被爆の歴史をフロッタージュ（こすり取り）の技法で浮かび上がらせ、記憶に定着させる仕事を続けてきた。道内在住作家の出品は初めて。

札幌の道立近代美術館で十一月に開かれた「FIX・MIX・MAX!」には正味九日間で三千二百人以上が入場したことも、現代アートの作家たちを勇気づけた。主催者らが目指す「北海道発の国際美術展」は過去にも何度か試みられたが、今回は企画や運営面で市民活動の色彩が濃く、従来の美術ファンと違う「客層」に存在をアピールした点で異なる。このスタイルが定着するかどうかは、今後の継続的な活動にかかっている。

札幌宮の森美術館が招いたクリストとジャンヌ・クロードの講演会（十月二十九日）では、公共建築物を梱包したり、巨大な傘を並べるなど、独特の表現方法で繰り広げてきた気宇壮大な仕事が美術関係者に大きな刺激を与えた。

また今年は、「北の日本画展」「北海道立体表現展」「水脈の尚像06」展、「具象の新世紀展」など、各分野の主要作家を糾合したグループ展が、隔年、三年に一度の開催を含めて集中する年となった。それぞれ、美術界の今の水準を反映したと言える。

個展では日本画の福井爽人、彫刻の板津邦夫や伊藤隆道、絵画の小野州一、写真の水越武といったベテランの回顧展が収穫。教え子や有志が企画した苫小牧の遠藤ミマン展も心に残った。

ほかに、道立近代美術館の「浮世絵美人画の魅力」「鑑賞和上展」「パウル・クレー」展、「アイヌ文様の美」展（開催中）や、道立旭川美術館の「空海マンダラ」展が話題を集めた。札幌芸術の森美術館の「Lovely」「この20年の、20のアート」（開催中）も現代アートの秀逸な企画展だった。

道立釧路芸術館がこの春から指定管理者制度に基づく運営に代わったことは、自治体財政の破たんで閉館の危機に直面している夕張市立美術館と意味合いが違うものの、美術館の将来を考えるうえで重大な「事件」だった。

（古家昌伸）

北海道新聞　2006年12月22日夕刊

イタリアの「水の都」を舞台に隔年で開かれ、百年を迎える歴史と審査制度の存在から「美術のオリンピック」とも呼ばれるベネチア・ビエンナーレ美術展。今年六月からの第五十二回展には、フロッタージュ（こすり取り）の技法で制作してきた北広島市在住の美術家岡部昌生＝札幌大谷短大教授＝が、道内在住者では初めて、日本館出品作家として参加する。その岡部と、日本館コミッショナーを務める港千尋＝写真家・評論家・多摩美大教授＝に、展示コンセプトなどを聞いた。

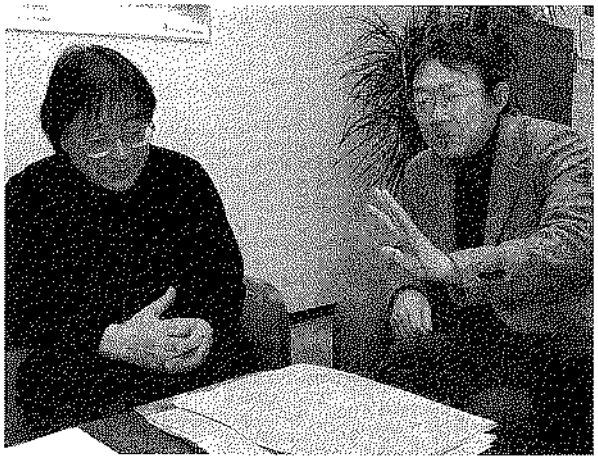
（古家昌伸、敬称略）

ベネチア・ビエンナーレ 岡部昌生氏 道内から初参加

昨秋、日本館展示を主催する独立行政法人国際交流基金（東京）が、港と岡部を交えて今回の展示概要を発表した。この席で二人を「日本代表」と位置づけての質問が相次いだ。ベネチア・ビエンナーレは総合ディレクターなどによる企画展とパビリオン形式の国別展示が柱。事実上、国対抗で最高賞の金獅子賞を選ぶ仕組みのため、参加各国の競争意識は強い。

日本館出品作家は美術館や美大関係者らがつくる国際展事業委員会の推薦を受け、国際交流基金が決定する。今回は二年前に続き、コミッショナー候補を委員会が指名する「指名コンペティション方式」を採用した。四人の候補が展示プランを提出し、岡部を起用する提案が選ばれた。

岡部は三十年前から街や建物の凹凸を紙にこすり取るフロッタージュ作品の制作に取り組んでいる。都市を「巨大な版」とみなし、フロッタージュ作品を「都市の皮膚」とも呼ぶ。紙を



ベネチア・ビエンナーレ美術展の展示プランを語る港（右）と岡部

フロッタージュ技法で出品「ヒロシマの総体再現したい」

こすり取る手の運動（ストローク）によって、こすり取る対象の「歴史に触れる」ことを意識してきた。

被害と加害

一九九六年に広島でフロッタージュのワークショップを開いたのを機に、岡部は広島港に近い旧国鉄宇品駅の長大なプラットホームと向き合う。原爆の熱線も浴びたこのホームを、被爆都市ヒロシマと、海外出兵の拠点だった軍港という「加害と被害の境界にある遺構」と位置づけ、繰り返し訪れて計四千点の作品を制作した。高速道路建設に伴い、ホームが撤去された二〇〇四年以降も広島訪問は続く。市民参加のワークショップを並行して行うのも特徴で、〇五年には広島での活動と連携して国内各地でも「北海道の近代をこすり取るワークショップ」を行い、広島の仕事の集大成となる展覧会で紹介した。

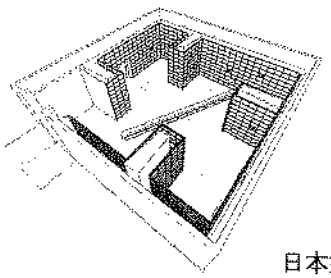
こうした岡部の制作姿勢から、港は展示タイトルを「わたしたちの過去に、未来はあるのか」と定めた。「過去の記憶をどうやって未来に受け渡すかという問題意識を持ってきた。発掘などで多くの歴史を知るが、それは都市の再開発で簡単に破壊される。ある種の矛盾と言えるが、歴史はそれに耐えられないこのような状況に対し、美術の側からの応答としてあるのが岡部さんの仕事だろう」と港は語る。歴史の痕跡をこすり取る作業は「美術家が直接、体を使って歴史を記述し、その場所でと未来に持っていくことと言える」。

歴史再発見

展示には大きな課題があり、岡部を悩ませた。それは日本館の特異な形だ。床面は十六対四方の正方形だが、縦四面すべてに建物を支えるための突起がある。岡部はこれまで作品を映したネガをライトボックスに組み込んで円弧状に配置するなど展示にも工夫してきたが、この構造では相応な展示は難しく、「平面図を見て出品を断念しようかとも考えた」ほど。

だが、信頼を置く写真家安斎重男＝東京在住＝の意見で、壁全面をグリッド（格子）で覆い、そこに作品を張ったパネルを埋め込むことにした。宇品でのフロッタージュや、航空書簡（アエログラム）を活用した作品、ホーム撤去後に現地で採取した植物や土の標本。さらにホームの縁石（被爆石）も運んで並べる。制作の様子を伝える映像とともに、千数百点の作品が鑑賞者を囲む。岡部は「広島と九年間向き合ってきた、その総体を再現したい。歴史の現場の中に入り込む印象を受けるだろう」と話す。

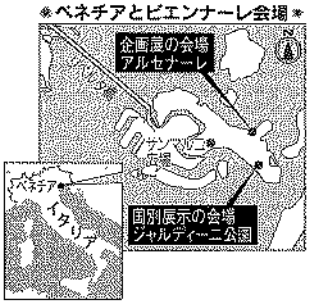
二人は昨年暮れ、現地を訪れた。ベネチア建築大学で教えるアルビーゼさんに展示案を伝えたところ、意外な反応が返ってきた。長い歴史を誇るベネチアを、彼は「記憶がない街」と呼ぶ。アドリア海に突き出した島部分の人口は五〇年代には約十五万人を数えたが、六六年の洪水以降、観光都市としての商業と裏腹に六万人台に激減し、空洞化が進む。アルビーゼさんは岡部が現地で行うフロッタージュのワークショップに注目し、「市民が歴史を再発見する好機になる」と期待する。歴史をこすり取ることが現在の都市に生きる人々に影響を与え、未来への架け橋ともなる。港＝岡部プロジェクトは、そんな美術の可能性を証明しようとしている。



ベネチア・ビエンナーレ日本館での岡部昌生展の展示概略図（石丸勝三作成）

日本館コミッショナー・港氏「未来に記憶渡す」

※ベネチアとビエンナーレ会場※



ベネチア・ビエンナーレ美術展　アドリア海に浮かぶイタリアの島都市ベネチアで1895年に初開催。地元のベネチア・ビエンナーレ財団が主催し、前回2005年は国別展示に約70カ国が参加、総入場者数は91万人を越えた。今年は6月10日から11月21日まで。日本は1897年の第2回から散発的に参加しているが、国別部門への公式初参加は1952年の第26回展。日本館は54年建設。68年は「資本主義と大国主義の祭典」として欧州の学生運動の標的となり、会期中に運営改革を求めるデモが行われるなど騒然とした。これを機に審査制度が廃止されたが、86年に復活して現在に至る。草創期の参加作家にはセザンヌ、ピカソ、マチスなどがいる。日本も横山大観、梅原龍三郎、岡本太郎、棟方志功、池田満寿夫、篠山紀信、荒木経惟、草間弥生らを送り出し、82年には三笠出身の川俣正が参加した。

北海道新聞　2007年3月7日夕刊

記憶の継承 世界に問う

岡部昌生さん ベネチア・ビエンナーレ出展

被爆都市の「皮膚」フロッタージュ

広島は加害・被害 交錯の場

過去は未来に伝えられるのか―。そんな問いに挑み、広島に通い続けて制作する美術家の岡部昌生さん(64)＝北海道北広島市＝が、六月からイタリアで始まるベネチア・ビエンナーレ美術展に日本人で唯一、出展する。旧国鉄宇品駅（広島市南区）のプラットホームの縁石の凹凸を刷り取ったフロッタージュ作品と被爆石を展示し、記憶継承の在り方を世界に問い掛ける。

（守田靖）

ベネチア・ビエンナーレは一八九五年に始まり、隔年の開催。最高賞の金獅子賞をめぐり、事実上、国対抗で展示内容を競う。過去にはセザンヌ、ピカソ、マチスも出展。日本では横山大観、岡本太郎、草間彌生らが参加している。

旧宇品駅 題材に

岡部さんが取り組むフロッタージュは、物質に紙を当て、表面の凹凸を鉛筆で刷り取って浮かび上がらせる技法。この技法で建造物や路面に向き合って作品として顕在化し、人間や都市の「記憶」を表現してきた。

考え方に共鳴する多摩美大教授で写真家の港千尋さんが、日本館の展示プランとして国際交流基金に提案。応募した四案から「日本代表」として選ばれた。

構想では、十六㍍四方、高さ約四㍍の日本館の壁全体を、宇品駅ホームのフロッタージュ作品千二百枚で埋める。「フロッタージュは都市の皮膚をはぎ取り、記憶と向き合う行為。『宇品の皮膚』のような空間に、世界の人が訪れることになる。来館者は、歴史の現場に入り込むような印象を受けるのではないか」と岡部さんは語る。

「矛盾した時代」

さらに、撤去されて保管されていたホーム縁石も展示する。元のホームの長さ五百六十㍍のうちわずか十二㍍だが、深い意味を込めている。

旧国鉄宇品駅は、日清戦争が始まった一八九四年に建設された。岡部さんはホームを、戦争で前線に兵士を送った「加害」の広島と、原爆の閃光（せんこう）を浴び多くの犠牲者を出した「被害」のヒロシマが交錯する場所ととらえ、一九九六年から二〇〇四年まで通って四千枚のフロッタージュ作品を制作した。

ホームは〇四年、広島南道路の建設に伴って撤去されたが、岡部さんは「加害と被害を問う『境界』そのものの消失」と受け止め、問いを顕在化させる狙いを込めて会場に再現する。

ベネチア・ビエンナーレ美術展に出展するため、広島市現代美術館の収蔵作品をチェックする岡部さん㊨（同館）

展示タイトルは「わたしたちの過去に、未来はあるのか」。日本館コミッショナーである港さんは、作成中のビエンナーレの図録などの中で、現代を「矛盾した時代だ」と指摘し、こう問い掛ける。

二十一世紀の高度なテクノロジーは、かつてない規模で過去を記録する。一方で、同じテクノロジーが戦争や環境破壊を生み出し、記録すべき過去を破壊し、生身の記憶を葬り去っている。われわれは本当に過去を未来に伝えられるのか―。岡部さんは「簡単に答えることはできない問題だ。ただ、問いの形としては提示できるのではないか。そのことを作品を通して問い掛けてみたい」と話している。

ベネチア・ビエンナーレは六月十日から十一月二十一日まで開かれる。五月下旬からの展示作業には、広島市の石彫家石丸勝三さん(63)らもかかわる。

◇

岡部さんと港さんが出発前に展示コンセプトなどを語るトークイベント「わたしたちの過去に、未来はあるのか」が、七日午後二時、広島市中区袋町の市まちづくり市民交流プラザである。参加無料。ギャラリーG☎082（211）3260。

中國新聞　2007年4月5日

岡部 昌生 さん

美術家

おかべ・まさお　1942年、北海道根室市生まれ。札幌大谷大学教授。パリ、韓国・光州など国内外の都市で制作。5月中旬に東京大学出版会から作品集を刊行予定。

▶ 旧宇品線があった場所に、建設中の道路の高架橋が延びる。そばにプラットホームの石が保存されていた（広島市南区宇品海岸で）

触れる　広島とヒロシマの境目で

私のいる風景 watashi no iru fukei

「初めて来た時は、ずっと向こうまでプラットホームだった。少しずつ解体されていったんですよ」

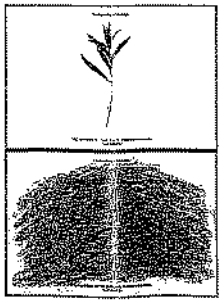
高速道路の建設が進む広島市の宇品。ここにあった旧国鉄宇品線の駅遺構は2004年に最後の姿を消し、コンクリート高架橋に取って代わられた。

日清戦争から第2次大戦終結まで、広島駅と宇品港を結ぶ軍用鉄道として兵員と物資を外地へ送り出した。560万の長大なプラットホーム跡を、軍都広島と被爆都市ヒロシマの境界を象徴する軸線のように感じ、9年間通い続けた。

遺構の石に紙を当て、2Bの鉛筆で表面を写し取る。「フロッタージュ」と呼ぶ方法で4000枚を刷った。継ぎ目を多く選んだのは、記憶やイメージが滲んでいると思えたから。爆心地から4・6キロ、数百は原爆の閃光を浴びている。

フロッタージュは30年前に始めた。歴史や出来事の記憶が埋め込まれた場所に立ち、手で壁や地面を刷り取ることによって自分の存在を表現しようと考えた。

遺いつくばり、ひたすら転写している



▶ 「THE DARK FACE OF THE LIGHT #1」フロッタージュ＋植物標本　2001年　北海道立近代美術館蔵　撮影・清水武男

と、都市の皮膚をめくる感触があった。「繰り出す鉛筆のストローク（筆勢）によって、自分の行為の痕跡もまた、紙の上に刷り取られていく」とも感じた。

広島とつながりが生まれたのは86年。開館準備中の現代美術館から、「ヒロシマ」を主題に制作を頼まれた。「広島はすべての路上に生と死が埋め込まれているような都市。簡単には行けないと思った」。原爆投下の3週間前、自分が幼くして体験した根室空襲の記憶をたぐり、何度も故郷に足を運んだ。記憶を内面化する作業がなければ、とても広島に向き合えなかった、という。

被爆遺構の中でも、戦争の両面性を示す旧宇品線にひかれてきた。「ここが残っている間は、加害と被害の境界線としての問いを発し続けていた。なくなったのはプラットホームだけではない。人間いのかたち」も喪失してしまった」

6月に開幕するベネチア・ビエンナーレ美術展に、日本代表として参加する。日本館を担当する港千尋さん（多摩美術大学教授）が示したのは「わたしたちの過去に、未来はあるのか」という問いかけ。宇品のフロッタージュ作品を壁一面に並べ、床に石を並べる。遺構の消失後に知人から贈られた宇品の土を絵の具代わりにしたドローイング、草花を標本にした作品も展示する。失われた問いを、そのような形で引き継ごうと考えた。

広島市内には原爆被害の説明板が多くある。その一つを転写するところを見せてもらった。知人に送る言葉はがきを並べて赤いテープで留め、鉛筆を斜めにして一気に刷り取る。想像したよりもずっと激しい動作に、目を見張らされた。

ベネチアでは市民との共同制作もするつもりだ。水の都は、どんな記憶と未来への問いを浮かび上がらせるだろうか。

写真・文　高野清見

読売新聞　2007年4月7日夕刊

ベネチア通信

岡部昌生 in ビエンナーレ

第1信

パリ・モンパルナスからの一歩

こすり取る工房の「記憶」

「この工房には、モンパルナスの時間がたまっている」。ベネチア・ビエンナーレ美術展日本館の展示準備を控えた五月二十一日、パリの印刷工房イデム（旧名ムルロ、一八七〇年創設）を訪れた岡部昌生は語った。

行きかう人々でにぎわう街モンパルナスにあり、すでに百年以上の歴史を刻む工房だ。シャガール、ピカソなど近代の著名な作家が足を運んだため「モンパルナスのアトリエ」とも呼ばれ、現在でもフランス国内のみならず、米国のリチャード・セラやポール・マッカーシー、現代アートも手がける映画監督デビッド・リンチ、中国の張暁剛（ジャンシャオガン）など世界の作家の作品を制作している。今回のベネチア・ビエンナーレのフランス代表作家ソフィ・カルもそのひとり。

建物の内部には、高い天井に届くような棚があり、これまでに手がけた作品の石版がすき間なく並べられている。創設当初から使われているという印刷機も健在だ。

岡部はイデムからの委託に応じて、十一種のプロッタージュ作品を制作し、そこから版を起こして四百四十点が印刷された。インクのしみた工房の床や壁面を、イデムに合わせて選んだリト・ラビングインク（石版画に使う油性チョーク）でプロッタージュ（こすり取り）していく。職人たちとの絶妙なコンビネーションで、工房に残る過去の記憶と物質の痕跡を紙に写し取った。

工房はまるで駅のプラットホームのように大勢の作家と職人が行き交う。印刷機の音と岡部が床や壁をこする音が混じり合い、柔らかく豊かに響く。やがて紙に蓄積された過去の時間が、模様となって浮かび上がる。

作品の題は「Studio floor, Montparnasse」。岡部はまず、モンパルナスで多くの人たちと交流しながら、ベネチアへの一歩を踏み出した。

（沢口紗智子、真下紗恵子＝札幌大谷短大美術科研究生修了、岡部昌生プロジェクトスタッフ）

◇

北広島在住の美術家岡部昌生さん＝札幌大谷大教授＝が、6月10日に開幕するイタリアのベネチア・ビエンナーレ美術展に、唯一の日本館展示作家として参加する。同行スタッフや文化部記者の文と日本館コミッショナーを務める港千尋さん（写真家・多摩美大教授）の写真で、現地の動きを報告する。第一信はベネチア入りを前に訪れたパリからのリポート。

（随時掲載します）

工房イデムの床をこすり取る岡部。後ろでは職人たちがプレス機で印刷している＝21日、パリで港千尋撮影

北海道新聞　2006年5月28日夕刊

ベネチア通信

岡部昌生 in ビエンナーレ

第2信

日本館で展示作業スタート

最大の敵は蒸し暑さ

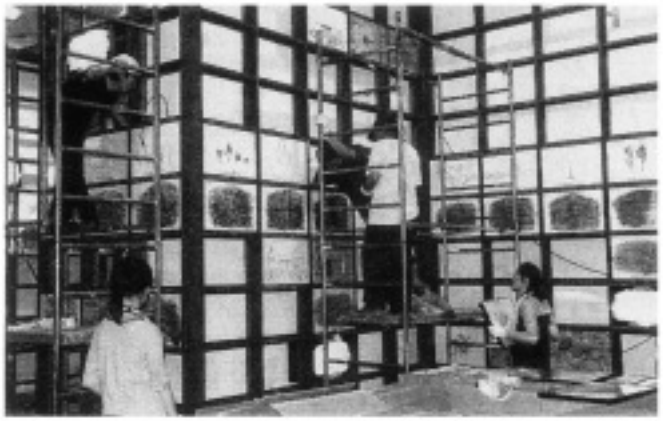
現地時間五月二十四日午前九時、ベネチア・ビエンナーレの日本館にスタッフが顔をそろえた。いよいよ岡部昌生プロジェクトが始動する。六月四日からの内覧会、十日からの一般公開といった公式行事までに、すべての展示作業を終えるのが私たちの使命だ。

「はじめが肝心」と岡部は考えていた。札幌、広島、東京、ベネチアから参加する総勢十人は、電子メールや電話によるやりとりを重ねてきたものの、直接話し合うのは初めて。目的意識を共有するため、綿密なミーティングを行った。

今回の展示は、岡部が十年近くにわたって広島で制作した作品が中心。これまで広島のシリーズの発表では、作品を円環状に配列する手法が多かったが、ベネチアでは作品が壁全体を覆い尽くすプランを考えた。

すでに現地業者によって、角材を井げた状に組んだグリッド（枠）が壁に沿って立ち上がっていた。グリッド裏面には、さらりとした手触りのさび出し塗装が施されている。高さ四・八㍍、壁面延長約八十㍍、グリッドの数は千百五十二！　日本館に初めて足を踏み入れたとき、「こりゃとんでもない展示になるぞ」と思った。

「七番の作品を下さい」「ドヴェ・ヌーメロ・セッテ？（七番はどこ？）」「ヒア、アイム・カミング！（今もっていきます）」。展示室には日本語、イタリア語、英語が飛び交う。課題が浮上するたび、工程表と展示図面を広げて話し合いが繰り返された。作業組み上げられたグリッドにひとつひとつ作品をはめ込んでいく展示作業＝26日、港千尋撮影



の初日は順調。日本から船便で届いた箱からライトボックスの部品を取り出し、流れ作業で組んでグリッドに仮置きした。

最大の敵は蒸し暑さ。ベネチアの最高気温は約二六度。海から蒸した風が吹き寄せ、工具を握る手もすぐに汗ばむ。しかも、グリッドの一番高いところへよじ登ると照明が熱い。二日目は地元住民もおびえるほどの猛烈な低気圧が近づき、湿度は70％近くあった。手を滑らせたら取り返しがつかない。足場の上で約十㌔のライトボックスを抱え、緊張と忍耐をもって作業を行う。さびの皮膜に体を押し付けたからだろう、三十個を固定し終えたら、みんなの服が赤茶色になっていた。

二日目の午後は、いよいよ真打ち登場。アルミの額に入ったフロッターシュ作品を箱から取り出す。展示位置を把握しながら点検。額のガラス面をクリーニングし、さび出し塗装のグリッドにこすれないよう、注意してはめ込んでいく。

作業開始から三日目、二十六日の夕方。道立近代美術館が所蔵する「THE DARK FACE OF THE LIGHT」がすべて展示された。四十二組八十四点。全体の一部にすぎないが、圧巻である。一同、拍手喝采。ライトボックスの通電テストもうまくいき、三十個すべて点灯。作品空間にも、スタッフの心にも、光が差し込んできた。

（今井里江子＝岡部昌生プロジェクト・スタッフ、札幌芸術の森美術館学芸員）

北海道新聞　2007年5月31日夕刊

ベネチア通信

岡部昌生 in ビエンナーレ

第3信

作業も終盤、スムーズに

息づき始めたひとつの空間

ベネチア・ビエンナーレ日本館の展示作業は、現地時間の五月三十日で七日目に入った。千百五十二点のフロッタージュ作品が壁を覆い、展示室中央には広島から運んだ旧国鉄宇品駅プラットホームの「被爆石」が南北方向に十六個並ぶ。総重量約四トンに及ぶ石の設置を指揮したのは、広島で岡部を支える市民グループの彫刻家石丸勝三。三日がかりの予定が半日で完了。作業も終盤に入り、スタッフ間の連携がスムーズになってきたおかげだろう。

この日夕方、コミッショナーの港千尋と岡部昌生は作業の手を休め、ベネチア建築大学に向かった。日本館の企画では、作品展示だけでなく市民とともに行うワークショップを重要視する。それに先立ってセミナーを行い、参加を呼びかけるねらいだ。建築大のアルビーゼ・マトッツィ教授が司会を務め、港と岡部が企画を説明した。

内容はベネチア大日本語学科の中山悦子教授が美しいイタリア語に訳し、社会的なメッセージも聴講者に理解してもらえたようだ。

「ベネチアの街はモニュメントだらけ。だが造ったとたんに、日常化して忘れ去られる」と港が指摘。被爆体験者が高齢化し、歴史の継承に苦労する広島の現状を目の当たりにしてきた岡部もうなずく。

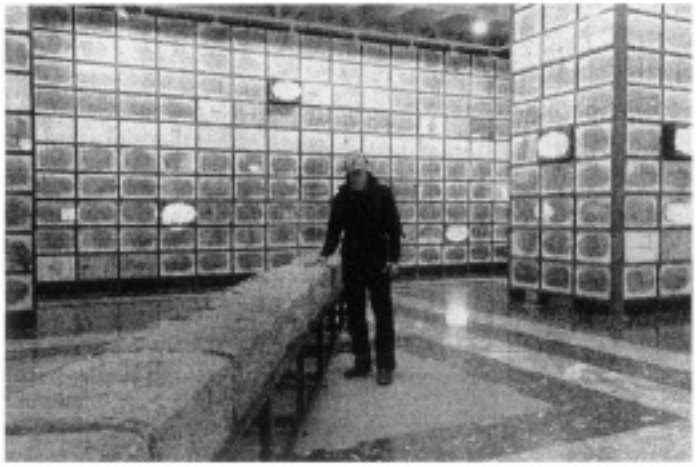
現地入りして以来、岡部は早朝に街を歩き、古井戸に彫られたレリーフをこすり取るのを日課にしてきた。干潟を埋め立ててできた島都市ベネチアには、かつて雨水をためて生活水にした名残で小さな井戸がそこかしこにある。岡部はセミナーで「身近な暮らしの周辺にも長い歴史が刻まれたものがある。それらを自分の手でこすり取り、ひとりひとりが現在とつないでくれれば」と話した。

それまで私たちは、ベネチア東端のジャルディーニ公園にある日本館と、滞在するアパートの往復に明け暮れていた。年間千二百万人もの観光客が訪れるサン・マルコ広場からも離れている。セミナーを機に、市民の日常の足となっているバポレット（水上バス）で初めて市街へ出向いた。船は多くの橋や、ルネサンス様式の教会の前を通り過ぎる。現地コーディネーター武藤春美のガイドで思わぬ観光のひとときとなった。

岡部の滞在先は、ビエンナーレのもうひとつの会場、五百年以上の歴史を誇るアルセナーレ（造船所）に近いサン・マルティーノ教会の隣にある。毎朝八時四十分、スタッフはここに集まり、その日の段取りを確認する。展示室の床や壁には、岡部が早朝にフロッタージュした作品が並び、「サン・マルティーノの家の展覧会」との張り紙も。教会の鐘が九時を告げるとスタッフは日本館へと移動する。

作業開始から九日目の六月二日。巨大なパズルのようにばらばらだった作品群が、ひとつの空間として息づき始めた。岡部の十年来の取り組みが、圧倒的な存在感をもつ光景となって現れてきた。

（今井里江子＝岡部昌生プロジェクト・スタッフ、札幌芸術の森美術館学芸員）



展示準備をほとんど終えた日本館で照明の状態をチェックする岡部＝2日、港千尋撮影

ベネチア通信

岡部昌生 in ビエンナーレ

第4信

盛況　初のワークショップ

地元市民、街の歴史を再発見

ベネチア・ビエンナーレ美術展の各国パビリオンがあるジャルディーニ公園は、日ごとにあわただしさを増してきた。市街にも会場の案内板が設置され、地元紙には「開幕近し」の記事が載る。とはいえ公園内は、今ごろやっと歩道に砂利を敷いたり、舗装に使う石を切っていたり。「十日の開幕に間に合うの？」と聞きたくもなる。

目の色を変えて展示作業を進める国もあるなかで、われらが日本館は現地時間五日に展示が完了。いくつか予想外の問題は発生したものの、日伊スタッフの努力と工夫で解決し、岡部昌生とコミッショナー港千尋をはじめ、全員の顔に安堵の表情が浮かぶ。

この日の夕方、岡部らはベネチアで初めてのフロッタージュのワークショップを行った。五月三十日にベネチア建築大で開いた事前のセミナーに参加した学生や教員と、新聞で開催を知ったらしい市民が、ビエンナーレのもうひとつの会場アルセナーレ（造船所）前に集まった。

「今日は楽しみながら美術をしたいと思います」。岡部がにこやかに語り、アルセナーレ前の旗ざおの浮き彫りをこすり取ってみせる。レリーフの文様の意味は、街の歴史に詳しいベネチア建築大のジョルジョ・コンティ教授が解説を買って出た。郷土史研究家らとの連係で行われた、二〇〇五年の道内ワークショップが思い出される。

ベネチア大で日本語を学ぶ女子学生エレナ・メネガルドは「紙と鉛筆だけで、いつもは見えない形が見えてくるのがすばらしい」と、流ちょうに話す。もともと日本の現代美術に関心があり、好きな作家を尋ねるとヤノベケンジや田中一光の名前が出てきた。

参加者は自分でこすり取った作品を見せ合い、図像の面白さや着眼のよさをたたえ合う。予想以上の盛り上がりに「興味のあることは、ととん楽しむのがイタリア人らしいね」と、フランス暮らしが長い港も感心している。

このような光景を見ていると、岡部の仕事のユニークさは、市民とかかわり合う「行為」にこそある、とあらためて思う。岡部自身、ベネチアで連日、街角の広場にあって市民生活を象徴する古い井戸の浮き彫りをモチーフに制作を続けている。住宅街の片隅から、多くの観光客が行き交うサンマルコ広場付近まで。市民から「この前、あそこで見かけたよ」と声をかけられるほどの神出鬼没ぶり。

「街を歩きながらの仕事は楽しい」。ベネチアの強い日差しで真っ赤になった岡部の顔がほころぶ。疲れも相当たまっているはずだが、制作を通じての出会いやベネチアで約二百点もの作品を制作した高揚感からか、声も弾む。

紙に現れる模様は都市の歴史の反映である。と同時に、ふだんあまり意識しない、ひとりひとりが街と向き合ってきた歴史と、未来へのいくらかの希望を思い出させてくれる。港が岡部の日本館展示に名付けた「私たちの過去に未来はあるのか？」というテーマの意味が、ベネチアでの制作で浮かび上がってきた。ワークショップは、岡部らのベネチア滞在中、何度か繰り返される。

（吉家昌伸）

ベネチアのアルセナーレ前で、それぞれの作品を見せ合うワークショップ参加者たち＝5日（港千尋撮影）

北海道新聞　2007年6月8日夕刊

ベネチア通信

岡部昌生 in ビエンナーレ

第5信

内覧会、そして開幕

他者とともに希望問い続け

いよいよ開幕した。「美術のオリンピック」と言われるベネチア・ビエンナーレ美術展。現地時間十日午前（日本時間同日夕）、国別パビリオンが並ぶジャルディーニ公園のイタリア館前で開会式が行われた。天気に恵まれ、一般客の入りも上々だ。

例年は開幕前に審査し、最高賞の金獅子賞をはじめ各賞がこの場で発表される。だが今年は十月に発表とのアナウンスがあった。「会期後半に盛り上がる場面を設ける演出だ」という声も聞こえる。それに代わり、長年の活動をたたえる別の金獅子賞が、アフリカを代表する写真家マリック・シジベに贈られた。

ビエンナーレの華は、実は開幕に先立って行われるベルニサージュ（内覧会）だ。各国とも内覧会の期間中にレセプションを企画し、三十分刻みの時間差で開催するから、上空から見たら、まるで砂糖の山を追ってアリが移動するような光景に違いない。

「岡部さん、久しぶり」。八日夕方に開かれた日本館のレセプションに間に合わせるように、広島でフロッタージュのワークショップを主催してきた市民グループ一行が到着した。広島の酒蔵が、そろいの半被を提供。札幌や東京のサポーターも浴衣持参で、お祭りムードが高まった。

午後五時半、日本館のレセプションがスタート。コミッショナーの港千尋が英語でスピーチした。「この展覧会はひとつの問いの形で、決して答えを出そうとするものではない。しかし、私たちは希望も平和も、問いを続けることを通してのみ、実現可能と思う。さらに、他者とともに問いつづけることにこそ、私たちの力があると信じなければならない」。岡部も「私の美術は多くの他者の力で成り立っている」と語り、来場者の拍手に包まれた。乾杯の後、日本館に展示した広島・旧国鉄宇品駅のプラットホームの縁石の前に岡部や港、スタッフたちが一列に並び、フロッタージュのデモンストレーションを行った。

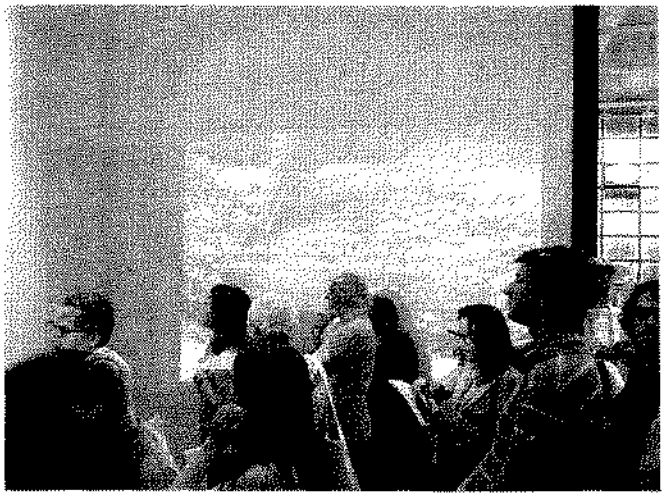
内覧会の間、岡部と港にはマスコミの取材もひっきりなしに続いた。「終戦の一九四五年、岡部さんは何歳だったか」「宇品駅はいまどうなっているのか」など、多様な質問で岡部の芸術の本質に迫ろうとする。テレビ局に勤める夫とともに内覧会に訪れたアレサンドラ・フィンツィ・マルセさんは、「プラットホームの石に触れ、被爆を体験した日本人の思いを強く感じた。石から熱が伝わってくるようだった」と話した。

北イタリアの新聞「ガッゼッティーノ」の翌九日朝刊。ビエンナーレ関連の記事で、フランスの写真家ソフィ・カルとともに賞の有力候補として岡部の名前を報じた。審査の結果が分かるのは、まだ四カ月も先だが、十一月下旬まで百六十日余りの会期中、世界から訪れる美術関係者や愛好者が岡部の作品に触れる。岡部にとってのビエンナーレが、いま確かに始まった。

（吉家昌伸）

◇

「ベネチア通信」は今回で終わります。



内覧会に訪れた来場者は日本館の展示説明とフロッタージュの映像を食い入るように見た＝8日午前、港千尋撮影

北海道新聞　2007年6月12日夕刊

被爆と軍都「二つの広島」をベネチアで展示

美術家　岡部 昌生さん

文化

イタリアで二年に一度開かれる国際現代美術展、ベネチア・ビエンナーレ。今年六月十日から始まる第五十二回展の「日本代表」に選ばれた岡部昌生さんは、都市の〝表皮〟を紙と鉛筆で擦りとり続けてきた美術家だ。一部の作品は一見、黒鉛の激しい動きの跡でしかない。だがそこには、近現代の記憶の喪失と再生をめぐる真摯（しんし）な問いが込められている。

＊都市の皮膚

凹凸のある物に紙をあてて表面を鉛筆で擦ると、絵画的な図像が現れる。美術では自動記述法の一種「フロッタージュ」に分類される。その技法を岡部さんが使い始めたのは一九七七年。だが求めたのは、潜在意識の発露などではなかった。

余計な所作をそぎ取り、ストレートに思いを表す手法を探し求めていた。油彩は画題に適さず、版画は煩雑に過ぎた。フロッタージュは「立ちたい場所に立ち、足元を擦りとることで自分のアイデンティティーを表現」できる、極めて直接的な記録性があった。

二年後、研修滞在中のパリで、今の原点となる発見があった。路上でフロッタージュを制作中、街角に時折、花輪や花束が飾られるのを見かけた。確認すると、そこで死んだレジスタンスに手向けられた花だった。

穏やかに日常が過ぎていた街に、流血の歴史の痕跡が埋まっていた。「都市は巨大な版であると気付いた」。それまで、都市の表層的な記号を写し取っていたフロッタージュが、歴史や記憶の積層した〝都市の皮膚〟をはがし取る行為へと転化していった。

＊戦争体験

擦りとる場に潜在する意味が重要になる中で、ライフワークに出会う。八六年、開館を三年後に控えた広島市現代美術館から、「ヒロシマ」をテーマに作品を依頼された。「広島を見たことのない者が広島を表現できるか。すごく逡巡（しゅんじゅん）した」

手がかりを幼少の記憶に求めた。四五年七月の根室空襲。道東の町を焦土にした二晩の火の赤が、三歳での原体験としてあった。居住する札幌から幾度も故郷を訪れ、史実を調べ、内在化させた。自らの戦後の時間をヒロシマに同調させた。

戦争体験の身体化に発した広島とのかかわりはさらに展開する。九六年夏、市民対象のワークショップを平和記念公園と旧国鉄宇品駅の遺構で開いた。前者は誰もが知る被爆地の象徴。だが後者はヒロシマの一部であると同時に、兵や兵器を海外へ送る軍都の港に直結するターミナルだった。

「加害の行為で悲劇を呼び込んだ、そういう視点でヒロシマを考える。それが戦後五十一年目の夏の仕事と感じた」。それは、被害と加害を切り離さない集団的な記憶の継承に、美術のかかわる可能性を広げていく共同作業にもなった。

＊巨大な壁

それから九年間、岡部さんは宇品に通い続けた。都市再開発で二〇〇四年に遺構が消えるまで、この「被爆都市ヒロシマと軍都広島の境界線を象徴するモニュメント」で約四千点ものフロッタージュを制作した。

駅の列石のすき間に、原子爆弾の閃光（せんこう）の痕跡を想起し、そこから生えた草花に被爆地の命の再生を重ねた。遺構消滅後も、市民から届いた跡地の土や植物を使い、「アフター宇品」と呼ぶ作品をつくった。重い過去を問う戦跡の破壊をためらわない時流にあらがうようにー。

今回、ベネチアで、日本館のコミッショナー（展示責任者）の港千尋さんとともに取り組む展示は、宇品のフロッタージュが中心だ。縦三千八㌢、横五十六㌢のフレームに収めた約千百五十点を格子状に組み上げて、高さ四・五㍍の巨大仮設壁が館内を巡る。被爆都市と軍都の歴史的な〝皮膚〟が観客を包む。

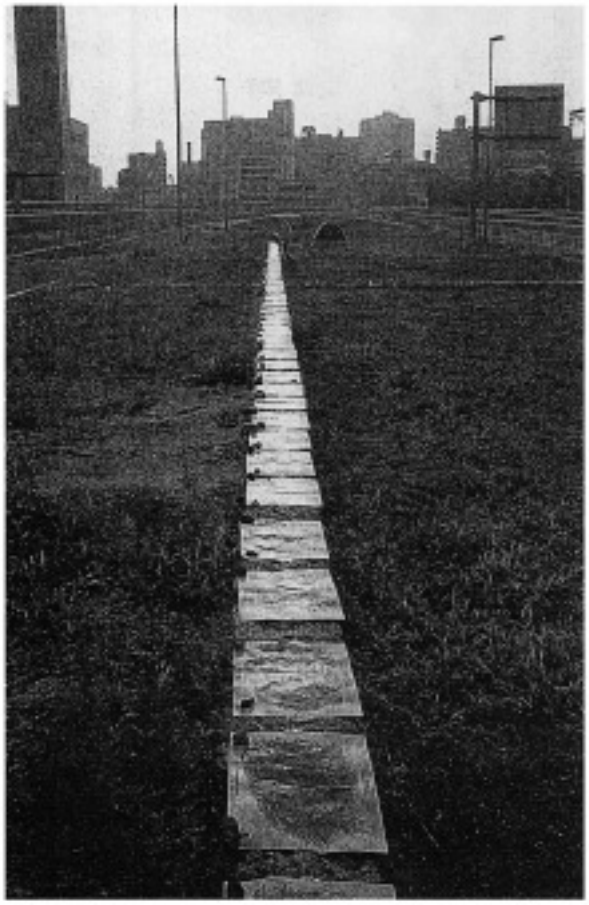
テーマは「わたしたちの過去に、未来はあるのか」。わたしたちはどのように歴史や記憶を継承しうるのかを問う。「戦争の世紀だった二十世紀は、世界中にヒロシマ的なものがあったと思う。展示を見た人に、それぞれにとってのヒロシマ的なるものが想起されれば」と岡部さんは語った。

ベネチア・ビエンナーレでもワークショップを行う。「モネの絵と同じ風景が今もある不思議な都市。だが人口密度化の問題もある。その都市の記憶が（参加者に）どう受け止められるか興味深い」と話す岡部昌生さん

【おかべ・まさお】1942年、北海道生まれ。札幌大谷短大教授。光州ビエンナーレ、越後妻有アートトリエンナーレなど内外で作品を発表。88年以降、ワークショップを通じて社会的な記憶の継承にもかかわる。ベネチア・ビエンナーレに合わせて作品集を東京大学出版会から刊行。

美の扉

歴史や記憶の継承問う



旧国鉄宇品駅のプラットホーム遺構で、列石の間をフロッタージュしていた制作風景＝広島市（撮影・岡部昌生）

信濃毎日新聞（共同通信配信）　2007年6月5日朝刊

ベネチアでヒロシマ問う

岡部さん ビエンナーレ出展

7日、イタリア北部ベネチアで開かれた美術展で、被爆した旧国鉄宇品駅の遺構から写し取った紙と、遺構の一部の石を展示した岡部さん(右)(共同)

【ローマ7日共同】現代美術の世界的祭典、第52回ベネチア・ビエンナーレ（隔年開催）が7日、北イタリアのベネチアで始まった。今年の欧州は、5年に一度ドイツで開かれるドクメンタなど、4つの主要イベントが10年に一度重なる「美術の当たり年」。ベネチアがその最初のイベントとなる。

ビエンナーレでは、過去最多の七十七カ国が国別の展示に参加。日本館は、原爆にさらされた旧国鉄宇品駅（広島市）の遺構の表面を「フロッタージュ」という手法で紙に写しとってきた岡部昌生さん(64)＝北海道北広島市＝が出展。「ヒロシマ」の記憶を引き継いでいこうとの試みだ。

岡部さんは一九九六年から二〇〇四年まで広島に通って、四千枚のフロッタージュ作品を制作している。

会場には、遺構の一部の石も広島から持ち込まれた。岡部さんは「入館した人に、歴史の現場に触れる気持ちを持ってもらえればうれしい」と話った。

一般公開は十日から十一月二十一日まで。国別展示の最優秀賞（金獅子賞）は秋に発表の予定。

今回の目玉の一つはアフリカ現代美術の特集で、生涯業績部門の金獅子賞には西アフリカ・マリの写真家マリック・シディベ氏が選ばれた。

欧州では今月、スイス・バーゼルのアートフェア、ドイツ・カッセルのドクメンタ、同ミュンスターの彫刻プロジェクトの三イベントも次々に開幕する。

中國新聞　2007年6月8日

長い歴史と規模の大きさから「美術のオリンピック」とも称されるイタリアのベネチア・ビエンナーレ美術展が、六月十日に開幕する。今年の"ベネチア"は、道民にとって特別だ。フロッタージュ（こすり取り）の作家、北広島の岡部昌生さんが、道内在住者では初めて日本館展示作家として参加するからだ。

戦後六十年の一昨年、広島で岡部さんの仕事を取材した。戦中に市街と軍港を結んでいた鉄道の旧宇品駅。岡部さんは、そのプラットホームの石の凹凸を「版」とする作品を九年間にわたって作り続けてきた。取材当時は[illegible]撤去され、制作できなかったが、街の[illegible]をこすり取ると

@道新文化部

ベネチアの岡部昌生

いう制作理念に共鳴した市民が、宇品以外の場所でワークショップを展開していた。広島の動きは道内にも伝わり、北海道の近代をこすり取るワークショップに結実した。

広島で制作された四千点以上の作品から選んだ千数百点が、ベネチアの日本館の壁を埋める。市民を突き動かした「美術の力」が、どう受け止められるのか興味深い。

私もビエンナーレ開幕直前に現地入りし、日本館の展示やベネチア市民にも参加を呼びかけるワークショップ、それらへの反響など、"ベネチアの岡部昌生"をしっかり見届けたい。現地の様子は、この紙面やタ刊文化面で随時お伝えする。

（古家昌伸）

北海道新聞　2007年5月28日朝刊

被爆石のアート

ベネチア・ビエンナーレ報告

―――上

歴史写し取る技 高い評価

過酷な「記憶」美に昇華

「美術界のオリンピック」と称される現代美術の祭典、イタリアのベネチア・ビエンナーレが始まった。日本館に展示されているのは、北海道北広島市在住のアーティスト岡部昌生さん(64)が、広島市南区にあった旧国鉄宇品駅跡に九年間通い、被爆したプラットホーム縁石をフロッタージュ(擦り取り)した膨大な作品だ。ヒロシマの記憶や「近代」の意味を問い続け、広島市民との共同制作を重ねてきた岡部さんの集大成ともいえる展示は、人だかりができ、高い評価を得ていた。開幕前にあった内覧会の模様をリポートする。(守田靖)

一八九五年に始まり、各国対抗で建築と美術を隔年開催するベネチア・ビエンナーレ。ベネチア市内の二会場で開かれている。緑豊かなジャルディーニ会場の中心と、日本館はロシア館とドイツ館の間に立つ。入り口には、宇品に通った岡部さんのフロッタージュ風景が映し出され、「シャカ、シャカ」「ザッ、ザッ」という鉛筆と紙が触れ合う音が聴覚を刺激する。

東西に並ぶ15個

足を踏み入れると、高さ四・八㍍の展示室の壁面をすき間なく埋めた千百五十二点のフロッタージュが迫ってくる。鉛筆でこすることで、白い紙の上に黒々と浮かび上がった石の凹凸。白と黒のみが集積された会場は、崇高な美しさも発していた。

「過酷な経験を受けた石から、苦しみを表現するのではなく美しさを醸し出している。これこそがアート」イタリア中部の芸術学校で校長を務めるジャンニ・ルチアさんは感慨深げに語る。

部屋の中央には、宇品から運んできた被爆石十五個(計三㌧)が、今は消えた宇品駅と同じ東西方向に一直線に並べられている。来館者は、作品に記された「HIROSHIMA」の文字と「1945」の年号で、説明はなくとも、「被爆の記憶」を示す展示だと知るようだ。静かに作品に見入った後、石に触れ、再度入り口に戻り、掲示された広島のデルタの地図と、「わたしたちの過去に、未来はあるのか」と題した解説文を熟読し、効果的だ」とニューヨークから来た高校教師キャロル・リーブナーさんは感心していた。

来館者 感謝の念

内覧会の会期中に開かれる各国館のオープニングは、ビエンナーレの華だ。日本館には百人を超える人が集まり、関心の高さを示した。広島県内の醸造元提供の日本酒が振る舞われる中、岡部さんは、各国メディアの取材に追われつつ、語った。

「来館者の多くが『ありがとう』と言ってくれた。ビエンナーレの場で、歴史を共有する時間を持てたことへの感謝の思いではないか。来館者が、自分にとって歴史とは何かを問う意味を抱え込んだ。そうした展示を実現できて満足だ」

地元紙「イル・ガッツィオーネ・ベネツィア」もビエンナーレの記事で、出品作家のうち二勝利者」として、ビデオ映像作品を出展したフランスのソフィエ・カーレさんと岡部さんの二人の名前を挙げた。岡部さんの展示について「素晴らしい。語ることも説明することも、それ以上、何も書き加えることもない」と論評し、高い評価を示した。

◇

ベネチア・ビエンナーレは十一月二十一日まで開催。

岡部昌生さん

1152点のフロッタージュ作品が展示された日本館。驚かれた被爆石でフロッタージュを体験するメディア、美術関係者が相次いだ(今月8日)

日本館のオープニングに詰めかけた美術関係者ら。岡部さん(手前)のあいさつ、説明に耳を傾けた(今月8日)

中國新聞 2007年6月22日

被爆石のアート

ベネチア・ビエンナーレ報告

―下

擦り取り 来館者も体験

「ヒロシマ」受け止め多様

現代美術の祭典、ベネチア・ビエンナーレ日本館の今回のテーマは「記憶」だが、まさに「記憶」に残る展示になるかもしれない。北海道北広島市在住のアーティスト岡部昌生さん(64)が、広島市南区にあった旧国鉄宇品駅の被爆したプラットホーム縁石十五個(約三トン)を会場に展示。自らが広島市に九年間通い、行ってきた石のフロッタージュ(擦り取り)を来館者にも同じように体験させたからだ。

4000枚を使い切る

開幕に先立つ内覧会の二日間で、用意したフロッタージュ用紙四千枚がなくなった。参加型の美術展が増えているとはいえ、これだけ多数が作家と同じ行為を経験するのは異例だろう。「子どもに戻ったようで楽しい」などとはしゃぎながら夢中で鉛筆を動かす人。縁石の凹凸を無視してきのこ雲の絵を描き、「ばかげた米国の爆弾だ」と思いを表現する男性…。各国のメディアは珍しい光景をカメラに納めようと群がった。

フロッタージュしたのは、二〇〇四年五月、高速道路建設のため撤去、保管していた被爆石だ。「もはや現場にプラットホームはなく、痕跡はフロッタージュの作品の中にしか残っていない。でも、現物の石は、わずかだがこうして残っている。それを触ることで感触が身体に入り、ヒロシマの記憶に触れることができる。それを理解してほしい」。そんなようにワークショップを企画した理由を岡部さんは語る。

日本館会場で、興味深げにフロッタージュを体験する各国のメディア、美術関係者ら(今月8日)

ビエンナーレ会場では、多くの作家がテロや戦争をテーマに据えていた。例えば、アルゼンチンのレオン・フェラーリは、米国の爆撃機に爆弾に見立てたイエス・キリストを背負わせ、神の「投下」を想起させるオブジェを出している。

感じ方 強制せず

そうした中で、グッゲンハイム美術館(米国)関係者は「他館に比べ、日本館は、現実を変えるために何ができるかが具体的に示されている」と評価したという。日本館コミッショナーで美術家の港千尋さん(46)は「フロッタージュは大人も子どもも参加できる。どう感じるべきかを強制もしていない」。評価の理由をこう受け止める。

日本館を訪れたイタリア在住の美術学校経営者は「核兵器は使用されてはならない。学生を必ず連れて来たい」と被爆の事実をストレートに受け止めた。

一方で、ヒロシマには触れず「記憶を継承する興味深い手法だ」と語る人も。受け止め方は多様だった。ただ、「忘れてはならない大切な何かがあると直感した」とローマの美術愛好家サブリナ・ラダーツィさん(34)。日本館の展示に、人間の普遍性に触れる力があったことを示している。

ビエンナーレが開幕した今月十日。「教会内の墓石、壁、樹木…。どこでもいいからフロッタージュしてみてください」。岡部さんの声が、ベネチア市のサン・フランチェスコ教会中庭に響いた。市内のサン・ジュセッペ小四、五年生の約二十人が参加。一時間で百五十点もの作品を完成させた。「今、住んでいる町を見直すきっかけになれば」と岡部さん。

日本館でのワークショップも含め、広島市や世界各地で市民とともに行ってきた営みを岡部さんは「共同制作」と呼ぶ。他者に開かれたアートによって「ヒトとヒトを結び、対話を生む」。そういう理想をベネチアで十分に示せたのではないか。

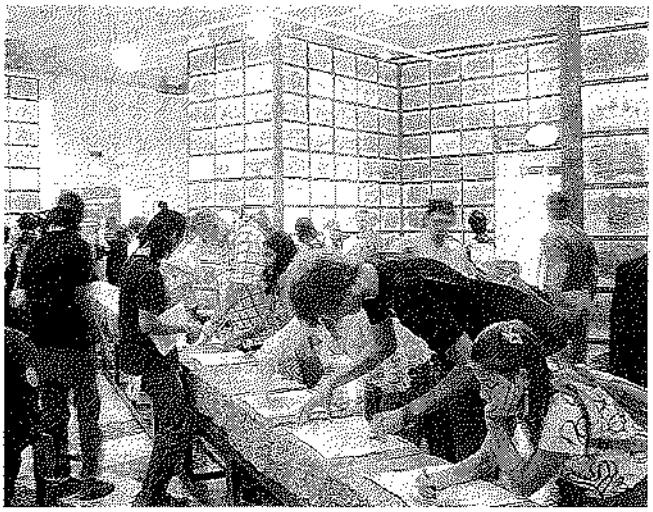
(守田靖)

中國新聞　2007年6月23日

ベネチア・ビエンナーレで被爆縁石展示

中國新聞　2007年7月17日

芸術



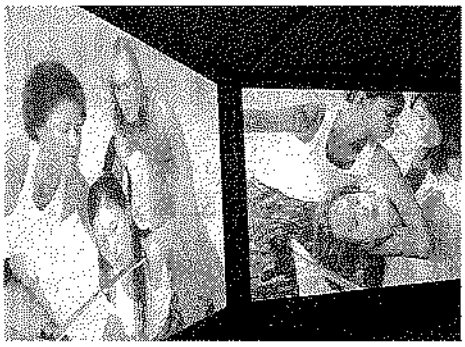
「ベネチア・ビエンナーレ」

日本館の岡部昌生作品

被爆石並ぶ静謐な力強さ

三大国際展を歩く（上）

内田 真由美



㊤日本館の岡部昌生の作品「私たちの過去に、未来はあるのか」 ㊦ロシア館のグループ「AES+F」の作品「Last Riot（最後の暴動）」

六月、ヨーロッパでは現代美術の大規模な国際展が相次いで開幕した。イタリアでは、最古の歴史を誇り、隔年開催される世界最大規模の「第五十二回ベネチア・ビエンナーレ」、ドイツのカッセルでは、五年に一度の「ドクメンタ」が十二回目、十年に一度の「ミュンスター彫刻プロジェクト」が四回目を迎えた。三大国際展が同時開催されるのは十年ぶり。アートは世界の〝今〟、時代を映す。一九九七年に三カ所を訪れてから十年。この間の世界のアートの変遷を思いながら内覧会を巡り、美術の現状と動向を見た。

一八九五年にスタート、「美術界のオリンピック」と呼ばれるベネチア・ビエンナーレは、ますます巨大化している。参加国は史上最高の七十六カ国。主会場は、各国のパビリオンが並び建つジャルディーニ（公園）とアルセナーレ（造船所跡）だが、展示館をもたない国が市内の宮殿や教会などさまざまな場所で自国の美術を紹介、近隣の島も含め会場はベネチア全体に広がる。

総合ディレクターは初の米国人、ロバート・ストー（イェール大学美術学部学部長、元MoMA学芸員）。全体テーマは「五感で考え、心で感じる。現在進行形のアート」。ストーによる企画展は、アーティスト百人の作品をジャルディーニのイタリア館とアルセナーレに展示。白い壁面の空間にゲルハルト・リヒター、ジグマー・ポルケ、ロバート・ライマンらの絵画の大作などが整然と並ぶ様は、まるで美術館の展示のようだ。日本からは束芋、加藤泉、藤本由紀夫、米田知子、森弘治が出品した。ドールハウスをモチーフとしたアニメーションの映像作品で束芋が人気を集める。

アデル・アブデスメッド（アルジェリア）の「EXILE」（追放、亡命）という文字が光るネオンと有刺鉄線による作品、ヤン・フードン（中国）の映像、エル・アナツィ（ガーナ）の缶や銅線で作った巨大な織布など、中国とアフリカの作家が目をひく。

国別では、フランス館のソフィ・カルが、俳優や医師など女性百人に同じ手紙を送り、それぞれの女性のストーリーを文章や写真、映像で表現。開催前から、カルが新聞広告でキュレーターを募集し、ダニエル・ビュランに決定するなど開催前から話題を集め、金獅子賞の最有力候補との呼び声も高い。

今年から賞の発表が開幕時でなく十月となったが、地元紙でカルとともに同賞候補と報じられたのが岡部昌生の日本館（コミッショナー・澤十畝）。岡部は九年間にわたり、かつて広島の軍港で、被災地となった旧宇品駅の縁石に紙を当て鉛筆で擦ったフロッタージュ作品四千点を制作。そのフロッタージュを収めた千百五十二の鉄製格子が壁を埋め尽くし、中央には、広島から運んだ駅の被爆石が一直線に並ぶ。来場者は実際にフロッタージュの体感ができ、石の周りは熱心に手を動かす人々で溢れた。〝ヒロシマ〟という言葉が持つ意味、岡部の手作業と時間の集積は、空間を静謐な力強さで支配する。戦争と紛争、テロ、死と直面する現在、岡部作品への反応は想像以上だった。

鮮烈なインパクトを受けたのは、ロシア館のグループ「AES+F」のビデオ・インスタレーションだ。ワーグナー音楽を背景に、若者が力やバットで殺し合うかのような場面もあり、破壊と生成の映像が三面の大画面で展開される。

全体的に落ち着いた印象を持つ今回のビエンナーレは、九〇年代半ばから続いてきたビデオ、映像作品の氾濫からの揺れ戻しか…。だが、漲ったエネルギーの中から新しいものが生まれてくる、かつての熱気が懐かしくもある。ドイツではどんな作品との出合いがあるのだろう。旅はカッセルへと続く。

（うちだ・まゆみ＝アート・コーディネーター）

※ベネチア・ビエンナーレは11月21日まで。㊦は14日に掲載予定。

東京新聞　2007年7月7日朝刊

活況の中、増す存在感

美の惑星直列 中

欧州3大美術展から

非西洋への流れ

中国・インドの作家、台頭

「Are You Chinese?」

ドクメンタが開かれているドイツ・カッセル市で、3度も聞かれた。外国に行ったことのない中国人1001人を数回に分けて入国させ、現地で交流させるという文末未の「作品」の1人かと、尋ねられたのだ。

文は屋外にも、中国の古い扉を使った木造作品を展示。嵐で倒壊したが、「直さないでくれ。この方が美しい」と主張し、存在感は頭ひとつ抜け出ている。

ベネチア・ビエンナーレも、非西洋勢の作品なくしては成り立たなくなって久しい。来年の北京五輪で芸術監督をつとめる蔡國強（ツァイクオチャン）が率いて2年前にデビューした中国館は、前回と同じオイルタンクの並ぶ展示室を使い存続を強くアピール。アフリカの作家を集めた企画展も開かれ、近くではガーナ出身でナイジェリアで活動するエル・アナツイが様々な色や素材によるクリムトの絵の背景のような巨大な織物作品を発表した。

中世の海上都市を今に伝える迷宮のような街中では、チェ・ゲバラに扮した森村泰昌のポスターがあちこちに張られた。ある邸宅内に石や絵画による寡黙な結界を築いた、韓国出身で日本を拠点とする李禹煥（リウファン）の企画展と共に話題を集めた。

新マーケット

両展に見える非西洋への傾斜。ドクメンタのキュレーターであるノアック氏は「近い将来、西洋美術は優勢でなくなる。それは美術というより経済の問題。中国やインドが典型例で、新しいマーケットが現れている。だから、非西洋の芸術家と積極的に交流しなければならない」と話す。

ベネチア開幕の3日後からスイスで5日間開かれた世界最大規模のアートフェア「アートバーゼル」は売り上げの新記録を樹立。「アートフェア東京」の辛美沙エグゼクティブ・ディレクターは、「ベネチアに集まった世界の美術関係者がそのままバーゼルに移動していた。そしてドクメンタへと向かう。ベネチアの出品作家の作品は、ほとんどバーゼルで売られている」と指摘する。

現代アート市場は、特に欧米で「バブル」を思わせる活況にあるのだ。例えば、ジャクソン・ポロック（米）の1948年の作品が昨年、絵画で過去最高と言われる1億4千万ドル（約170億円）で売られ、先月は18世紀の人間の頭蓋骨をダイヤで覆ったダミアン・ハースト（英）の作品に5千万ポンド（約125億円）の売値が付いた。

「市場の関心は、ゴッホやピカソ、クリムトら歴史的位置づけがはっきりしている作家から、現代作家へ移ってきている。その重要な一角を中国やインドが占めているのです」と辛さん。

日本人も続く

「非西洋」の一員である日本人作家も、両展で存在感を示していた。

港千尋氏が企画したベネチアの日本館では、岡部昌生が千点以上のフロッタージュ（こすりだし）作品を壁一面に展示した。

被爆地・広島の軍港につながる駅の跡地に紙をのせ、2Bの鉛筆でこすって写し取ったものだ。地表の凹凸やざらつきを身体に伝えながらの9年間にわたる力作は日本から持ち込んだ石の表面を観客にも写し取らせるという参加型の展示とも共鳴し、都市の記憶や歴史がわき出していた。

東洋の映像作品や加藤泉の絵画もイタリアやドイツのベテランに劣らぬ扱いを受けており、企画展示場では、藤本由紀夫の「音」をテーマにした作品が詩的な雰囲気を醸し出す。

ドクメンタでは、マンガとのつながりを感じさせる青木陵子の絵が好意的に受け取られていた。

世界最大規模の両展で増す非西洋の存在感。非西洋が脅かしつつも、西洋がしたたかに引き込む、そんな綱引きにも見える。（秋山亮太）

嵐で倒壊したアイ・ウェイウェイの作品＝ドイツ・カッセル市で

広島から持ち込まれた石の周囲を、岡部昌生のフロッタージュ作品が囲む＝ベネチア・ビエンナーレの日本館で、いずれも筆者撮す

朝日新聞　2007年7月19日朝刊

INFORMAZIONE E STAMPA S.R.L.
TEL. 065.836.722 FAX 065.84.859
il manifesto 13 SET 2007
via Tomacelli, 146 - 00186 Roma
Tel. 06.687.19.1 Fax. 06.687.19.573
E-MAIL: manammm@ilmanifesto.it

Masao Okabe, quel frottage per copiare il mondo

Incontro con l'artista giapponese in mostra a Roma, presente anche alla Biennale di Venezia

Manuela De Leonardis Roma

Stessa bandana di spugna gialla con cui è ritratto nelle fotografie all'interno della tipografia Idem di Parigi, Masao Okabe (Nemuro, Hokkaido 1942, vive a Kitahiroshima) si aggira per il grande spazio al piano terra dell'Istituto giapponese di cultura. La luce filtra attraverso i pannelli che ricordano la carta di riso. Tre trittici della serie *After Ujina* sono il perno ideale con il progetto *Is There a Future for Our Past?: The Dark Face of the Light*, con cui l'artista giapponese rappresenta il suo paese nel padiglione ai Giardini della Biennale di Venezia. Stesso curatore - Chihiro Minato - anche per la sua prima personale romana. *Attingendo memorie* (fino al 20 ottobre). L'opera più grande, la prima che ha realizzato al ghetto, è un cerchio grigio di sanpietrini che emerge da sei cartoni rettangolari neri, uniti tra loro dal nastro adesivo rosso. Nell'angolo a destra, una serie di appunti, scritte e date. Tra un ideogramma e l'altro, escono fuori i nomi di «Gino», «Via di Santa Maria del Pianto», Giacomo della Porta»... Il lavoro fa parte della serie dedicata a Roma, insieme ai frottage della chiesa di Santa Maria in Trastevere. In mostra, anche i lavori sul pavimento della storica tipografia di Montparnasse e *I pozzi di Venezia*. «Con sorpresa ho scoperto che nonostante Venezia sia una città d'acqua ha sempre sofferto per il problema dell'approvigionamento idrico - spiega Okabe - Al centro delle sue calli c'è sempre un pozzo che è anche luogo di aggregazione sociale, dove ci si scambia qualche chiacchiera. Oggi, inutilizzati, questi pozzi sono coperti da coperchi di ferro, ma non sono stati tolti. Presentano bellissime decorazioni a bassorilievo e scritte che mantengono intatto il loro fascino».

Masao Okabe ha studiato arte negli anni '60, attratto dall'incisione, prima di sperimentare nel 1977 i suoi frottage realizzati nella strada di fronte a casa sua. «Ci passavo tutti i giorni, quindi quello era il mio luogo della memoria. Fare frottage non è solo tirare fuori la forma da quello che si va a sfregare, implica un atto personale. La forza individuale determina il risultate».

In questa mostra c'è anche un lavoro presentato a Venezia, «After Ujina»...

Nel padiglione giapponese ci sono millecinquecento dei quattromila frottage che ho realizzato complessivamente per perpetuare il ricordo di Hiroshima. Ho portato a Roma tre opere della serie *After Ujina* proprio per creare un legame ideale tra queste due location italiane. Nella serie non ho incluso i frottage della piattaforma vera e propria, ma solo delle tracce delle vestigia ricorrendo anche all'utilizzo di elementi organici, piante e fango, insieme alle prime pagine di un quotidiane locale di Hiroshima che si chiama *Chugoku*.

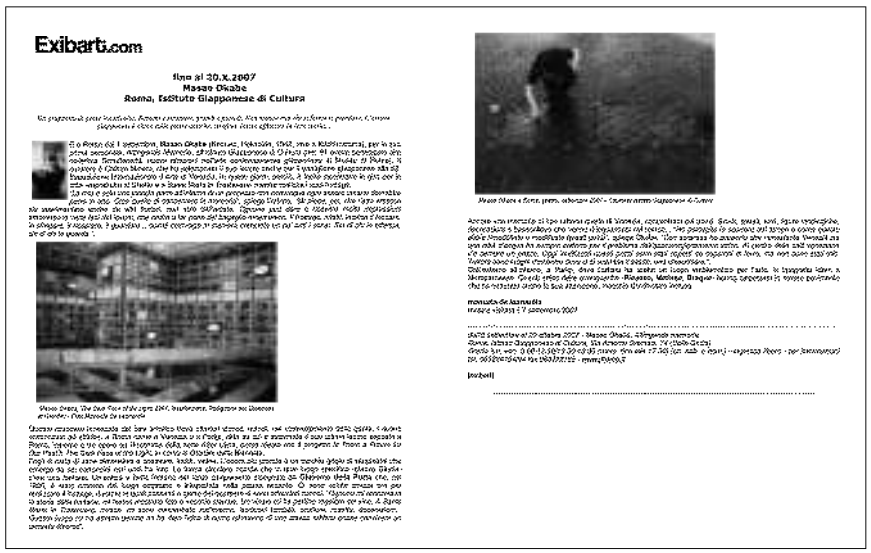
Come mai insiste tanto sul concetto di memoria?

Non parlo solo di Hiroshima. Ci sono molte cose nel mondo che non devono essere dimenticate. La mia è sole una piccola parte all'interno di un processo che ogni essere umano dovrebbe porre in atto. Mi piace, poi, che altri fruitori, oltre all'artista, sperimentino l'atto artistico del frettage, affinché possano provare una sensazione che andrà a far parte del loro bagaglio mnemonico. Il frottage implica il toccare, le sfregare, il ricopiare, il guardare... quindi è molte coinvolgente.

A Roma si è concentrato su due luoghi, il ghetto e la chiesa di S. Maria in Trastevere...

Quando, nel 1991, ho visitato Roma per la prima volta, ho dato la priorità al mondo antico, visitando e realizzando opere al Colosseo, ai Fori, sull'Appia, a Ostia Antica... Questa volta ho girato una Roma diversa. Da quando sono arrivato - il 1 settembre - ho già realizzato duecento opere. La prima, nonché più grande, è quella al ghetto. Sanpietrini messi appositamente per ricordare che lì si ergeva una fontana. L'autore di quella fontana in piazza delle Cinque Scole, conosciuta anche come la fontana di piazza Giudia, era Giacomo della Perta. Nel 1930 fu tolta dal luogo originario e trasportata nella piazza accanto. In piazza Giudia il cerchio di sanpietrini aiuta la memoria degli abitanti del quartiere, innescando un meccanismo immediato: la sua struttura spicca per la forma circolare e ricorda, per l'appunto, che la fontana era lì. Ho impiegato cinque ore per realizzare questo frottage e, come sempre mentre lavoro, si è formato un capannello di persone tutt'intorno, tra cui parecchi bambini che si sono messi a disegnare con me. Dalle botteghe uscivano i negozianti e ognuno mi raccontava la storia della fontana, mostrandomi foto e vecchie stampe. A Santa Maria in Trastevere, invece, mi sono concentrate sull'interno: iscrizioni tombali, rilievi, sculture, rosette, decorazioni... Queste luogo mi ha attratto, perché mi ha dato l'idea di come all'interno di une stesso edificio possa convivere un passato diverso.

il manifesto 2007年9月13日



Exibart.com

fino al 20.X.2007
Masao Okabe
Roma, Istituto Giapponese di Cultura

Masao Okabe, The Dark Face of the Light, 2007, frottage

Masao Okabe e Roma, presso Istituto 2007 - Courtesy Istituto Giapponese di Cultura

manuela de leonardis
martedì 18 settembre 2007

Exibart.com 2007年10月20日

岡部昌生；世界を写し取るフロッタージュ

ヴェネツィアビエンナーレとローマ展を行う日本人芸術家との対談　記者—Manuela De Leonardis

パリのIdemの写真と同じ黄色のバンダナを巻く岡部昌生（1942年生まれ，北海道根室市出身。北広島市在住。）は，ローマ日本文化会館の広いホールを歩いている。After Ujinaの３つの３部作は，ヴェネツィアビエンナーレ日本館で岡部昌生が表現するIs There a Future for Our Past?: The Dark Face of the Lightとの理想的な共通点となる。ビエンナーレと同様，港千尋がキュレーターを行う岡部のローマ初個展「記憶を汲みあげる」（10月20日まで）。一番大きくかつ最初に展示されたのは，ゲットーでの長方形の黒紙６枚に石畳が灰色の円形が浮かぶ作品。紙の隅には漢字の間に「Gino」「Via di Santa Maria del Pianto」「Giacomo della Porta」などが書かれている。Santa Maria in Trastevere教会での作品も同様にローマ展で展示された。更に，モンパルナスのアトリエとヴェネツィアの井戸も一緒に展示されている。「ヴェネツィアは水上の街にも関わらず，水の確保に困っていることが意外だった。
ヴェネツィアの広場の中央には必ず井戸があり，そこで人は会い，語らう。現在使用されないその井戸は鉄の蓋で閉められているが，井戸自体は取り去られてはいない。その上には魅力的で美しい装飾がそのまま残っている。」
岡部は60年代に芸術を学び始め版画に惹かれ，1977年に実験的なフロッタージュを開始した。自宅前の道でフロッタージュを制作したのである。「自分が毎日通る思いの強い場所でした。フロッタージュはただ擦るだけではなく個人的なアクションも巻き込みます。個人の力が結果を決めるのです。」

●当展示ではヴェネツィア展のAfter Ujinaも出ていますが…

日本館では，ヒロシマの記憶を伝えていくための4000のフロッタージュのうち1500点が展示されています。ローマにAfter Ujinaの３点を持ってきたのは，ヴェネツィアとローマを理想的にリンクさせるためです。ローマの展示ではプラットフォームを除き，植物・泥のような自然のものに広島の地方紙中国新聞の紙面を用いた作品を含めました。

●どうして記憶にこだわるのですか

広島だけではなく世界中に忘れてはならないことが沢山あります。人間一人一人が参加しなければならないプロセスの中では，私の役割はわずかなもの。アーティストだけではなく，参加者自身がフロッタージュという芸術的な共同制作を体験できるのを好ましく思います。なぜならその時の感覚を自分の記憶の中に残して欲しいから。フロッタージュというのは，触る・擦る・写す・見るという作業を伴う…つまり人をどんどん巻き込んでいくのです。

●ローマでの制作はゲットーとSanta Maria in Trastevere教会 の２カ所に集中されましたが…

1991年に初めてローマを訪れた際はコロッセオ，フォロ，アッピア，オスティアアンティーカなどで制作し，古代の世界を優先しました。今回は，一味違うローマを巡りました。9月1日に到着してから200作品を既に造りました。200作品の中で一番大きいのがゲットーの作品です。昔噴水があったことが分かるように石が組まれているその場所は，Fontana di piazza Giudiaとしても知られており，噴水はGiacomo della Portaの作品です。この噴水は1930年に元の場所から隣の広場に移されたそうです。Giudia広場の石の円形は，一瞬にしてここに噴水があったという記憶を町の人達に思い起こさせます。このフロッタージュには5時間をかけました。いつものように，私が作品を造り始めると周りに人が集まりました。その中には大勢の子供がいたのですが，私とともに描き始めました。また，店主達も店から出てきて，噴水の歴史を語ったり，古い写真や版画を見せてくれました。Santa Maria in Trastevere教会では対照的に，教会内部で制作を行いました。お墓の碑文やレリーフ，彫刻，装飾物…。この教会では，同じ建物の中に違う過去が共存しているという点に興味を惹かれました。
（翻訳：杉本絵理子　Maria Cristina Gasperini）

GLI STRANIERI

Un'installazione nel padiglione USA

Scheletri dalla Corea, il minimalismo dell'Australia, la parola denudata della francese Calle e le tragiche rovine di Hiroshima

Venezia

Nella memoria restano spesso le sensazioni delle cose, più che i ricordi vivi: della Biennale del 2007 rimarrà il senso della quantità notevole di lavori improntati sul mortifero, solo raramente con l'ironia di chi vuole esorcizzare anche la morte. Abbiamo già parlato degli Stati Uniti (aridamente inessenziali) e della Gran Bretagna (caduta piuttosto in basso, a livello pubico), nonché di Turchia e Africa, care al direttore Storr e sistemate in Arsenale. Continuando con le presenze straniere nei padiglioni dei Giardini troviamo modesta la performance della Germania (Isa Genzken), con un'installazione polisemica fatta di valigie sparse, nodi scorsoi con pupazzetti legati e astronauti appesi al soffitto o stesi addormentati sul pavimento, specchi e lastre di acciaio inox; è invece permeata di spirito giocoso l'uccelliera tecnologico-sartoriale del Canada, sebbene anch'essa propensa a soffermarsi sullo smembrarsi in dimensioni monumentali del corpo umano. Scheletri e video cimiteriali da parte della Corea, con display anatomico di ossa fabbricate in serie, e vivisezioni su automi in una metà della Svizzera: alieni, morte e poverismo retrò in Romania, ancora teschi e animali morti in parte della Spagna, che l'autore chiama "Paradiso spezzato" (legato a varie proposte filmiche e fotografiche di altri autori). Altre tonalità persistenti sono il tecnicismo in versione ottico-digitale e video computerizzato (Russia) e il minimalismo, che tocca il vertice con l'Australia (uno dei tre artisti, perché gli altri due li vedremo con la rassegna dei padiglioni sparsi in città), mentre la Polonia si spinge a trattare simbolicamente il decadere sociale, riempiendo lo spazio disponibile con l'ossatura in ferro di un'architettura che cede al proprio peso e si sbilancia.

Le fiebilità idestive le sorvoliamo, siano dei Paesi nordici o di Israele, della Grecia e di altri, per dare posto ai pochi esempi di pittura vera (l'astrazione fortemente espressionistica dell'austriaco Herbert Brandl, gli ampi spazi luminosi del danese Troes Wörsel) e di magistrale fotografia (il venezuelano Antonio Birceño, con le ricerche su popolazioni del suo paese sopravvissute in isolate enclave andine). Su versanti diversissimi si può trovare l'originalità di proposte vitali, come i tentativi di ricostruire per rimandi formali la grandiosità egizia di sei giovani artisti, la ricostruzione registrata (Olanda) di un'azione rapportata all'ambiente carcerario, il labirinto di lastre trasparenti del Belgio, le strutture e i dipinti-disegni del serbo Mrdjan Bajic.

Concludo con le due proposte che considero vincenti. Frigidamente intellettuale quella francese (Sophie Calle: "Prenez soin de vous"), che per motivo portante ha la parola: analizzata, denudata, comparata, (uccisa (su un bersaglio mobile), tradotta in musica, pronunciata e recitata in film con l'alfabeto dei sordomuti. E priva di grinze. Essenzialmente e tragicamente perfetta l'altra, del giapponese Masao Okabe, intitolata "C'è un futuro nel nostro passato? La faccia buia della luce", composta di una fila di sedici blocchi squadrati, prelevati dalle rovine della vecchia stazione ferroviaria di Hiroshima, distrutta dalla bomba atomica, e dei frottage eseguiti sulle loro asperità, che in numero di 1152 coprono totalmente le pareti. Non c'è bisogno di interpretare, di narrare, di dipingere, quando è la materia che dice tutto; la mano dell'artista si limita a obbedirla.

Ennio Pouchard

IL GAZZETTINO

CULTURA & SOCIETÀ

IL GAZZETTINO　2007年6月9日

韓国の骸骨，オーストラリアのミニマリズム，フランスのCalleによる裸の言葉，そして広島の悲劇の廃墟 ── Ennio Pouchard

記憶力というものはしばしば，生(なま)の記憶よりもむしろ，その時感じた印象の方がより強く残るものである。2007年のビエンナーレに関していえば，死すらも逃れたいという皮肉をこめた作品はほとんど見受けられず，死をもたらす物をテーマに取りあげた重要作品がいくつかあったという印象が残るだろう。

アメリカ(みすぼらしく，不必要)とイギリス(レベル低下)，アルセナーレでディレクターのStorrに庇護されているトルコとアフリカについては既に語った。外国について更に語ると，ドイツのパフォーマンス(Isa Genzken)は多義的なインスタレーションで，物足りない。散らばったトランクや，首吊りの人形，天井に吊られたり床で眠る宇宙飛行士，鏡や板が展示されている。一方，大サイズの人体を解体し展示しているカナダの技術的で職人的な鳥かごには，ひょうきんなユーモアが染み込んでいる。

韓国は骸骨と墓地をテーマにしたビデオを放映，シリーズ制作の人骨模型のディスプレイも並ぶ。スイスはロボットを手術で切開。ルーマニアは宇宙人・死・貧困がテーマ。スペインは，"折られた天国"と作家が名付ける頭蓋骨と死んだ動物がスペイン館の一部をなしている(そしてそれは他の作家の映像や写真の展示へと繋がる)。他の共通点といえば，ロシアの視覚的デジタルとビデオコンピューターの技術主義。そして，頂点に触れるオーストラリアのミニマリズム(3名の作家の内の1名。他2名は市内のパビリオン内に展示)。ポーランドは社会の退廃(デカダンス)を，重すぎて不安定な鉄の構造でスペースを占めるという手法で象徴的に表している。

発想的に弱いスカンジナビア，イスラエル，ギリシャやその他の国はとばし，ここに挙げたいのは数少ない真の画家(オーストリア人Herbert Brandlの表現主義的な抽象や，デンマーク人Troes Worselの広く明るいスペース)や良く作りこまれた写真(ヴェネズエラ人Antonio Birceno による，アンデスの飛び地で生き残っている民族に対する研究)。他にも様々な展示の独創性が味わえる；エジプトの若手芸術家６名による，古代エジプトの荘厳さを再現させる試み。オランダの刑務所環境に関係している動作の映像。ベルギーの透明な板の迷宮。セルビア人Mrdjan Bajicの構成と絵。

最後は一番素晴らしいと感じた展示の話で終えたい。

言葉をモチーフにした，冷静なインテリフランス人(Sophie Calle: "Prenez soin de vous")。その言葉は分析され，裸にされ，比較され，(動いている的に)撃たれ，音楽的に解釈され，発音され，演じられ，点字を用いて映画化された。

そして本質的に，そして悲劇的に完璧であるのは，「わたしたちの過去に，未来はあるのか。The Dark Face of the Light」と名付けられた日本館の岡部昌生である。原爆で破壊された広島の駅から切り取られた16の石の連なりが展示され，その1152枚のフロッタージュが壁を覆う。解釈も，論ずる必要も，描写する必要もない。そこにある作品が全てを語るのである。作家の手が，素材の求めるままに応ずるのである。

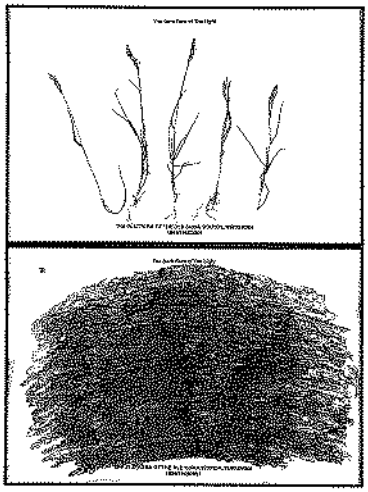
(翻訳：杉本絵理子　Maria Cristina Gasperini)

Ennio Pouchard氏は他にも簡単な記事を書いており，是非伝えて欲しいとのメールがありました。ここに転送された記事を掲載します。(翻訳：今井里江子)

"Dei 77 padiglioni nazionali disseminati ai Giardini, in Arsenale e in città, è sconsigliabilissimo perdere il Giappone: da una fila di 16 blocchi souardratl, prelevatl dalle rovlne della stazlone frrovlaarla di Hiroshima, distrutta dalla bomba atomica, l'artista Masao Okabe trae 1152 frottage coni ouali copre totalmente le pareti. il testimone passa da una mano all' altra e parla una lingua sola, che é di fratellanza, di armonia, di futuro".

ジャルディーニ，アルセナーレ，そして市内に点在する77の各国パビリオンの中で，最も見逃してはならないのが日本館である。そこにはまず，16個の方形の石が一列に並ぶ。原爆で廃墟となった広島の鉄道駅から持ち出されたものだ。アーティスト・岡部昌生は，この被爆石の列から1152のフロッタージュで覆いつくされた壁面全体へと，見る者の目を引きこんでいく。このヒロシマの証しは手から手へと伝わり，友愛，調和，そして未来という人類共通の言語を語りだすのだった。

よみうり堂



「THE DARK FACE OF THE LIGHT 2001」北海道立近代美術館蔵

「岡部昌生　わたしたちの過去に、未来はあるのか」

港千尋編

美術家の岡部昌生は、都市の敷石や壁に紙を当て、2Bの鉛筆で表面をこすり取ってきた。拓本に似たこの「フロッタージュ」技法で、土地の歴史をなぞり、人々の記憶を呼び覚ます。

制作地の一つが広島市の旧宇品駅プラットホーム。外地に兵員を送り出した軍用鉄道の遺構に、被爆地と軍都という戦争の両面性を感じ、撤去されるまで400枚を刷り取った。採取した植物も添えて。

その一部は現在、第52回ベネチア・ビエンナーレ美術展に展示されている（11月21日まで）。日本代表として日本館の内壁を作品で埋め尽くし、床には敷石の実物を縁に並べた。

先月会場を訪れると、観客が紙をもらって敷石に当て、思い思いにこすっていた。誰にも鉛筆で何かを写し取った覚えはある。岡部の仕事には、見る人を興奮抜きに共振させてしまう強さがあるのだろう。

広島を中心にパリ、ローマ、韓国・光州など、30年に及ぶ制作を振り返った作品集。（東京大学出版会、3800円）（清）

読売新聞　2007年7月22日朝刊

魚眼図

岡部さん

今年の道内美術界の話題と言えば「岡部さん」。百十二年という長い歴史を誇る、世界的に有名な現代美術の祭典「ベネチア・ビエンナーレ」に今年六月から五カ月余り、晴れて日本の代表作家として参加（評論家・港千尋さんとのコラボレーション）、世界中の人々に強いインパクトを与えつつ、その重責を立派に果たした岡部昌生さんのことだ。

むろん道産子美術家として初の快挙でもあり、師走も押し詰まったいま、新たな希望を開く出来事として心に甦ってくる人は多いのでないかと思う。私もその一人で、今回の一件は岡部さんのこれまでの仕事の意義とその重みに、あらためて気づかされる格好の機会だった。

テーマや展示内容についてはすでに折々に紹介されているので省くが、展示の充実とともに岡部さんが人一倍重視したのが「フロッタージュ（擦りだし）によるワークショップ」だった。多くの市民と一緒に路上で展開する「フロッタージュの共同制作」といってもよい。

幸い、現地の会場内や街中で大学生や社会人、また地元小学生の参加のもとに行われたワークショップは大成功だった。作業にいそしむ参加者一人一人の表情が如実にそれを物語っていた。見た目はシンプルだが実は奥の深い擦りだしの技法により、かつて見たことのない不思議な形が次から次と現れてくる。その時の新鮮な驚きと喜びが「いい顔」に結びついたのだ。

岡部さんのこうした仕事のやりかたはまさにコミュニティーアートと呼ぶにふさわしい。一九六八年ごろのロンドンで提唱され始めたこの言葉であるが、日本における定着はまだまだ。でも時代は着実にその方向に向かっている。来る年も大いにご活躍を！。

（奥岡茂雄・北翔大大学院教授＝美術文化論）

北海道新聞　2007年12月28日夕刊

2007年 文化の動向

今年の文化の動向を美術を軸に振り返ると、戦争・紛争の問題が浮かび上がる。繰り返される殺戮の歴史を忘却から救い出す試みが目についた。

編集委員 菅原教夫

戦争の記憶 喚起

地道で粘り強い試み目立つ

東京・六本木にこの1月オープンした国立新美術館は、年内に305万余人の入館者を集めた。休館日を除くと1日平均ほぼ1万人の入場者があった計算になる。同館を訪れる度に感じるのは年配の入館者が多いことだ。日本社会の高齢化を実感する。若者たちの姿はこれに比べてあまり目立たない。

「ドイツの若者はアートに関心を持たなかった」。5年に1度、ドイツ・カッセルで開かれる国際美術展ドクメンタで今年芸術監督を務めたルート・ノアックさんはそう語る。だからこそドクメンタでは若者に報酬を払って展示の説明係に積極的に採用し、教えることを通じてアートに親しむ術を学ばせたという。芸術でも教育の工夫は大切だ。そのせいか同展には地元の関心が高まり、100日の会期中に約75万人という史上最高の入場者を集めた。

ドクメンタを含めて今年は伝統を誇る大型国際現代美術展の当たり年だった。なかでも夏から秋にかけて開かれたベネチア・ビエンナーレでは戦争や紛争をテーマにした作品が目立った。同展の芸術監督を務めたのは「ニューヨーク近代美術館（MoMA）の学芸員だったロバート・ストー氏。その企画を「MoMAには美的なものを大切にする伝統があるが、ストー氏はあえて政治的な主題に踏み込んだ」とノアックさんは分析した。

イラク戦争や旧ユーゴスラビア地域での紛争はもちろん、ホロコースト（大量虐殺）や原爆など過去の殺戮をテーマにした作品も同展には並んだ。代表的なのは金獅子賞を受賞したレオン・フェラーリ氏（アルゼンチン）の作品で、キリストを磔にした米軍戦闘機が墜落したり、キノコ雲を造形したりの彫刻が陳列された。「西洋文明、キリスト教文明はかつてない野蛮に瀕している。私の作品は風刺の利いた政治批評だ」という意味のことをフェラーリ氏は語っている。

同展に日本代表として出品した岡部昌生氏の作品も戦争の記憶を喚起した。日清戦争以来、軍港として栄えた広島・宇品は、同時に被爆の痕跡を残す、加害・被害の矛盾を抱える土地である。岡部氏は旧国鉄宇品駅のプラットホームの地肌をこすりだした膨大な量の作品を展示。ベネチアまで被爆石も運び、入場者に体験制作してもらった。

宇品は高速道路ができ、都市化の波に洗われている。岡部氏の作品「わたしたちの過去に、未来はあるのか」からは戦争の記憶を失うまいとする意志が伝わる。確かにグローバル化などが進む社会にもまれているうち、いつしか大切な記憶が風化し、忘れ去られることが危惧される。

紛争だらけの世界のなかで戦後続いた「平和」は、日本が誇れるかけがえのない価値だ。今年の論壇の収穫とされた篠田英朗・広島大学平和科学研究センター准教授の論文「平和とは生き続けることである」（『RATIO』3号）は「平和構築とは、矛盾と苦しみに満ちたものだ。だがそれが何だろう。平和という理念は、美しく、深く、精緻であるから、称賛されるのではない。それは単に生きるために、必要だから、求められるのである」と、平和の意味を味わい深く説いた。

「平和」は昨日今日に実現できるお題目ではない。その維持には地道で粘り強い取り組みが必要だ。岡部氏は今回の制作に9年をかけた。フェラーリ氏は60年にわたる営みが評価された。戦争の記憶は時間をかけて若い世代に引き継いでいかなくてはならない。

世界に開かれた窓

ベネチア・ビエンナーレ

<上>

島まるごとアートの祭典

〝欧州中心〟脱却を模索

イタリアで開かれている第五十二回ベネチア・ビエンナーレ国際美術展（六月十日―十一月二十一日）の日本館に、北広島在住の岡部昌生さん＝札幌大谷大教授＝が出品している。広島に十年近く通い続け、被爆の歴史と海外派兵の拠点という相反する側面を持つ、国鉄旧宇品駅のプラットホームを対象に制作してきたフロッタージュ（こすり取り）作品を出展した。開幕前から一般公開までの現地の様子を振り返りながら、道内在住作家が初参加した意義を考えてみたい。

（西家昌伸）

関連企画が40以上

「ベネチアは魚みたいな形でしょう」。日本館の展示準備を取り仕切る現地コーディネーターを長年務めてきた武藤春美さんが、こう教えてくれた。市街地から離れ、魚のしっぽに当たる島の東端に、ビエンナーレ会場のジャルディーニ公園とアルセナーレ（旧国立造船所）がある。両会場のほか、パビリオンを持たない国が市街地の邸宅や教会で行う展覧会も近年増え、今回も約三十の国・地域が開催した。また、李禹煥、ビル・ビオラ、森村泰昌ら大御所の個展やグループ展などと関連企画が四十以上もある。

船が自分の足以外に交通機関がない島だけに、数日の滞在では回り切れない「島まるごとアートの祭典」の様相を見せる。

三十の国別パビリオンが並ぶジャルディーニ公園には、木立に包まれ、神社の参道を思わせる一本道がある。奥からイギリス館、ドイツ館、フランス館が並び、会場で最も人気の高い一角。日本館もドイツの隣、フランスの向かいと、なかなかの好位置だ。

社会や人間に迫る

日本館の展示準備が一段落したのを見計らい、各国展示を〝偵察〟してきた岡部さんは「東欧圏など歴史がさまざまな傷を与えてきた国々の展示にリアリティーがあった」と感想を漏らす。ポーランドは館内いっぱいに鉄の格組みを広げ、重苦しささえ感じるインスタレーション（架設展示）。NPOエスエア（札幌アーティスト・イン・レジデンス）が五年前に滞在制作事業で札幌に招いたモニカ・ソスノフスカの作品だ。

ギリシャ館の作品「ジ・エンド」も印象的。テーブルに縦横に張られた紙のクラフト、万華鏡のような色彩と造形の映像から成る、壮大かつ繊細なインスタレーション。作者のニコス・アレクスィユは「ギリシャのアトス山にある修道院の床のモザイク模様や、映画『二〇〇一年宇宙の旅』に想を得た」と説明する。アトス山はギリシャ正教会の聖地とされる山で、この国が東西文化の結節点にあることを思い出させる。

二度目の参加となる中国の会場はアルセナーレ奥の巨大な倉庫で、女性作家四人が出展。色どりの布で剣をくるんだ「テレビ塔形の武器」を天井から吊り、「兵器庫」を実現したイン・シウジェンの作品や、カン・シュエンの滑稽なビデオ作品が目を引く。

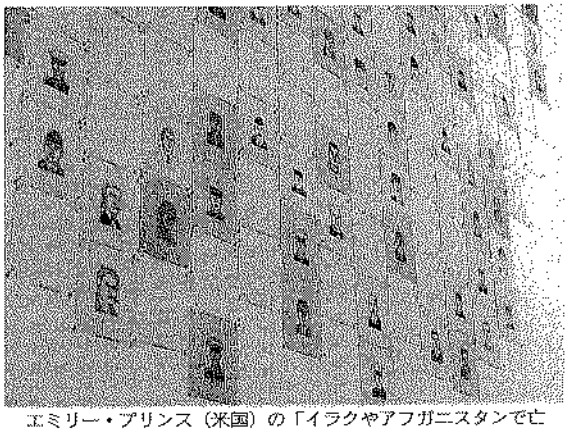
アルセナーレの展示は、デレクターを務めるニューヨーク大教授のロバート・ストー氏が百人を選抜した企画展が柱。「感性で考え、心で感じる」という抽象的なテーマだが、結果的に戦争や死など社会や人間の根源的な問題を扱った作品が多かった。

米国のエミリー・プリンスによる「イラクやアフガニスタンで亡くなった米軍人」という作品は、戦死した兵士の写真を三千枚以上、インターネットなどで集め、その顔を鉛筆で写し取った肖像画を地図のように並べた。また、中国のヤン・ジェンジョンは、世界の人々が「アイ・ウィル・ダイ（私は死にます）」と思い思いに語る姿を、複数の巨大なスクリーンに映した。

「異文化」の特集展

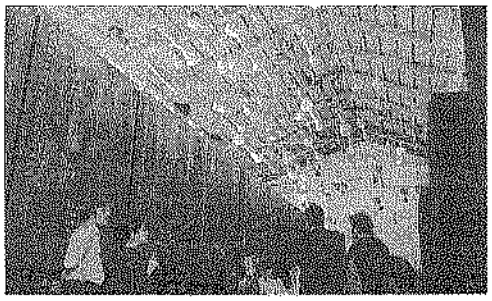
ベネチア・ビエンナーレは欧州中心主義が強く反映した美術展と言われている。それが今回は、アフリカやトルコなど歴史的に「異文化」だった地域を特集展示したし、中国や韓国などアジアのアート市場の活況に影響を受けていることも明らか。ストー氏が初の米国人ディレクターという事実を含め、運営の方向性を模索するビエンナーレの姿が浮かび上がる。

この美術展が百二十年もの間、脈々と続いてきた背景には、各国パビリオンを設置し、オリンピック方式で賞を決める仕組みの効用がある。加えて、国や地域の多様性が顕現になる国別展示と、最新アートを見本市のように紹介する企画展で、世界の現代美術の縮図をバランスよく提示しているのも魅力だ。道内でも国際美術展の継続開催を目指す動きがあるが、「世界に開かれた窓」とも言える若手美術展に学ぶべき点は多い。



エミリー・プリンス（米国）の「イラクやアフガニスタンで亡くなった米軍人」

繊細な色彩と造形が目を引くニコス・アレクスィユ（ギリシャ）の「ジ・エンド」



天井から吊られた作品に異様な圧迫を受けるイン・シウジェン（中国）の「兵器庫」

北海道新聞　2007年8月6日夕刊

世界に開かれた窓

ベネチア・ビエンナーレ

＜中＞

高いヒロシマへの関心

ワークショップと被爆石

「フロッタージュという方法で、ライオンの紋章をすり取ってみましょう…。（作品を見せて）どうですか？」

「すごくいい！」

子どもたちが感嘆

ベネチア・ビエンナーレ国際美術展の一般公開が前日始まったばかりの六月十一日、アルセナーレ（旧国立造船所）近くの教会に、サン・ジュゼッペ小学校の子どもたちの感嘆の声が響きわたった。北広島在住の美術家岡部昌生さんと日本館スタッフによるワークショップ。紙が配られると、待ち切れない様子で石造りの床に陣取り、墓標の文様をこすり取った。作品を岡部さんに見せにくる子もいる。

広島で制作した作品の展示と並んで、ベネチア市民にフロッタージュを体験してもらいながら作品を作っていく試みは、岡部さんのプロジェクトの大きな要素だ。日本館展示もそのコンセプトに貫かれていた。

日本館の被爆石でフロッタージュを試み、楽しそうに石の凹凸をこすり取る来館者たち

広島で向き合ってきた旧陸鉄宇品駅プラットホームの縁石を運び、館内に十六個並べた。来館者は六十二年前に原爆の熱線を浴びた「被爆石」の存在に驚き、その石でフロッタージュできると分かると積極的に参加した。開幕を控えた内覧会では、被爆石の前に人が殺到。日本館を訪れた東京・森美術館の逢坂恵理子プログラム・ディレクターは「ベネチア・ビエンナーレでは参加型の企画が少ないので興味を持たれるのでは」と話す。

問いを続ける意味

岡部さんは当初、日本館を自らの展示で「崇高壮大な空間にしたい」と語っていた。展示はほぼ構想通りだったが、ひっきりなしに出入りする関係者が、岡部さんやコミッショナーの港千尋さん＝写真家・評論家、多摩美大教授＝を質問攻めにし、フロッタージュ体験への対応にも追われる状況は予想以上だった。

そこで力を発揮したのは、展示テーマの「わたしたちの過去に未来はあるのか」に即し、港さんが書いた解説文だ。日本館入り口に掲示された英文とイタリア語の文章を読み、来館者は岡部作品のコンセプトを理解する。とくにヒロシマへの関心は高く、マスコミも「よく勉強していて、質問は的を射ていた」（岡部さん）という。

内覧会期間中の日本館レセプションでも、港さんの英語のスピーチが来場者を引き付けた。「私たちは希望も平和も、問いを続けることを通してのみ実現が可能であり、他者とともに問い続けることにこそ、私たちの力があると信じなければならない」「（過去に生きた人々の期待に応えることは）私たちの責務であり、人間の想像力はそのために与えられた。そこにおいて私たちの創造性は、最大の強みを発揮すると信じる」

開幕の約九カ月前、日本館展示を主催する国際交流基金（東京）が、展示を企画するコミッショナーと出展作家を発表した。まずコミッショナー候補を選び、それぞれが白羽の矢を立てた作家と、その展示プランからコンペ方式で決まった。フランスと日本を行き来し、写真家と評論家の両方の視点から岡部さんの仕事を的確に紹介しようと務める港さんをコミッショナーに得たことは、間違いなくプラスに作用した。

ベネチア市街の井戸の文様をこすり取る岡部さん（右）と、映像で記録する港さん（左から２人目）

新シリーズを制作

港＝岡部の共同作業は今後も当分続く。岡部さんはベネチア滞在中、日本館の被爆石を繰り返しフロッタージュし、「ベネチアの広島」と題する新シリーズを制作した。また、ワークショップと並行して続けた「井戸のプロジェクト」も同様だ。干潟に人工的に築かれた島都市ベネチアでは、水確保のため雨水をためておく井戸が各所に作られ、その必要性が失われた現在も「井戸端会議」のようなコミュニティーの場となっている。岡部さんは連日、島を歩き回って井戸に彫り込まれた紋章や図像をこすり取り、港さんが映像として細密に記録した。

「ベネチアの広島」や「記憶を汲みあげる」と名付けた井戸プロジェクトの作品は、九月からローマで始まる個展に出品される。同時期にパリ、東京でも個展を開く。これまでも岡部さんは、ひとつの仕事を基点とし、知り合った人と別の土地で新たな制作に取り組むという循環を尊重してきた。北海道、広島、パリ、ベネチア、そしてローマへ。岡部さんは「ステージの大きさと、人と人とのつながりを強く感じた」と語り、自らの仕事が世界的な規模で手渡され、広がっていく実感をかみしめている。（古家晶彦）

北海道新聞　2007年8月7日夕刊

世界に開かれた窓
ベネチア・ビエンナーレ
<下>

作家同士交わすエール

称賛、共感…新たな期待

北広島在住の岡部昌生さん＝札幌大谷大教授＝が作品を発表したベネチア・ビエンナーレ美術展の日本館展示に、真っ先に反応したのは北イタリアの地元紙「ガッゼッティーノ」だった。関係者向け内覧会中の六月八日朝刊に、署名記事で、前評判も高かったフランス館の写真家ソフィ・カルと岡部さんを並べて「勝利者（受賞者）と称える二人」と報じた。

例年、ベネチア・ビエンナーレの最高賞に当たる金獅子賞などは、開会式に合わせて発表される。しかし今年は十月発表の予定という。賞発表というクライマックスを会期後半に設定し、再び盛り上がりを演出したいという風潮とともに、島全体に広がっている展覧会を世界各国の審査員にじっくり見てもらおうという意図もあるようだ。

内覧会から一般公開までの一週間足らずに、驚くほど多くの人が日本館を訪れた。コミッショナーや作家に「コングラチュレーション（おめでとう）」と声をかけ、作品に関心があれば、直接に話を聞きたがる。

写真家と共同制作

日本館ではふたつの劇的な出会いがあった。

ひとつはコミッショナーの港千尋さん＝写真家・評論家、多摩美大教授＝の紹介で、パリ在住の盲目の写真家ユジェン・バフチャルが日本館を訪れ、岡部さんとの共同制作を実現させたこと。

戦争によって視力を失ったバフチャルは、漆黒の闇の中で照明をランダムに当てながら撮影する独自の手法で制作を続けてきた。閉館後に日本館を訪れたバフチャルは、まず被爆石の手触りを何度も確かめ、展示等の写真を撮影した。続いて岡部さんが闇の中でプロッタージュする姿を写真に収めた。静寂の中で助手に指示を出す声と、岡部さんが石の凹凸をこすり取る音だけが響く。

展示の様子を気配で感じ取ったバフチャルは「言葉に表せないほどの感動を得た」と語った。「戦争は人を盲目にしたが、あなたが原爆以後の広島で制作することで、いったん盲目になった人に光を与える仕事をしている。そういう仕事が可能ということを、オカベさんは示した。ここまで来たかいがあった」

もうひとつはビデオアートの第一人者である米国のビル・ビオラの訪問だ。ある日、ふらりと日本館に現れたビオラは、岡部さんが取材を受けているのを見ると、一枚のメモをスタッフに手渡して立ち去った。そこには岡部作品への賛辞が書き連ねられていた。

「岡部作品が一番」

ビオラ本人の許可を得て、メモを要約して紹介する。「あなたの並ばれた作品と、ひとつの場所と瞬間への集中力に感動しました。それはすべての場所、時間、生と死、魂にもつながります。アートを超えた美しい仕事に感謝します」。港さんと岡部さんも後刻、ビオラの展覧会が開かれている市街地のサン・ギャロ教会を訪ね、作品をたたえ合った。

ビオラは後日の電子メールでも「あの日、ジャルディーニで見た展示で岡部の作品が一番たったと思う」と強調。岡部さんも「作品を通じ合うことにより、作家が互いにエールを送り合う場なのだと感じた」と振り返る。

平和な気持ちを

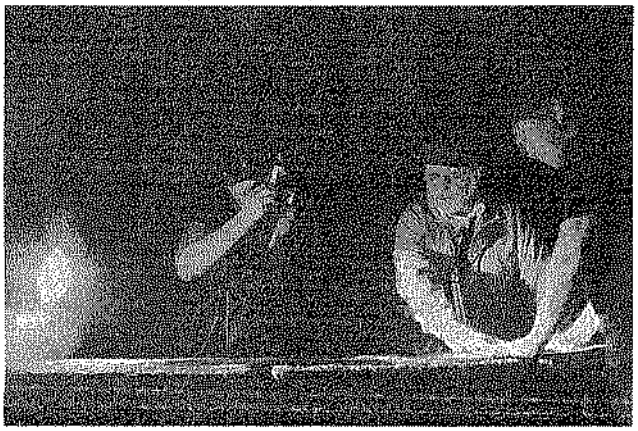
日本館を訪れ、港さんや岡部さんに話しかける人が多いなかで、特に食い下がるように質問する人がいた。美術教育プログラムを提供しているニューヨークの団体「シティアーツ」の総合ディレクター、ツィビ・ペンハイムさん。彼女は「あなたの作品は美しい。だが戦争の歴史をなぞるだけではなく、未来に向け、平和な気持ちを抱かせる次の仕事に期待したい」と意見を述べた。

なるほど、岡部さんの仕事は現象的には「街の記憶に触れる」ことだ。だが同時に「わたしたちの過去に未来はあるのか」という疑を掲げ、港さんも「廃墟の時間に創造性を見出すことが求められている」（岡部昌生作品集より）と書いている。ペンハイムさんが作品のコンセプトを理解しつつ、あえて述べたのかどうかは分からない。

いずれにしても、同じように各国のマスコミや評論家が岡部さんらの出展作品に触れ、議論を戦わすことになろう。創造の舞台の広がりが岡部さんの制作に影響を与えることは言うまでもないが、岡部さんの貴重な経験がめぐりめぐって、北海道で制作を続ける作家の意欲や視点に刺激を与えることも期待したい。

（古家晶彦）

闇に包まれた日本館で、岡部さん（右）の制作風景を撮影した写真家バフチャル（右から2人目）



岡部さんに質問を浴びせるペンハイムさん。内覧会の間は同様のシーンが何度となく見られた

北海道新聞　2007年8月8日夕刊

芸術

ヴェネチア・ビエンナーレ報告

フロッタージュで都市の触感共有

港千尋

第五十二回ヴェネチア・ビエンナーレが開幕して五カ月あまり、世界中から延べ二十万人以上の人々が訪れた現代美術の祭典である。主会場となった市立公園、通称ジャルディニ会場の瑞々しい緑が、いまとなっては懐かしい。二年毎に開かれる「ビエンナーレ」や三年毎の「トリエンナーレ」という呼称は、世界各地の都市でそれぞれの催しが行われている今日では、そう珍しいものではない。しかしヴェネチアはそれらのなかに置いてみたとき、やはり特別なステージだというのが、日本館コミッショナーとして参加しての実感だった。この機会に、わたしたちの展覧会をとおして、「特別なヴェネチア」を振りかえってみたい。

★近代の歴史

代表作家の岡部昌生さんと組んだプランは、日本館の壁全体を床から天井までフロッタージュを中心にした作品で埋め尽くすというものだった。ライフワークである広島市の旧字品駅跡で、九年間にわたり制作されたなかからおよそ千五百点の作品を選び、そのうち千百五十二点をフレームに額装して一点一点グリッドに嵌め込んでゆくというものである。会場の中央には、フロッタージュされた字品の被爆石が、一直線上に置かれる。オープニング時に聞いたなかでは、シンプルで静かだが、同時に強い印象を与えるという感想を思い出す。

フロッタージュに入っている数字のひとつ「1894」は、この駅が日清戦争直前に完成した軍事目的の駅であることを示している。偶然の一致にすぎないが、ビエンナーレはこの年に立案され、翌年の一八九五年にスタートしている。ヴェネチアが特別なのは、百年以上という長期にわたり続いているところにあるが、そこには近代国家の歴史が強く刻印されているのである。

★美術と国

それはこのビエンナーレだけが、国別の参加枠を続けていることに現れているだろう。今回は七十六カ国が正式に参加しているが、ジャルディニ会場にあるパビリオンのほとんどは、それぞれの国の政府所有の、言ってみれば「美術の大使館」である。この方式に対して、少なくとも二十世紀以降、国境を超えて展開してきた美術が、国の名と結びつくのかという疑問が出てくるのは当然だろう。

だが訪れた人の多くは、作品や作家をどのパビリオンで見たかで記憶しているはずである。そこでは美術のほうが国の名を逆に照射しており、特に今回は総合ディレクターのロバート・ストア氏がそのことを強く意識していたようである。彼は初のアメリカ人ディレクターとして、ひとことで言えば現代美術の表現をとおして「アメリカ」とその紛争を批判したかったのかもしれない。アフリカのアーティストの参加も今回の特徴のひとつだろう。国別パビリオンを続けつつ、それを超えた枠組みを模索していることが見えてくるのである。

★ヴェネチアの未来

以上のような理由にもまして「ヴェネチア」を特別なものにしているのは、何といってもその壮麗な都市そのものにある。市内に散らばっている会場の多くは、どれもが歴史を刻印した建物ばかりであり、作品よりも壁や天井のほうに目が行ってしまうこともある。だが「わたしたちの過去に、未来はあるのか」という日本館のテーマは、ある皮肉な現実を浮き上がらせる結果となった。それはこの世界遺産都市が、深刻な過疎化に悩んでいるという現実である。ピーク時の観光客は住人の何倍にもなるという。住むことの記憶を失いつつある都市という言い方も聞いた。

わたしたちが会場や市内数カ所で企画したワークショップは、日本館のテーマを街中で展開する試みであったが、大学生や社会人、特に地元の小学生とともに行ったフロッタージュは、都市に手で触れることの面白さを共有できたように思う。地面や壁に目を近づけるだけで見えてくる幾層がある。擦りだされた都市の記憶が、どんな形で残っているのか、いつの日にか再会したいと願っている。

（みなと・ちひろ＝写真家、評論家、多摩美術大学教授）

ヴェネチアの修道院で開かれた小学生とのワークショップ。手前は岡部さん（いずれも筆者撮影）

日本館のインスタレーション

東京新聞　2007年11月24日朝刊

美術が想起させたもの

▷上

ベネチア・ビエンナーレを振り返る

ヒロシマ 世界の舞台に

二〇〇七年は、伝統を誇るベネチア・ビエンナーレ国際美術展（六―十一月）に北広島在住の岡部昌生さん＝札幌大谷大教授＝が出展した年として、北海道美術史に記録された。ビエンナーレ日本館の展示作品や、現地で行ったプロッタージュ（こすり取り）のワークショップは、市民や世界の美術関係者に何を想起させたのか。広島で岡部さんの仕事を長年見つめてきた竹澤雄三さん、日本館コミッショナー（企画者）の港千尋さん＝写真家・評論家・多摩美大教授＝、そして作家の岡部さんに、ビエンナーレ体験を振り返ってもらった。

竹澤　雄三

原爆投下は、その莫大な破壊力によって一瞬のもとに都市のあらゆる物を破壊した。さらに、許容量をこえる放射能は人体に無表情で侵入し、いつのまにか生命機能を破壊するという、かつて経験したことのない異次元空間へ人を迷い込ませた。

二十二年前、私は、道立旭川美術館を離れ、郷里広島市の美術館建設に携わることになった。「ヒロシマを礎に、新しい美術館を作るのなら、きっとこれまでにない特別なパワーをもった美術館ができる」との思いで、広島市現代美術館の開設とその後の運営にかかわってきた。

ベネチア・ビエンナーレ日本館で来場者向けにプロッタージュの実演を見せる岡部さん（中央）、港さん（手前）

しかし、ビエンナーレの第四十六回展を見るため私が初めてベネチアを訪れた一九九五年、マルコポーロ空港に降り立った時、強いむなしさに襲われた。かねてより感じていたことだが、「人間」の研究において「ヒロシマ」はもっと注目すべき対象であるのに、その視点もなしに「ベネチア語で」をする日本の美術関係者のあり方と、同じ意味で大した成果も出せないままベネチアに来てしまった自分自身への戸惑いであった。

岡部昌生さんと広島の縁は八七年、現代美術館が「ヒロシマ」というテーマによる制作委託をお願いしたことに始まる。その時、岡部さんはヒロシマについて「ヒロシマのすべての街路には、人と生と死が、色濃く塗り込められている。わずか五十センチほど掘り下げるその下に、土と化した生と時がある」とコメント（抜粋）している。

九六年の現代美術館でのワークショップをきっかけに、多くの兵士を前線に送り出した旧国鉄宇品駅プラットホームが、岡部さんの主な制作の場となる。北海道から通い続け、約四千点の作品を生み出した。これほどまでにヒロシマを制作現場とし続けた作家はいない。

ヒロシマは、世界の多くの現代美術関係者とのつながりをつくってきた。今回のビエンナーレにおいては総合企画者ロバート・ストー、メーン会場の最初にその作品が展示されていたナンシー・スペロ、そしてチリの映像作家アルフレッド・ジャーなど、いずれも現代美術館を通じて広島と縁の深い人である。それにもまして、日本館コミッショナーの港千尋、作家岡部昌生両氏によって「ヒロシマ」が世界のひのき舞台に登場したことは、広島にとって画期的なことであった。

一方、六十二年たった今なお核の恐怖と闘うヒロシマがある。「明日を生きる」人類の支えとしてアートが存在するのか。このたび華やかなベネチアで、世界の人々に「ヒロシマの人と生と死」を提示した岡部さんは、早くも次の構想として被爆樹木、そして「アフター・ウジナ」（宇品以後）の制作に入っている。

「ヒロシマ」と「ヒロシマの美術」は、さらなる作品の誕生を待っている。

（たけざわ・ゆうぞう＝元道立旭川美術館学芸課長・前広島市現代美術館副館長・美術評論家）

北海道新聞　2008年2月6日夕刊

美術が想起させたもの

▷中

ベネチア・ビエンナーレを振り返る

個人の経験　世界を投影

港　千尋

二〇〇七年は現代美術にとっては特別な年になった。ドイツのカッセル市で開かれたドクメンタと、ミュンスター市の彫刻フェスティバル、そしてベネチア・ビエンナーレ。それぞれ五年、十年、二年ごとの開催だから、十年に一度のめぐり合わせである。そのような年のビエンナーレに、岡部昌生さんとともに、コミッショナーとして参加できたことは幸運であり、美術の現在を俯瞰するまたとない貴重な機会になった。

これら三つの催しを見ながら、さまざまなことを考えさせられた。まず、西欧から始まった近現代の美術の歴史が曲がり角に来ているという強い実感をもった。かつて西欧という鏡に自らを映しながら近代を歩んできた世界は、いまやそれぞれの地域が独自の発展を示している。美術も例外ではない。ビエンナーレではアフリカがクローズアップされ、ドクメンタでは中国が存在感をもっていた。

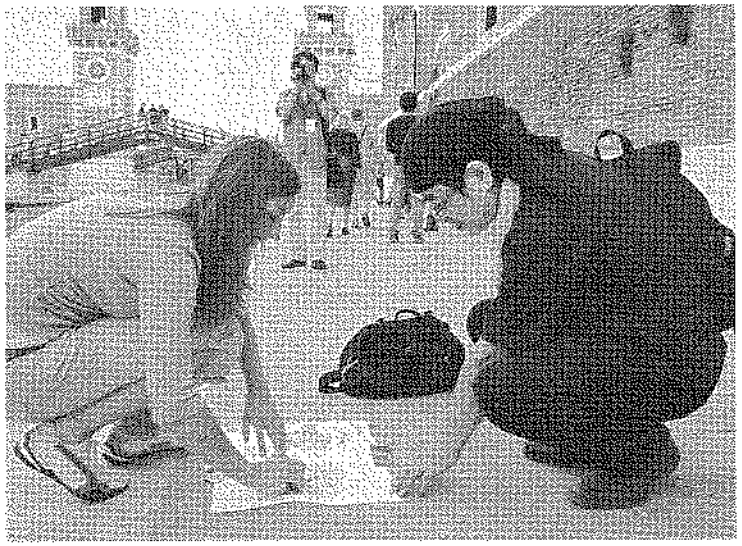
それにともない、美術に複数の起源を認めようとする視点も導入され、たとえばイスラム芸術を現代美術の文脈につなげる試みもなされた。主催者やディレクターは確かに欧米の出身だが、こうした内容を見ていると、西欧が自らの鏡に映る姿を自省しているようにも見えるのである。

このことと関連するのは、歴史性や地域性が刻印された個人的な経験が、アクチュアルな状況を映す鏡となる事実である。パレスチナ出身の写真家のごく個人的な旅をとおして、紛争に明け暮れる世界の動きが透けて見える。一九九〇年代に深刻な危機を経験した旧東欧の作家たちが、その記憶をしっかりと保ちながら、極端な資本主義への批判意識を見せているのも面白い。ラテンアメリカやオセアニアの若い作家たちを見ていると、北半球より南半球のほうがよほど元気がある。これらの地域で、同じ作家が複数の国にまたがり移動しながら制作することも、もはや珍しくはない。もともと芸術に国境はないはずだが、個人の経験が全体とダイレクトにつながるのもグローバル化の一面なのだろう。

このような世界のなかで、ビエンナーレの日本館は、どのように見られたのだろう。イタリアをはじめとしてヨーロッパで出されたレビューに目を通すかぎり、物質と記憶をテーマの中心に据えた日本館の展示は、個人の顔を強調する西欧とは明らかに対照的なものとして受け止められたようである。岡部さんが続けてきたフロッタージュ（こすり取り）は、他者にたいして徹底的に開かれているところに特徴がある。このことは、やはりいまだに個人主義的色彩の強い西欧美術のなかでは、特異な表現と映ったのかもしれない。「解説の必要もない」と書いた批評もあったが、頭で理解するのではなく、触覚で感じてもらいたいという意図が通じたとも言えるだろう。

アメリカ批判のオンパレードという様相もあったが、その裏にはグローバル化と紛争に見舞われる世界の人々が、個々の記憶をどのように未来へつなげるかという緊急の問題意識がある。日本館が試みた一連のワークショップは、他者と共に探求することのなかから、記憶の未来が生まれるのではないかという問いでもあった。水の都での未知の人々との多くの出会いが、新たな探求の旅へとつながってゆくことを予感している。

（みなと・ちひろ＝写真家・評論家・多摩美大教授）



ベネチアのアルセナーレ（旧造船所）前でのワークショップを映像で記録する港さん（中央奥）＝2007年6月

美術が想起させたもの ▷下

ベネチア・ビエンナーレを振り返る

人をつなげ歴史を共有

岡部　昌生

漆黒の闇の空間に、鉛筆が石にたたきつけられるような擦過音が響く。ストロボが閃光のように瞬時、激しく左右に振れる右手を射す。

「ことばに表せない感動を得た。戦争は人を盲目にしたが、ヒロシマ以後あなたが制作することで、いったん盲目になった人に光を与える仕事が可能であることを示してくれた。ここまで来たかいがあった」。スロベニア出身でパリに住む盲目の写真家ユジェン・パフチャルさんは、広島・宇品の被爆石に触れ、私との「擦り十撮る」共同制作を終え、そう語った。美術は発したことばを受けとめる人がいてこそ表現となり、力となる。その感動を、私も「ベネチア・ビエンナーレの大きなステージ」で実感した。

日本館コミッショナーの港千尋さんと組み立てた日本館展示のタイトルは「わたしたちの過去に、未来はあるのか」。フロッタージュ（こすり取り）の手法によって過去を現在に引き寄せ、受け継がれる記憶と物質について美術から問おうとする試みである。主題はふたつのヒロシマ、加害と被害を内包する。現場は広島の旧国鉄宇品駅で百十年の時を刻んで消滅したかつての軍用鉄道最終駅のプラットホーム。そのウジナの遺構は日本が近代を駆けた時間に符合し、ベネチア・ビエンナーレがその始まりにおいて刻んだ時間とも偶然に重なる。

日本館の空間に埋め込んだのは、九年間ここに立ち、この石に向き合い、擦りとりつづけた四千点の作業の総体だった。あわせてプラットホームの被爆石を設置し、テンポラリー（一時的）な歴史の現場をつくる。観る人は「ヒロシマの皮膚」のような空間に抱かれ、歴史の痕跡に入り込むというシンプルな空間設計を構想した。

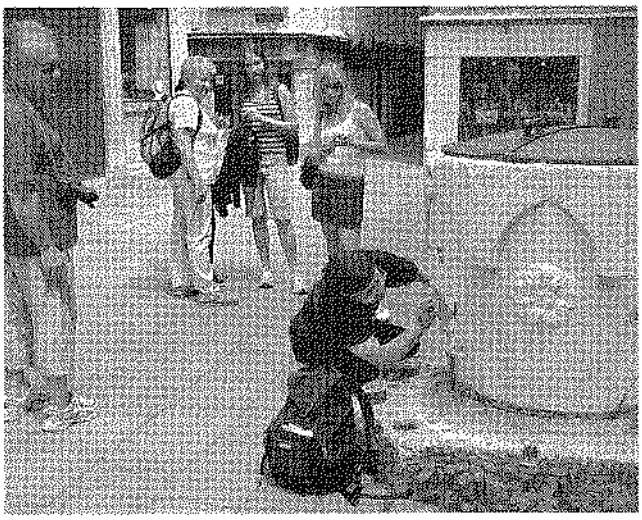
また、根室の旧海軍牧ノ内飛行場滑走路の形を沖縄経由でベネチアに届け、宇品―根室―宮野湾―ベネチアを結んだ航空書簡（アエログラム）プロジェクト「島から島へ」の作品群も展示。ともに内海を抱え、重港をもち、それぞれの歴史を重ねてきた都市の深部に触れた。

これらと同様に現在進行形、同時生起のワークショップが重要と位置づけ、日本館のテーマを携えて会場の外に踏み出した。広場の古井戸やアルセナーレ（旧軍用地の造船所）、修道院。そして、被爆石を擦りとる「ベネチアのヒロシマ」。市民や観客、大学生や小学生が手に鉛筆をもって街の細部に視線を落とす。手に触れる都市の感触と面白さ。夢中になれた時間だった。フロッタージュの触感を身体に取り込んで、わたしたちの主題を読みとってくれる。その手応えこそが記憶を想起させ、想像力をかきたて、ビエンナーレの場で歴史を共有する時間を持てたという反応だった。

華麗で濃密、世界の勢力図をみる巨大な祝祭空間。美術の現在が火花をちらし、社会と政治、経済がリンクし世界を映す。個人が翻弄されるほどに加速し、拡散するステージだと思われた。

「あなたの並はずれた作品と、ひとつの場所と瞬間への集中力に感動しました。それは、すべての場所、時間、生と死、魂にもつながります。アートを超えた美しい仕事に感謝します」。映像作家ビル・ビオラさんが託してくれたメモ。美術が街と人をむすぶように、人と人がつながる美術の力と手応え。その至福の経験と美術の強さへの確信が私の心に残った。

（おかべ・まさお＝美術家・札幌大谷大教授）



ベネチアの歴史が刻み込まれた広場の古井戸をこすり取る岡部さん。市民や観光客の関心も高い　＝2007年6月

北海道新聞　2008年2月8日夕刊

昨年、長い歴史を誇るベネチア・ビエンナーレ国際美術展に、道内在住作家として初参加した北広島の美術家岡部昌生＝札幌大谷大教授＝は、会期（昨年六―十一月）以降たびたび自らの制作を語ってきた。その言葉から創造の源泉を訪ね、ビエンナーレ参加を北海道の美術に投影させて考えてみる。（吉家昌伸）

四月下旬、JR札幌駅構内に設けられた展示空間「アートボックス」に、岡部がベネチアで発表したフロッタージュ（こすり取り）作品の一部が展示された。鉛筆で紙をこする「シャカシャカ」という無機的な音が流れる映像に足を止めて見入る人もいる。

岡部の展覧会は、ビエンナーレ会期中から開幕後にかけて、東京や海外で何度か開かれた。道内では三月に建築家の中山真琴邸（札幌）で開いた四人展や今回のJRでの展示、さらに二十四日に札幌・大通西五丁目の昭和ビル地下二階に開館するギャラリー「CAI02」のオープン記念展でも見ることができる。一方、三月末に札幌の道立近代美術館で行った講演会では、制作の核心に触れる言葉も聞くことができた。

「展覧会の形で作品を並べる行為だけが美術ではない。外に出て都市の人たちと一緒にすり取ることで、都市を学び、都市の問題を確認することを追求してきた」。ベネチア・ビエンナーレ日本館で発表した作品群は、一九九六年から九年余をかけて広島で制作したもので、フロッタージュ作家として約三十年の活動の集大成とも言える内容だ。

美術家岡部昌生 創造の源泉

都市の記憶、歴史こすり取る

岡部は制作に当たり、都市の歴史や市民のかかわり方を学び、自らの生い立ちや美術家としての歩みと重ね合わせて考える。日本館展示の「わたしたちの過去に、未来はあるのか」という題にも、都市の記憶や歴史を映した作品を通して未来を問う、との狙いを込めた。広島の被爆と「加害と被害」の問題を考えさせに作品は成り立たない。

国内外で市民と共同制作

公募展と決別、道内に軸足

また道内や広島、ベネチアでも展開したように、市民参加のワークショップも作品に取り込んできた。八八年にオーストラリアで開かれた現代美術展での共同制作を皮切りに、国内外で十五回以上のプロジェクトを実行に移した。フロッタージュ作品は、記憶や歴史、人々の思いなど膨大な情報をはらんでいる。

市民との共同制作の過程を作品に含める考えは「美術が社会と結び合う可能性を広げた」と評価される半面、「美術の枠組みをはみ出した」という、批判的な見方もされ得る。むしろこの点こそ、岡部の独自の立ち位置を明快に示しているとも言える。

岡部の歩みをたどれば、フロッタージュを始めた当初と今では、目に見える部分で違いがある。九〇年代半ばまでは、巨大な紙を埋め尽くした鉛筆の鉛色が黒光りし、迫力十分の作品が多かった。八六年の東京個展を論じた評論家高見堅志郎は、岡部作品の表象が持つ力を、作家の思いと切り離された「他者」と規定し、「他者であるだけにインパクトが強い」と表現した。

それに比べ、現在の作品群はテーマを選んだ意義や制作の過程を重視する「コンセプトの美術」の性格を強める一方で、ある種の「軽さ」も覚える。岡部は「自分としては違うとは考えていない」と語るが、八八年以降のワークショップを経た作家の意識の変化が、作品の表現にも影響しているのではないか。

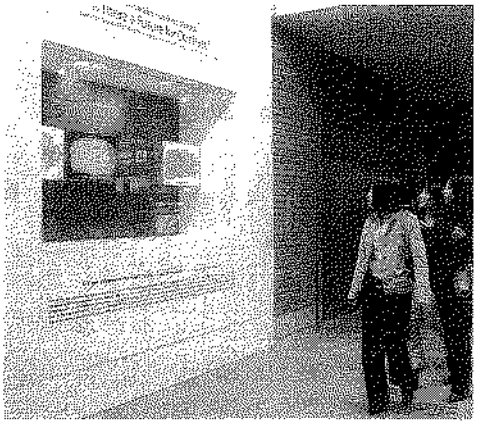
ところで、コンセプトをこれほど明確に掲げ、制作の核に位置づけている作家は道内では多くない。その点と岡部の歩みを重ねれば、北海道の美術の特質も浮かび上がる。

岡部は早くから道展に油彩を出品し、二十三歳だった六五年には会員となる。もとより写実的な作風ではなかったが、そのころから「家族」や「社会」への問題意識が強くにじみ始める。活動を長年見てきた美術評論家・吉田憲介は、「六〇年代から七〇年代初めのグループ展参加に転機があった」と指摘する。たとえば相互批評に重きを置いた「組織」（六三―六六年）、「タイム・テーブル」という社会的なテーマを掲げて開いた「ビジュアル・タイム」展（七一年）への参加を挙げる。

グループでの活動は、保守的な傾向に流れていた公募展の物足りなさと相まって、岡部をより社会的な取り組みへと後押しした。「（独自性を持った）北海道の美術は可能か、という問いに、（美術を続ける以上）可能でないとは言えない切迫感が自分の中にあった」と振り返る。以来、北海道にいながら、道外、世界に通じる普遍性の追求をライフワークとしてきた。

八二年に道展を退会、美術団体とは決別する。創作活動にとっては不可避だったが、道内作家として「孤独を味わうことも多かった。一歩踏み出すには勇気が必要だった」との真情も吐露した。

北海道でも、岡部のように道内に軸足を置きつつ、海外でも活躍する現代美術家が増えてきた。岡部の仕事を"解体"することは「北海道の美術」を論議し、次世代に橋渡しする格好の素材となる。若い作家が、わが身の振り方を真剣に考えるうえでも貴重だろう。三月の講演会を第一歩として、若い作家や評論家のそんな動きを待ちたい。（敬称略）



JR札幌駅構内のアートボックスに展示された岡部昌生作品

北海道新聞　2008年5月20日夕刊

活動の記録2006-2009「都市から都市へ」

●著書・テキスト執筆・刊行
「2006年の夏，都市に触れる三つのフロッタージュ・プロジェクト」
『札幌大谷短期大学紀要第37号』
札幌大谷大学短期大学部
2006年3月31日

「岡部昌生シンクロ+シティ2005プロジェクト」
『札幌大谷短期大学紀要第37号』
札幌大谷大学短期大学部
2006年3月31日

『Masao Okabe ── Is There a Future for Our Past? The Dark Face of the Light』
Edited by Chihiro Minato
国際交流基金
2006年5月17日

『岡部昌生　わたしたちの過去に，未来はあるのか
The Dark Face of the Light』
港千尋［編］
東京大学出版会
2006年5月17日

「〈土澤を擦りとる@つちざわマトリックス〉を終えて」
『街かど美術館アート@土澤シンポジウム　ワークショップ記録集』
街かど美術館実行委員会
2007年2月20日

「第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展への参加」
『マイトリー第66号』
札幌大谷大学
2007年3月9日

『記憶を汲みあげる ── ATTINGENDO MEMORIE』
MASAO OKABE X CHIHIRO MINATO
sakiyama works+masao okabe
2007年9月1日

版画集『MASAO OKABE STUDIO MONTPARNASSE』
ITEM EDITIONS. PARIS
2007年9月10日

「STUDIO MONTPARNASSE」
『札幌大谷大学紀要第38号』
札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部
2008年3月31日

「ユウバリに触れて」
『NORTHERN OWLS VOL.17』
北海道美術館学芸員研究協議会
2008年5月1日

『被爆樹に触れて　Touching A-bombed Tree in Hiroshima』
sakiyama works+masao okabe
2008年8月11日

「また，十勝の人と都市を擦りとる」
『MASAOが街にやってくる　ヤァ!ヤァ!ヤァ!』
札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部同窓会十勝支部
2008年9月15日

『MASAO OKABE「都市の／皮膚」のインデックス 2007-08』
Paris, Hiroshima, Venezia, S. Lazzaro, Roma, Lyon, Sapporo, Nemuro
sakiyama works+masao okabe
2008年10月4日

「美術が人と街をむすぶ」
2007年美術のオリンピック（ヴェネチア・イタリア）に日本代表で参加
『ニュースレター』
札幌大谷大学付属幼稚園
2008年12月20日

「手にふれる〈でまち家〉の時間」
『でまち家をフロッタージュしよう!』
同志社大学学生支援センター今出川校地学生支援課
2009年3月31日

「わたしたちの過去に，未来はあるのか
第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館」
『紀要39』
札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部
2009年3月31日

●展覧会
北海道美術・この100点
「THE DARK FACE OF THE LIGHT」
北海道立近代美術館（札幌）
2006年4月5日−6月16日

平和への祈り，そして，希望
「THE DARK FACE OFTHE LIGHT」
〈平和への祈り，そして，希望〉実行委員会
旧関西学院大学教会（神戸）
2006年8月6日

街かど美術館アート@つちざわ〈土澤〉
「@つちざわMATRIX」
街かど美術館実行委員会
八丁土蔵　おいよ　猿舘酒店　旧土澤議場（土澤）
2006年10月7日−11月5日

KAWAGUCHI MATRIX 2006
かつて川口を舞台とした『キューポラのある街』という映画があった
「KAWAGUCHI MATRIX」
KAF kAWAGUCHI ART FACTORY
Between ECO & EGO実行委員会
KAF kAWAGUCHI ART FACTORY（川口）
2006年10月22日−11月3日

岡部昌生フロッタージュ・プロジェクト
KAWAGUCHI MATRIX 2006
「KAWAGUCHI MATRIX」
Between ECO & EGO実行委員会
川口市立アートギャラリーアトリア（川口）
2006年10月22日−11月3日

美術館「廃校に華を咲かせよう」
「オーイ円山」「夕張の子どもたち」
国民文化祭やまぐち2006　子ども夢プロジェクト
山口県立徳山高校らぶふみ実行委員会
旧大潮小学校（周南）
2006年11月3日−11月12日

岡部昌生展
かつて川口を舞台とした『キューポラのある街』という映画があった
「KAWAGUCHI MATRIX」
トキ・アートスペース（東京）
2006年11月6日−11月12日

札幌大谷学園開校百周年美術展「おおたにの100点」
「風に触れる」
札幌大谷学園開校百周年美術展実行委員会
札幌市民ギャラリー（札幌）
2007年1月31日−2月4日

Finish and Begin「夕張市美術館の軌跡，明日へ」
「夕張の子どもたち」
夕張市美術館　北海道新聞社
夕張市美術館（夕張）
2007年2月11日−3月25日

第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展
Is There a Future for Our Past?
「THE DARK FACE OF THE LIGHT」，映像，アエログラム「N'OUBLIEZ PAS」，被爆石など1,500点，ワークショップ「HIROSHIMA in VENEZIA」，ヴェネチア市内でのワークショップ
実施：国際交流基金
ヴェネチア・ジャルディーニ日本館（ヴェネチア）
2007年6月10日−11月21日

INSIGHT VISION II
「サンラザロ島　アルメニアの碑」ほか
多摩美術大学情報デザイン学科
多摩美術大学八王子キャンパス
情報デザイン棟（八王子）
2007年7月5日−7月7日

岡部昌生×港千尋
ATTINGENDO MEMORIE　記憶を汲みあげる
「ANTICA "FONTANA in PIAZZA GIVDA"」ほか
ローマ日本文化会館（ローマ）
2006年9月8日−10月20日

MASAO OKABE "STUDIO MONTPARNASSE"
「STUDIO MONTPARNASSE」
item editions（パリ）
2006年9月10日−10月6日

岡部昌生×港千尋
ATTINGENDO MEMORIE　記憶を汲みあげる
「ヴェネチア井戸のプロジェクト」ほか
Gallery Q（東京）
2006年9月24日−10月7日

岡部昌生×港千尋
ATTINGENDO MEMORIE　記憶を汲みあげる
「ヴェネチア井戸のプロジェクト」ほか
トキ・アートスペース（東京）
2006年9月30日

広島から見てきました「第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展」
「AFTER UJINA」
gallery G（広島）
2007年9月25日−10月7日

ヒルサイド・ギャラリー〜新たな出発に向けて
「STUDIO MONTPARNASSE」
ヒルサイドギャラリー（東京）
2007年11月6日−11月18日

echo ── 生成する空間の詩学
港千尋　岡部昌生　スイリーさゆり　中山眞琴
「STIDIO MONTPARNASSE」ほか
ナカヤマ・アーキテクツ
中山邸（札幌）
2008年3月20日−3月23日

サッポロ・アート
「STUDIO MONTPARNASSE」
CAI02（札幌）
2008年5月24日−6月21日

岡部昌生×港千尋
わたしたちの過去に，未来はあるのか
Is There a Future for Our Past?
「AFTER UJINA」
JRタワーArtBOX
JR札幌駅総合開発株式会社
JR札幌駅東コンコースJRタワーArtBOX（札幌）
2008年4月26日−7月30日

ヒロシマ・モナムール
HIROSHIMA MON AMOUR
「THE DARK FACE OF THE LIGHT」
広島市現代美術館（広島）
2008年5月24日−8月31日

岡部昌生　被爆樹に触れて
「Touching A-bombed Tree」
トキ・アートスペース（東京）
2008年8月11日−8月24日

岡部昌生展
「ヴェネチアの古井戸+被爆樹に触れて」
札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部同窓会十勝支部
古柏堂ギャラリー（帯広）
2008年9月15日−9月27日

福島現代美術ビエンナーレ2008
「夕張の子どもたち」
福島現代美術ビエンナーレ展実行委員会
福島県文化センター（福島）
2008年10月1日−10月26日

岡部昌生展
「都市の/皮膚のインデックス2007-08」
CAI02（札幌）
2008年10月4日−11月1日

FIX MIX MAX! 2
現代アートのフロントライン［最前線］
岡部昌生「都市からの手紙1977-2008」
FIX MIX MAX! 2実行委員会
札幌宮の森美術館（札幌）
2008年11月8日−12月20日

フロンティア〜道東美術の現在
「オビヒロ・マトリックスの10ピース」
北海道立帯広美術館（帯広）
2008年11月21日−2009年1月21日

HIROSHIMA 1958
「エマニュエル・リヴァの広島」
NIROSHIMA MON AMOUR 1958
EMMANUELLE RIVA HIROSHIMA
HIROSHIMA 1958エマニュエル・リヴァの広島サポーター会議
ギャラリーG（広島）
2008年11月25日−2009年12月7日

きらぼし北斗展
「ebionim」「被爆樹に触れて」
札幌北斗学園
ギャラリー大通美術館（札幌）
2009年1月20日−1月25日

COLLECTION GALLERY
「根室落石岬・旧落石無線局床1990」
北海道立釧路芸術館（釧路）
2009年1月27日−3月29日

光と光が出会うところ
「STROKE ON THE FLOOR AT SAGACHO. AUGUST 1986」
府中市美術館（府中）
2009年2月14日−3月15日

記憶を汲みあげる
岡部昌生の世界　BOOKMARK NAGOYA 2009
書籍，資料，写真，映像など
ちくさ正文館書店本店（名古屋）
2009年3月6日−3月29日

岡部昌生拓繪樂生計畫
「樂生1929−2009」
IDEA TAIWAN
樂生院旧王字型医療行政大楼病棟（新荘・台湾）
2009年3月22日−4月5日

記憶を汲みあげる
岡部昌生の世界　BOOKMARK NAGOYA 2009
書籍，資料，写真，映像，「樂生1929-2009」資料など
精文館書店（豊橋）
2009年4月23日−5月1日

SAPPORO ART PLANETS展
JR TOWERプラニスホールリニュアル記念
札幌総合開発
JRプラニスホール（札幌）
2009年5月9日−5月28日

雪国の華 ── N40
Kenta>M50Bld18（上海）
2009年6月20日−7月19日

●ワークショップ
山口県立徳山高校らぶふみ企画
「オーイ円山」
旧大潮中学校のフロッタージュと一日だけの展覧会（大潮）
2006年8月4日−8月7日

街かど美術館アート@つちざわ（土澤）
「@つちざわマトリックス2006」
2006年8月10日−8月12日

アーティスト・イン・スクール（川口）
川口市立元郷中学校生徒130人との「カワグチマ・トリックス」
2006年11月1日−11月12日

ヴェネチア建築大学とのワークショップと講演（ヴェネチア）
港千尋　岡部昌生　高取秀司　フランチェスコ・アルヴィーゼ
講演：ヴェネチア建築大学講義室2007年5月30日
ワークショップ：アルセナーレ地区（旧造船所）
2007年6月5日

ユージェン・パフチャルとの「擦り+撮る」コラボレーション
ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館（ヴェネチア）
2007年6月8日

サン・ジュゼッペ小学校生徒とのワークショップ（ヴェネチア）
打合せ：サン・ジュゼッペ小学校ランベルティ修道女
2007年6月4日
ワークショップ：サンフランチェスコ・デッラ・ヴィーニヤ修道院
2007年6月11日

ヴェネチア・ビエンナーレ財団ガイドツアーのためのワークショップ
ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館（ヴェネチア）
2007年6月12日

ヴェネチア建築大学とのワークショップ（ヴェネチア）
サンフランチェスコ・デッラ・ヴィーニヤ修道院
2007年6月11日

ヴェネチア・ビエンナーレ財団教育プログラム
子供むけワークショップ
ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館（ヴェネチア）
2007年6月13日

古柏堂（旧帯広尋常小学校）を擦りとる
札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部同窓会十勝支部設立記念
北のレンガ古柏堂（帯広）
2008年9月21日

でまち家を擦りとる（京都）
同志社大学学生支援センタープログラム
2008年11月22日

岡部昌生拓繪楽生計畫
MASAO OKABE FROTTAGE PROJECT 1929-2009
IDEA TAIWAN
楽生院（新荘・台湾）
2009年3月19日−3月28日

台湾商務院書店のワークショップ
店名「印書館」の大文字を擦りとる
台湾商務院書店（台北）
2009年3月18日

日星鋳字行の活字文字をフロッタージュする
日星鋳字行（台北）
2009年3月28日

●フロッタージュ・プロジェクト
KAWAGUCHI MATRIX（川口 2006）
かつて『キューポラのある街』という映画があった（川口 2006）
旧大潮小学校マトリックス「オーイ円山」（周南　2006）
@つちざわマトリックス（土澤 2006）
STUDIO MONTPARNASSE（パリ 2006-）
ヴェネチアの古井戸（ヴェネチア 2006-07）
ヴェネチアのヒロシマ（ヴェネチア 2007）
リヨンの旧市街クール（リヨン 2007）
サン・ピエトリーニ/ローマのプロジェクト（ローマ 2007）
島から島へ（根室−沖縄 2004-）
なぜここに，滑走路が（根室 2004-）
被爆樹に触れて（広島 2007-）
古柏堂（旧帯広尋常小学校）を擦りとる（帯広 2008）
HIROSHIMA MON AMOUR 1958
EMMANUEL LIVA（広島 2008）
京町家「でまち家」を擦りとる（京都 2008）
岡部昌生拓繪楽生計畫
『樂生1929-2009』（台北 2009-）
鹿港／苗栗／台湾（2009-）

●講演会／アートトーク
広島芸術学会シンポジウム「ヒロシマの痕跡とかたち」
広島芸術学会
広島平和記念資料館（広島）
2006年7月29日

山口県立徳山高校らぶふみ企画「オーイ円山」
らぶふみ実行委員会
徳山高校　旧大潮小学校（周南）
2006年8月4日−8月7日

平和への祈り，そして，希望へ
被爆石に埋め込まれた記憶を聴く
「平和への祈り，そして，希望へ」実行委員会
旧関西学院大学教会（神戸）
2006年8月6日

@つちざわマトリックス2006ワークショップ
街かど美術館アート@つちざわ（土澤）実行委員会
土澤地区内（岩手県花巻市東和町土澤）
萬鐵五郎記念美術館（土澤）
2006年8月10日−8月12日

第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館の展示について
わたしたちの過去に，未来はあるのか
独立行政法人国際交流基金
国際交流基金国際会議場（東京）
2006年9月20日

カワグチ・マトリックス
アーティスト・イン・スクール
川口市教育委員会
川口市立元郷中学校
Between ECO & EGO実行委員会
川口市立元郷中学校
本一通りなど元郷地域
川口市立アートギャラリーアトリア（川口）
2006年11月1/2/6/7/8日（ワークショップ）
2006年10月22日−11月19日（展覧会）

シンポジウム「美術で街が活き活き」
街かどど美術館アート@つちざわ（土澤）実行委員会
大徹屋（土澤）
2006年11月4日

第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展
「わたしたちの過去に，未来はあるのか」
岡部昌生×港千尋
gallery G運営企画実行委員会
広島市民交流プラザ（広島）
2007年4月7日

ヴェネチア建築大学とのワークショップのためのセミナー
港千尋　岡部昌生　高取秀司　フランチェスコ・アルヴィーゼ
ヴェネチア建築大学大学院都市デザイン記号学研究室
ヴェネチア建築大学（ヴェネチア）
2007年5月30日

第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館
「わたしたちの過去に，未来はあるのか」
日本館ヴェルニサージュ・オープニングあいさつ
岡部昌生　港千尋
国際交流基金
ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館（ヴェネチア）
2007年6月3日

第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館−報告
「わたしたちの過去に，未来はあるのか」
岡部昌生×港千尋
多摩美術大学情報デザイン学科情報アート
多摩美術大学八王子校舎レクチャーAホール（八王子）
2007年6月22日

世界の芸術祭でヒロシマを
「お好みワイドひろしま」
NHK広島（広島）
2007年7月4日

第52回ヴェネチア・ビエンナーレ ── 国際美術展日本館 ── 報告
「わたしたちの過去に，未来はあるのか」
岡部昌生×港千尋
東京藝術大学先端芸術表現科
東京藝術大学美術学部第一講義室（東京）
2007年7月11日

視点・論点「ヒロシマを擦る」
NHK教育テレビ「視点・論点」
2007年8月6日

MEMORIA; CREAZIONE E RICHIAMO
岡部昌生×港千尋×シモネッタ・ルックス
ローマ大学現代美術ラボラトリー美術館
ローマ大学現代美術ラボラトリー美術館（ローマ）
2007年9月6日

ATTINGENDO MEMORIE　記憶を汲みあげる
岡部昌生×港千尋×マリ・アンジェラ
ローマ日本文化会館
ローマ日本文化会館（ローマ）
2007年9月8日

第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展報告会
国際交流基金
国際交流基金国際会議場（東京）
2007年9月25日

記憶を汲みあげる　ATTINGENDO MEMORIE
岡部昌生×港千尋
トキ・アートスペース
トキ・アートスペース（東京）
2007年9月30日

北海道芸術学会アートトーク
記憶 ── 想像と想起
第52回ヴェネチアビエンナーレ国際美術展に参加して
岡部昌生×港千尋×佐藤友哉×古家昌伸
北海道芸術学会
北海道大学遠友学舎（札幌）
2007年10月5日

ソクラテスのカフエで大学カフエ
くすみ書房
ソクラテスのカフエ（札幌）
2007年11月10日

記憶 ── 想像と想起
岡部昌生×港千尋
武蔵大学人文学部
武蔵大学（東京）
2007年12月20日

わたしたちの過去に，未来はあるのか
岡部昌生×港千尋
北海道立近代美術館　札幌大谷大学
北海道立近代美術館（札幌）
2008年3月22日

PERSONAL STRUCTURE　存在
岡部昌生　ジョセフ・コスース　川俣正　遠藤利克　ほか
キュレーター：カライン・ドゥヨング　サラ・ブッシェル
世田谷美術館（東京）
2008年4月2日−3日

CAI02アートトーク
岡部昌生×鯉江良二
CAI02（札幌）
2008年7月24日

ヒロシマを未来へとつなぐ
岡部昌生×宮岡秀行
ランド・アンド・ライフ
@ From Earth Cafe OHANA（東京）
2008年8月13日

都市に触れて
岡部昌生のフロッタージュ・プロジェクト
札幌市立高等専門学校（札幌）
2008年9月13日

都市に触れて
MASAO OKABEのフロッタージュ・プロジェクト
札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部同窓会十勝支部
古柏堂ギャラリー（帯広）
2008年9月21日

FM NORTH WAVE「VENUS DRIVE」
TIME 4 ACTION
札幌が誇る世界的現代芸術家岡部昌生さん
FM NORTH WAVE
札幌85.2MHZ
2008年10月20日

都市／皮膚のインデックス
岡部昌生×佐藤友哉
CAI02（札幌）
2008年10月8日

夕張・炭鉱をめぐるトーク
岡部昌生×菊地拓児×佐藤友哉
CAI02（札幌）
2008年10月11日

第52回ヴェネチア・ビエンナーレ ── 国際美術展日本館「わたしたちの過去に，未来はあるのか」をめぐるトーク
岡部昌生×港千尋×佐藤友哉
CAI02（札幌）
2008年10月11日

創る ── creation　辻直之を中心に
辻直之×岡部昌生×宮岡秀行
同志社大学今出川校地学生支援課
同志社大学寒梅館（京都）
2008年10月20日

でまち家を擦りとる
同志社大学今出川校地学生支援課
京町家「でまち家」（京都）
2008年10月22日

アーティスト・トーク
岡部昌生×祭太郎×高橋喜代史×今井里江子
FIX MIX MAX! 2
札幌宮の森美術館（札幌）
2008年11月28日

岡部昌生＋港千尋
IDEA TAIWAN
樂生院蓬萊舎（新荘・台湾）
2009年3月17日

物質と記憶
岡部昌生＋港千尋
国立台湾大学都市環境空間研究所
国立台湾大学（台北）
2009年3月19日

●展覧会・プロジェクトの取材／新聞・雑誌など
北の美術　岡部昌生「根室落石岬・旧落石無線局床」
朝日新聞北海道総合
2006年5月23日

北の美術　岡部昌生「夕張の子どもたち」
朝日新聞北海道総合
2006年8月27日

広島の“皮膚”で日本館覆う
読売新聞
2006年10月2日

ベネチア・ビエンナーレ出品
北海道新聞
2006年9月21日

「ヒロシマ」テーマの美術家岡部昌生さん日本館の出品作家に
中國新聞
2006年9月21日

港千尋さんが日本館を企画　ベネチア・ビエンナーレ
朝日新聞
2006年9月28日

ベネチアビエンナーレで「ヒロシマ」問う
日本経済新聞
2006年10月6日

ベネチアビエンナーレ出品決定
岡部 ── 港に高まる期待 ── 穂積利明
北海道新聞
2006年10月18日

場の記憶・歴史のこすり取る
岡部昌生展（田中三蔵）
朝日新聞
2006年11月2日

岡部昌生教授北海道文化奨励賞受賞
『マイトリーNo.65』
札幌大谷大学
2006年11月30日

2007年ヴェネチア・ビエンナーレ日本館プレリポート
『BT12美術手帖No.889』
美術出版社
2006年12月1日

市民がつくった展覧会 ── 岡部昌生と広島市民サポーター会議（岡本芳枝）
『LR Returns 09』
書肆・博物誌
2006年12月10日

27年目を迎えたアルスエレクトロニカから学ぶこと（山口裕美）
『LR Returns 09』
書肆・博物誌
2006年12月10日

美術　現代アート広がる
ベェネチア・ビエンナーレ　岡部氏が出品へ（古家昌伸）
北海道新聞
2006年12月22日

世界のアートシーンと日本作家
インタビュー　岡部昌生（新井博之）
世界のさまざまな出来事に　ひたすら思い馳せ　眠れる記憶を呼び起こす
『Bien』
芸術出版社
2006年12月25日

作ってます!
2B鉛筆で紙に写し出す都市に刻まれた人々の営み
『読売ウィークリー3056号』
読売新聞東京本社
2006年12月31日

現代美術の動向／ツルツル美学から異物の美学 ──
（樋口ヒロユキ）
日本はどうなる2007
『週間金曜日』
2006年12月31日

岡部昌生さんの作品から（加山隆）
南信州新聞
2006年1月11日

ベネチアに触れる ── 港千尋
『UP』
東京大学出版会
2007年1月15日

浮き上がる84の自刻像　夕張の明日へ（上木和正）
北海道新聞
2007年2月21日

ベネチアビエンナーレ岡部昌生氏道内から初参加（古家昌伸）
北海道新聞
2007年3月7日

アートのオリンピック　ベネチア・ビエンナーレを体験してみませんか
Gスクール　スペシャルトーク
岡部昌生×港千尋
『季刊G』
allery G　運営企画委員会
2007年4月1日

記憶の継承世界に問う（守田靖）
被爆都市の「皮膚」フロッタージュ
中國新聞
2007年4月5日

触れる　広島とヒロシマの境目で（高野清見）
読売新聞
2007年4月7日

夕張市美術館　存続の途を探って（吉田豪介）
『21ACT　110号』
札幌時計台ギャラリー
2007年4月15日

特集／ヴェネチア攻防史：アジア＝パシフィック各国のビエンナーレ戦略
『アートイット』
㈱アートイット
2007年4月17日

美術のオリンピック ── ヘネチア・ビエンナーレ美術展日本代表
『札幌大谷大学大学案内』
札幌大谷大学
2007年4月17日

GIAPPONE
Is There a Future for Our Past?
The Dark Face of the Light
第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展総合カタログ
第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展財団
2007年5月10日

喪失と再生問う　岡部昌生さん
都市の歴史はぎ取る
岩手日報（*共同通信社配信）
2007年5月25日

「ヴェネチア通信　岡部昌生 in ビエンナーレ」第1信
こすり取る工房の「記憶」
パリ・モンパルナスからの第一歩（澤口紗智子　真下紗恵子）
北海道新聞
2007年5月28日

記憶の喪失，再生問う
美の扉が開くとき　岡部昌生さん
秋田さきがけ（*）
2007年5月29日

「ヴェネチア通信　岡部昌生 in ビエンナーレ」第2信
最大の敵は蒸し暑さ
日本館で展示作業スタート（今井里江子）
北海道新聞
2007年5月31日

それぞれの「ヒロシマ」世界に問う
熊本日々新聞（*）
2007年6月1日

第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展
ヴェルニサージュ　オープニング挨拶
コミッショナー：港千尋
記憶 ── 想像と想起
アーティスト：岡部昌生
過去を現在に引き寄せる，間のかたち
2007年6月3日

真摯に問う　近現代の記憶
ベネチアに“ふたつの広島”
四国新聞（*）
2007年6月3日

近現代の記憶問う
美術家の岡部昌生さん
福島民報（*）
2007年6月3日

Dear Mr. Masao Okabe
Bill Violaの私的なメモ
Bill Viola
2007年6月3日

「ヴェネチア通信　岡部昌生 in ビエンナーレ」第3信
息づき始めたひとつの空間
作業も終盤，スムーズに（今井里江子）
北海道新聞
2007年6月5日

歴史や記憶の継承問う
信濃毎日新聞
2007年6月5日

ビエンナーレ参加岡部さん
現地でワークショップ
北海道新聞
2007年6月6日

美術家　岡部昌生さん
近現代の記憶，真摯に問う
ベネチアに“ふたつのヒロシマ”
日本海新聞（*）
2007年6月8日

ベネチアでヒロシマ問う
中國新聞
2007年6月8日

近現代の記憶　継承期す
二つのヒロシマ表現
ベネチアに「フロッタージュ」出展
河北新報（*）
2007年6月8日

「ヴェネチア通信　岡部昌生 in ビエンナーレ」第4信
地元市民，街の歴史を再発見
盛況　初のワークショップ（古家昌伸）
北海道新聞
2007年6月8日

近現代の記憶，真摯に問う　ベネチアに“二つの広島”
静岡新聞（*）
2007年6月9日

Scheletri della Corea, le tragiche revine di Hiroshima
IL GAZZETTIINO
SABATO 9 GIUGNO 2007

ヴェネチア・ビエンナーレ
岡部さん参加　現地できょう開幕
北海道新聞
2007年6月10日

ヴェネチア・ビエンナーレ開幕
北広島・岡部さん作品も
北海道新聞
2007年6月12日

「ヴェネチア通信　岡部昌生 in ビエンナーレ」第5信
他者とともに希望問い続け
内覧会，そして開幕（古家昌伸）
北海道新聞
2007年6月12日

都市の“表皮”擦りとる
美術家・岡部昌生さん
新潟日報（*）
2007年6月12日

広島の記憶　擦りとる
美術家　岡部昌生さん
愛媛新聞（*）
2007年6月13日

都市の皮膚をはがす
美術家　岡部昌生さん
福井新聞（*）
2007年6月14日

近現代の記憶真摯に問う
ユーレーカ!　美の扉が開く時
高知新聞（*）
2007年6月20日

「被爆石のアート　ベネチア・ビエンナーレ報告」上
（守田靖）
歴史写し取る技　高い評価
中國新聞
2007年6月22日

「被爆石のアート　ベネチア・ビエンナーレ報告」下
（守田靖）
擦り取り　来館者も体験
中國新聞
2007年6月23日

現代都市の記憶問う
被爆と軍都広島
加害の視点でヒロシマを考える
神戸新聞（*）
2007年6月23日

近現代の記憶問う
ベネチアに“2つの広島”
美術家の岡部昌生さん
神奈川新聞（*）
2007年6月23日

近現代の記憶を問う
被爆都市と軍都の“皮膚”表現
長崎新聞（*）
2007年6月24日

記憶の喪失と再生問う
「ヒロシマ」をテーマに
山形新聞（*）
2007年6月25日

「欧州現代美術展　上　ベェネチア・ビエンナーレ」
（高野清見）
規模拡大まるで見本市
読売新聞
2007年6月28日

近現代の記憶，真摯に問う
ベネチアに“2つの広島”
山陰中央新報（*）
2007年6月29日

ヴェネチア・ビエンナーレ・レポート
「季刊G Volume 11」
gallery G運営企画実行委員会
2007年7月1日

ARTNOTE Venetian blinds open
ART MONTHLY AUSTRALIA ＃201
JULY 2007

ART & Designe
An art trifectai put japanese artiston the international stage
『KIE家庭画報　VOL.16』
KATEIGAHO INTERNATIONAL EDITION 118
SUMMER 2007

Biennale Venedig
Druch Reibung mit einem roten stift sich der Boden auf dem Papier
“Hiroshima 96”
art KUNSTMAGAZIN Nr.6
juni 2007

「語りたい　伝えたい　ヒロシマ」第2部
ベェネチア・ビエンナレ日本代表の現代美術作家
岡部昌生さん
戦争を未来に問う芸術（冬木晶）
読売新聞
2007年7月4日

記憶を汲みあげる
『INSIGHT VISION』
多摩美術大学情報デザイン学科
2007年7月5日

「三大国際展を歩く　上　ベネチア・ビエンナーレ」
（内田真由美）
日本館の岡部昌生作品　被爆石並ぶ静謐な力強さを
東京新聞
2007年7月7日

「第52回ヴェネチア・ビエンナーレ ── 報告　上」
（長澤泰子）
垣間見るナショナリズム　国際美術展の意味
週間NY生活
週間NY生活プレス
2007年7月7日

「ベネチア・ビエンナーレ巡遊　上　国別部門」
（三田晴夫）
規模は膨張　衝撃には欠ける
毎日新聞
2007年7月9日

「第52回ヴェネチア・ビエンナーレ ── 報告　下」
（長澤泰子）
難しい時代の美術
週間NY生活
2007年7月14日

FUTURE
国際美術展ヴェネチア・ビエンナーレ速報
『TAMABI NEWS 46』
多摩美術大学
2007年7月16日

ベネチア・ビエンナーレで被爆石展示（守田靖）
浮かび上がるヒロシマ
中國新聞
2007年7月17日

「美の惑星直列　欧州3大美術展から（中）」
活況の中，増す存在感　非西洋への流れ（秋山亮太）
朝日新聞
2007年7月19日

よみうり堂「本」
岡部昌生『わたちの過去に，未来はあるのか』
読売新聞
2007年7月22日

被爆都市と軍都の顔
近現代の歴史　真摯に問う
美術家・岡部昌生さん　ベネチアに「広島」出品
東奥日報（*）
2007年7月25日

「ヒロシマの記憶と美学の将来」
金田　晋
『藝術研究　20』
広島藝術学会
2007年7月

第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展開幕!
『をちこち第18号』
国際交流基金
2007年8月1日

第52回ヴェネチアビエンナーレ開幕（山口裕美）
『MAC POWER VOL.8 NO.8』
NTT出版
2007年8月1日

ヒロシマと美術　かかわり見つめ「歴史」作品に厚み（守田靖）
広島藝術学会　県立美術館でシンポ
中國新聞
2007年8月4日

「世界に開かれた窓　ヴェネチア・ビエンナーレ」上
“欧州中心”脱却を模索　島まるごとアートの祭典
（古家昌伸）
北海道新聞
2007年8月6日

「世界に開かれた窓　ヴェネチア・ビエンナーレ」中
高いヒロシマへの関心　ワークショップと被爆石
（古家昌伸）
北海道新聞
2007年8月7日

「世界に開かれた窓　ヴェネチア・ビエンナーレ」下
称賛，共感…新たな期待　作家同志交わエール
（古家昌伸）
北海道新聞
2007年8月8日

ヨーロッパ，夏のアート紀行
ヴェネチア・ビエンナーレ
『フィガロジャポン』
阪急コミニュケーションズ
2007年8月20日

ヴェネチア・ビエンナーレ
アドリア海は宝石のように輝き，戦争の傷を癒してくれる（嘉藤笑子）
『STUDIO VOICE』
INFASパブリケーションズ
2007年9月1日

MASAO OKABE
http://www.itemedition/catalogue/okabe/index.html
item edition
2007年9月1日

パリのアトリエモンパルナスで制作（塚本猪一郎）
『版画芸術　No.137』
阿部出版
2007年9月1日

岡部昌生，善光寺，東京，
1992年1月11日
『安斎重男“私・写・録”1970-2006』
国立新美術館
2007年9月5日

広島の軍港駅，ピカソの工房
フロッタージュ300点　ローマで作品展
北海道新聞
2007年9月7日

MASAO OKABE
Roma, Istituo Giappone di Culture
(ManUela De Leonardis)
Exbart.com
2007年9月7日

MASAO OKABE, quel frottage per copiare il mondo
ManUela De Leonardis)
『il manifesto』
2007年9月13日

「国際美術展はいま」上
新興国との融合（長澤泰子）
中日新聞
2007年9月7日

「国際美術展はいま」下
非西洋文化思想　ゼロから学姿勢（長澤泰子）
中日新聞
2007年9月14日

TOKYO ART BEAT
アート・デザインのバイリンガル
わたしたちの過去に，未来はあるのか　インタビュー：直菌
TABlog
TOKYO ART BEAT
2007年9月14日

経験を繋ぐ
香川檀氏インタビュー「記憶の編目を手繰る」
『図書新聞2837号』
2007年9月15日

ヴェネチア・バーゼル・カッセル・ミュンスター
見てある記　撮りある記（水口水翔）
世界情勢を映す美術界のオリンピック
『月刊美術9　No.384』
サンアート
2007年9月20日

被爆の記憶　擦って継承
ベネチア美術展報告展（守田靖）
中國新聞
2007年9月26日

第52回ヴェネチア・ビエンナーレ・レポート
港千尋
『Inter Communication No.62』
NTT出版
2007年10月1日

広島から見てきました!
第52回ヴェネチア・ビエンナーレ
『季刊G』
gallery G企画運営委員会
2007年10月1日

究める　第9部　明日へつなぐ
ギャラリスト木村成代さん
アートシーン街に発信　芸術家と社会の懸け橋
（守田靖）
中國新聞
2007年10月5日

文化往来　ベネチアで街の「記憶」を掘り起こす
日本経済新聞
2007年10月8日

ヴェネチア・ビエンナーレ日本館帰国報告
記憶の往還はつづく（小口尚思）
『BT　美術手帖　No.901』
美術出版社
2007年11月1日

現代アートの最前線
史上空前の，アートブームを総括
『pen No.209』
阪急コミュニケーションズ
2007年11月1日

ヴェネチア・ビエンナーレ報告（港千尋）
フロッタージュで都市の感触共有
東京新聞
東京新聞社
2007年11月24日

現代美術における，記憶の表現
加害と被害というスタートライン（アライ=ヒロユキ）
『千年紀文学』
千年紀文学の会
2007年11月30日

今秋の道内美術動向
個性派作家の競演（吉田豪介）
『21ACT　114号』
札幌時計台ギャラリー
2007年12月15日

注目の作家　アトリエインタビュー岡部昌生
（秋田真波）
都市の記憶を擦りとる
『版画芸術　No.138』
阿部出版
2007年12月20日

回顧美術　2007中国地方
ヒロシマも活発に発信（守田靖）
中國新聞
2007年12月20日

魚眼図
岡部さん（奥岡茂雄）
北海道新聞
2007年12月28日

投資で過熱する市場
神奈川新聞
2007年12月28日

2007年文化の動向
戦争の記憶　喚起（菅原敦夫）
読売新聞
2007年12月29日

季刊美術10-12月（久米淳之）
北海道新聞
2007年12月29日

ビエンナーレの現在
われわれの過去に未来はあるのか
港千尋インタビュー（聞き手　暮沢剛己／難波祐子）
『ビエンナーレの現在』青弓社
2008年1月15日

都市を現像する
第52回ヴェネチア・ビエンナーレから　港千尋
『UP』
東京大学出版会
2008年2月5日

「美術が想起させたもの」上
ヒロシマ　世界の舞台に（竹澤雄三）
北海道新聞
2008年2月6日

「美術が想起させたもの」中
個人の経験　世界を投影（港千尋）
北海道新聞
2008年2月7日

「美術が想起させたもの」下
人をつなげ歴史を共有（岡部昌生）
北海道新聞
2008年2月8日

echo ── 生成する空間の詩学
港千尋
echo ── 生成する空間の詩学
ナカヤマアーキテクツ
2008年3月20日

写真とフロッタージュ　岡部昌生×港千尋
記憶を汲みあげる　ATTINGENDO MEMORIRE
小室治夫
『PHOTON No.6』
PHOTON
2008年4月1日

美術家岡部昌生　創造の源泉
都市の記憶，歴史を擦り取る（古家昌伸）
北海道新聞
2008年5月20日

過去・記憶・アート
ヒロシマ　モナムール
『季刊G』
gallery G　企画運営委員会
2008年7月1日

木の教え
港千尋
『岡部昌生「被爆樹に触れて」』
sakiyama works+masao okabe
2008年8月11日

ヒロシマの後の芸術のために
ユジェン・パフチャル
『岡部昌生「被爆樹に触れて」』
sakiyama works+masao okabe
2008年8月11日

「被爆樹」テーマ
フロッタージュ作品展
十勝毎日新聞
十勝毎日新聞社
2008年8月15日

@展覧会　岡部昌生展
紙や写真に表れる「戦後」（岸桂子）
毎日新聞
2008年8月19日

パレスチナ・ヒロシマ・YASUKUNI・九条
歴史的課題を考える作家たち
声なき命・被爆樹をフロッタージュ　岡部昌生
（山口泰三）
『美術運動史研究会ニュースNo.96』
美術運動史研究会
2008年9月17日

FIX MIX MAX! 2現代アートのフロントライン展
個性的試み　各会場で（佐藤孝雄）
北海道新聞
2008年11月17日

道内芸術家の作品知って
きょうから現代アート展（松本悌一）
北海道新聞
2008年11月18日

まなざしを贈る
港千尋
『HIROSHIMA 1958』
インスクリプト
2008年11月22日

現代アートのお祭り
吉田豪介美術の散歩道
読売新聞
読売新聞社
2008年11月27日

創る ── creation　辻博之を中心に
辻博之+岡部昌生+宮岡秀行
京都・同志社大学寒梅館
2008年11月20日

スタジオ・マラパルテHP
スタジオ・マラパルテ
2009年1月1日

80周年の節目に
北海道新聞
2009年1月21日

[美術ひろしま2007-08]座談会　金田晋　洲濱元子ほか
『美術ひろしま2007-08』
広島市文化財団
2009年2月27日

2009岡部昌生拓繪樂生計畫系列活動
http://loseng-frottage2009.blogspot.com/
IDEA TAIWAN
2009年3月1日ー

拓繪樂生家園岡部昌生帯頭做
中國時報（文化新聞朝刊）
中國時報
2009年3月20日

[拓繪樂生]連結過去興未来的座談会
關魚記録整理
2009年3月19ー22日

動眼不動手視覚独大的文化
張小虹
聯合報
2009年4月28日

記憶引きよせる「場」の断片
ハンセン病療養所　台湾・楽生院でフロッタージュ
岡部昌生
北海道新聞
2009年5月1日

●映像
岡部昌生アーカイヴス1979-2006
DVDーVIDEO

Is There a Future for Our Past?
わたしたちの過去に，未来はあるのか
第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展
日本館エントランス映像（2007）
DVDR　5分21秒
港千尋

世界の美術祭でヒロシマを
NHK広島　お好みワイドひろしま
2007年7月4日
島田葉子

視点・論点
ヒロシマを擦りとる
NHK ETV　2007年8月6日

ヴェネチアの石
DVD　35分　2007年
港千尋

岡部昌生
ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館
DVD　15分　2007年
島田葉子

美術講演会
港千尋×岡部昌生
第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展から
多摩美術大学八王子校舎キャンパスレクチャーホール
2007年6月22日
tamabi.tv

ATTINGENDO MEMORIRE
記憶を汲みあげる
ローマ日本文化会館展示映像
DVD　16分9秒　2007年
港千尋

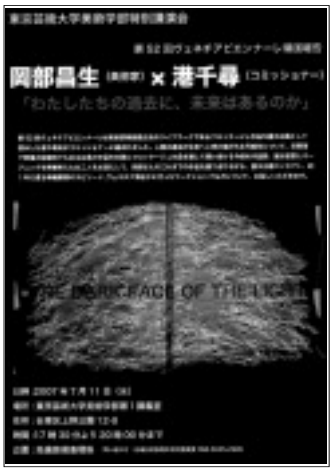
美術講演会
港千尋×岡部昌生
第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展から
北海道立近代美術館講堂　2008年3月22日
DVD　2008年
制作：駒井文音　吉川莱祐

ébionim
Masao Okabe frottage works
studio malaparte
DVDR　33分　2008年
宮岡秀行

●受賞
北海道文化奨励賞受賞（2006）
広島文化賞（2007）

日本館フロッタージュ「ヴェネチアのヒロシマ」ヴェネチア建築大学
用紙・表紙

多摩美術大学



東京藝術大学

武蔵大学

北海道立近代美術館・札幌大谷大学

●ワークショップのインタビュー
日本館「ヴェネチアのヒロシマ」
ヴェルニサージュのあと　2007年6月8日
撮影・インタビュー：島田葉子

きのこ雲のかたちにフロッタージュした男性一原子爆弾だよ。悲惨な，ばかげたアメリカの仕業だ。

この方法だとどうやるのか，どう描くのかわからなくてもこれは想像してできる。素敵だわ。なぜって，この石は自然のままの素材だから，石の上に紙を置いてやるのは素敵。初めてよ。こんな風にするのは。（メガネの女性）

初めはとてもいい感じだなあと思って，特にそこ（作品の世界）にいったような気持ちになれるから気にいったんだ。通り抜けたあと，作品名を見てすごく気に入った。そしてこの瞬間，周りを歩く人を見たんだ。さっき過ごした瞬間が好きだからね。そして子供時代を感じたんだよ。すごく気に入ったね。（黄色のたすきがけの男性）

好きだよ。この空間では作品を見て，作家と同じことをして同じ経験を感じられるからね。実際に僕なりのやり方でやろうとしているんだ。（メガネの男性）

すごくよかったわ。思っていたよりもずっと長く過ごせたわ。一つ一つのフロッタージュを見て，説明が多くなかったから，あのやり方を楽しみながら大きめのを造ったわ。あの方法そのものが表現しているのよね。よく解ってなくても。だから本当に楽しんだわ。原爆ね。書いてあったわね。フロッタージュの紙に一枚一枚「ヒロシマ」って文字があったから，それですぐに連想したわ。そしてただ，すごく美しいと思ったわ。（金髪の女性）

すばぬけていいわ。伝えたいことがとても重要だわ。芸術的な価値以外に，ヒロシマの大惨事を記録して，他の人に表現するために9年も過ごしたってという人間の努力に，価値があると思うわ。彼の保存に対する興味は，物理的には存在しないけれど，あの悲劇の瞬間の中からの光を描いているんだと思うわ。いつでも単純なのがいいのよ。単純な思想と単純なコミュニケーションは，抽象的な方法よりもはっきりしているわ。すごいエネルギーよ。（緑の服の女性）

●ベニス・ビエンナーレ一報告会@Musashi
わたしたちの過去に，未来はあるのか
2007年12月20日
主催：武蔵大学総合研究所
　　武蔵大学人文学部香川檀研究室

《場》の記憶を擦りとる一美術家岡部昌生氏がフロッタージュ技法を使い行なってきた作品制作は，例えばそう言い表わせるだろうか。街路や壁や床の表面に紙をあててその肌理を摺りだすことで，堆積した時間を痕跡として浮きあがらせる。なかでも原爆の都市ヒロシマの旧国鉄「宇品（うじな）」駅プラットホームの縁石を擦りとった1000余枚のフロッタージュが，2007年度の国際美術展「ベニス・ビエンナーレ」日本館の出品作となったことは，いまだ記憶に新しい。ビエンナーレ開幕から一ヵ月たった昨年12月20日，同館のコミッショナー港千尋氏（写真家，批評家，多摩美術大学教授）と岡部氏を武蔵大学に招き，現地での体験を振り返っていただいた。

「会期が終わって，ホッと肩の荷をおろした」という港氏から，「これまで岡部さんに訊きたくても訊けなかった」といういくつかの質問一それも作品の根幹に関わる問い一が向けられた。その一つが，それまで版画的な技法に拠っていた作家がフロッタージュに転じたきっかけは何か，というもの。岡部氏によれば高校で安保闘争に加わり大学で美術を始めたとき，社会とつながる表現として新聞などを使った写真製版を採用したが，ネガーポジーネガ……という複雑な工程を経なければならないので，直接性を捉えるにはあまりに遠い道のりに感じた。悩んだすえ，版をつくるメカニズムを放棄し，現場に立って身体を使う，〈場〉に直接さわる，というフロッタージュに出会ったという。「写真家はそのネガーポジの過程を我慢してやっている（笑）」と応じつつ港氏がいみじくも指摘するのは，フロッタージュにはそれでも写真のプロセスが潜んでおり，擦りとる作業は暗室の現像に似ていることである。写真による記録行為との類似と並んで，岡部氏の仕事ぶりはどこか民俗学，社会学，考古学の調査にも似ている。ベニスに現地入りして作家が注目したのは，島内に無数にある広場の，今は使われていない井戸だった。調べてみれば，水の都ベニスは歴史的に飲料水の確保が生命線であったため，技術の粋を尽くした見事な井戸が多く作られたという。現在は過疎にあえぐ都市ベニスの，往年の繁栄を物語る遺構にすぎない井戸が，かくして新たなフロッタージュの〈版〉となる。そして，一緒に擦りとる人や見物人といった周囲とのコミュニケーション，それも予想のつかない偶然の展開が生まれていく。

氏のもう一つの質問は，岡部氏の作品制作プロセスにはつねに〈他者〉の存在が期待されているのではないか，という問いである。岡部氏はそれに答えて，人だけではなく，都市，空間，時間，それら作品の成り立ち要因のすべてを〈他者〉と名づけ，向き合っているのだという。フロアから「岡部氏の作品には，ミュンスターやカッセルの美術展出品作とは異質なものを感じて感動した」という声があがり，港氏はその異質性を，氏の作品制作に潜在する〈他者性〉に照らし，人が自己の枠組みのなかで他人に共感する〈シンパシー〉ではなく，他者からやってくるものへの応答としての〈エンパシー〉なのだと説明された。

じつは私は3年前に岡部さんを，一昨年には港さんをゲスト講師に招いた経緯がある。ベニス・ビエンナーレの企画プレゼンがあったのはその直後のこと。不思議な縁で導かれた成り行きを，港氏は「美術における〈縁〉」と呼んで，岡部氏の作品制作における偶然性と関連づけてくださった。この報告会も，他者の呼びかけに応答する岡部氏の作品の一部ではないか。ふとそんな気がした。

香川檀（武蔵大学）「表象文化論学会」ウエブ広報誌「REPRE」 ©2008表象文化論学会

●武蔵大学大学院人文学部　「イメージ文化論」（担当：香川檀）
学芸員をめざす学生との対話
「アートと地域社会を結ぶために何が必要か」
2007年12月20日
歴史の記憶をイメージ表現することについて　学生レポートより

イメージ文化論の最後の授業で，岡部昌生さんがぽつりとつぶやいた，あの一言が，ぼんやりと頭の片隅に残り，温かみを帯びている。

「一人一人が想像することが，平和への架け橋である。」確か，そのような願いを込めた言葉であったように思う。歴史的な過去の記憶を，言葉で綴るのではなく，自らの手で擦りあげ，かつそこにあったはずの何かを浮上させる。その行為と，彼の真摯な芸術活動への意識の起源が，あの言葉の裏側に息づいているのは確かである。その平和への意志，何かを想像し，創造することの意味は，フロッタージュの行為と，痕跡の両方に表れる。私たちは，平和のためにそれらの痕跡を，イメージにまで昇華することに，可能性を見出し続けなければならないのだろう。そして，それをどのようなメッセージとして記録するか。そうした問題は，常につきまとい，歴史が繰り返す以上，それにまつわる明確な答えはたぶんない。それでも，この現代社会において，私たちは，記憶をどのように捉え，表現すべきかという必要性に，今，まさに迫られているように思う。今回は，これについて少しばかり自分の考えを述べてみたい。

考察のはじめに，岡部さんのフロッタージュ制作が，実にさまざまな表現を可能にしている理由を探ってみたい。『わたしたちの過去に，未来はあるのか』の中での港さんの解説を簡潔にまとめてみると，
①フロッタージュという行為そのものが，人間が記憶を外部化するにあたって採用した先史時代由来の技術であるため。
②岡部さんのフロッタージュが，自身の個人的な体験の記憶だけでなく，他者との交換，市民との共同作業，公共の場所における討論といった，非常に幅の広いプロセスをもっているため。
③都市を版として捉え，都市の細部にある記憶を，等身大で視覚化するため

という3つの柱に分けることができる。①や②については，岡部さんのフロッタージュ活動の根幹であり，この2つを突き詰めていけばフロッタージュの本質的な魅力を理解できるだろう。しかし，ここで注目したいのは，③の，都市におけるフロッタージュの可能性についてである。例えば，ヨーロッパにおけるカウンター・モニュメントが，時として大衆を煽動し，また時として芸術性の次元で価値観の衝突をもたらしてしまうことは講義でもすでに学んだ事実である。ところが，このフロッタージュは，対象のありのままを手で擦りあげるため，特定のメッセージが込められることはない。作品を見る者の主観的なイメージを，ダイレクトに想起させてくれるのである。そして，それらの痕跡（作品）が，後の時代になって，かつての町並みに相応の価値が与えられていたことを，教えてくれるにちがいないのである。何故，相応なのかといえば，「フロッタージュは，その方法から必然的に，対照と等しい大きさ」となり，加えて，「ゼロ距離から作られた」作品だからである。

これは，港さんの文章を読んでいて，ハッと気づいたことであるが，写真や映画，ビデオといった光学系のイメージに対して，フロッタージュは拓本や版画とともに，非光学系のイメージの一種である。そのため，「光学系のイメージとは異なり，対象との距離が，ゼロであることがイメージの成立条件」なのだ。なるほど，岡部さんはゼロ距離で対象を捉え続けてきたからこそ，その対象の内実にある何かを，記憶として残し，はては芸術にまで昇華させてしまうのだろう。物の価値に優劣をつけることは，真にはできない。つまり，世の中の全ての物は，本当は，そのサイズで，その形で，その色だからこそ，世界に一つしかないと説明がつくものばかりなのである。岡部さんの都市におけるフロッタージュは，都市全体のものが，そして，その都市にまつわる，かつての記憶そのものが，等しい価値を細部までにめぐらせた「版」なのである。

しかし，それはヨーロッパの都市においての話である。はたして，私たちは，都市に等しく根付く記憶を，例えば渋谷や新宿などの都心に，探し求めることができるのであろうか。かつて人間が先史時代から行なってきた痕跡を残す作業。いわば，ゼロ距離からの記憶を，どうにかして都心に持ち込むことはできないだろうか。藤原新也が手がけた「渋谷」に関するコラムを，武田徹は，『風の旅人』（vol.19）のなかで書き下ろしている。それによれば，渋谷にたむろする人々，とくに若者が，渋谷の飽和した情報世界に強く惹かれ，そして，その飽和した空間で，あらゆるものから乖離したがっていると述べている。つまり，それだけ渋谷の街は，多大な情報にまつわるストレスを抱え，そしてそれに耐えきれない人々を抱えこんでいるのである。だとすれば，それをダイレクトに記録するアートがあってもいいのではないだろうか。渋谷の路上で活動するアーティストたちは，その可能性に気付きはじめているように，私には思えてならない。未来ある，渋谷の若いアーティストたちに，岡部さんのフロッタージュのことを教えてあげたい。彼らは，それについて，「ゼロ距離からのイメージ」について，どう考えるのだろう。そして，想像し，創造することで，平和をかなえようという，岡部さんの主張を，どう受けとめてくれるだろう。私は，これからの日本の都心で活動するアーティストたちの活躍に，新たな記憶の可能性を委ねてみたいと思う。

たとえそれが，デジタルなものであったにしても，イメージすることの大切さを説いてくれるのであれば，それだけで充分，芸術的価値のあるものであると思う。

●早稲田大学文学部
香川檀「ドイツ思想」特別講義
負の歴史をテーマとする現代アート
ポスト・ホロコースト・アートの可能性　“痕跡”をキーワードにして
2007年12月21日
学生感想レポート

今回は，実際にアーティストの岡部さんの貴重なお話を聞けて非常によかったです。お話を聞く前までは，フロッタージュは，絵画などと同じで完成されてはじめて人にメッセージ（過去の痕跡）を伝えるものだと考えていたのですが，実際は，ワークショップや見物している人をも巻き込んだ，「触る」ことによる，進行形のアートとしても，フロッタージュは成立している，ということに驚きました。（ドイツ文学2年）

印象的だったのは，根室の滑走路の足跡です。たしかに被害なり，何らかの意味をもった場所も時間の経過のために「当時」自体は薄れていってしまい，私たちにとって直線的な意味しか持たない記号になってしまう。しかしそこにあの足跡のような，濃密な人間のにおいを感じさせるようなものが加わると，一気に無機的な記号が有機的な記憶になるように感じました。私はイタリアのファシズム期～第二次大戦期後の芸術にとても興味があるので，講演の最後の方のローマのお話など本当に聞けてよかったです。。岡部さんのように実際に作品を自ら作り上げている方のお話を聞けることはめったにないので，色々なことを感じることができました。とても魅力的な方だと思いました。（人文3年）

フロッタージュという技法の面白い点は，そこにある痕跡を紙面上に，さらに痕跡として残すということであり，そこはなかなか興味深いのだが，それによって出来上がる作品自体にはそこまで大きな意味はないのかもしれない。というのは，必ずしもそのうつしとる対象が明確な意味を持った痕跡を持つものばかりではないからだ。その意味では，作品として成立するためには先生のおっしゃるように作品への意味付けがなければならないだろうが，むしろこのフロッタージュの大事な点というのは，美術性を越えた点にあるような気がする。それは，そこの場所の人々がワークショップに共に参加することや，あるいはただ岡部氏に近寄ってくるのでもよいが，そのことによって，そこに何かあったということを彼らに刻むことにこそ意味があると思うということだ。特に参加の場合，指を伝わる感覚がその刻むということをより強める効果がある。そこで，作品そのものを展示したりすることには，どの程度の意味を持つことができるのだろうかという点には少し疑問がある。極論するならば，作業が終わった後には，その紙そのものはもはや必要ではないのではないだろうか。それが一人歩きして，別の意味を持ちはじめてしまうぐらいならば。（英文学2年）

フロッタージュは，モノの形を擦りとるのと同時に，その場所の歴史や，その場にいた人々の記憶を自分の心に擦りこむ作業であることがわかった。自分の身体を使うことによって，場所と自分の距離を限りなく近づけることができるのだと思う。今まで授業で見てきたアート，或いはそれだけに限らず，私が今まで見てきたアートは，芸術家の自己満足に感じてしまうことがあったり，見る側への“解釈”の圧力を感じてしまうことがあったけれど，今回の作品はそれがなかった。創る側が，創る過程によって何かを感じたり，学んだりするアートもあるのだなぁと思った。（人文2年）

興味深く聴かせて頂きました。絵を描くという行為はいつでも身体性，運動性を伴うものですが，フロッタージュというひたすらこするだけという非常に単純で素朴な，美術の教育を全く受けていない人でも誰でも参加できる作業から，あのような印象的な作品が生まれることが面白いと思いました。地元が札幌なので「ちえりあ」の作品は見たことがありました。（文芸2年）

フロッタージュによって痕跡が擦り取られることで，本来はその場に固定されがちな痕跡が外部に解放されて新しい可能性が与えられている。パリと広島の痕跡が交換されて新しい意味が生み出されているけれども，これもフロッタージュによって痕跡が解放されて初めてできたことだと思う。（哲学2年）

ただ写しとるだけの作業に見えて，実際に映像を見ていると，ものすごく迫力にみちている。フロッタージュ，うつし取るこの技法は，石のざらざらとした質感をも活写することができ，絵画や写真では表現することのできない妙味，そして歴史との緊密な接触があるのだと思う。シンプルな方法であるがゆえに，小手先のイミテーションがない，力強い表現性，美術性が感じられる。貴重なお話を聞くことができ，よかった。（文芸2年）

えんぴつと紙というシンプルな素材を使う（＝誰にでもできる）というのが，人類のきずあとを残すためのメディア（といったら変か？）として，むいている，と思いました。カラーのオイルチョークを使う特別なイミみたいなのに興味がわきました。（演映3年）

記憶を擦りとるということ。出来上がった作品にではなく，この作業をやりつづけることに意味があると思った。忘れてはいけない記憶がある。（ドイツ文学3年）

すりとる場所　場所の固有の意味。写すという行為より，まず触れるという行為の重要性。（ドイツ文学3年）

紙に写しているのはえんぴつではなく，さまざまな思いであり，たいへんに重いものであると感じた。（文芸3年）

小さい頃に道路に紙をおいて鉛筆でこすって型をとる，ということをやったことがあるのを思い出しました。「何かが浮かびあがってくる」という感覚を得たのを覚えています。一枚の紙をとおして世界をみることで，様々な息づかいを切り取ることができる。フロッタージュの奥深さを知りました。（人文3年）

フロッタージュにおいて，それを擦るというその行為や作品を作る過程が大事なのか，それとも出来た作品の方により重きを置いているのか，どちらですか。膨大な数の作品がありますが，ひとつひとつは全く同じものは出来ないですけど，それぞれすごく似ている気がしますが，作品一つ一つに違った意味があるんですか。それとも出来た作品は全体として何か意味があるんですか。（ロシア文学3年）

フロッタージュで写しとられた物が，写真とどう違うかと考えるとやはりその質感にあるのではないかと思った。写真が写すものは，その対象とさらに別の情報，天気，光，空気などが含まれるが，フロッタージュで写しとられたものは，そうした点において，その対象そのものから記憶を呼び起こさせるものだと言えるのかもしれない。ただ，ヒロシマ・メモワールで赤い色を使うことが，血や炎を連想させるから反対する人というのは，そもそもこの活動の意味を考えると倒錯しているのではないかと感じた。（英文学3年）

講演されていく中で，刻むことがどういった意味をもたらすのかということについて考えました。子供たちに戦争の記憶はないけれど，紙に浮かび上がった道の姿は肌で年月，そこで起こったことを感じさせる機会になると思いました。（ドイツ文学3年）

想像していたものよりもずっと規模の大きなもので，驚きました。こすってうつしとることで一枚下の跡に触れるというやり方は，とても興味深いです。まだ少し考えがまとまりませんが，授業でやってきた痕跡ということと併せてじっくりと考えてみたいです。（ドイツ文学3年）

実際に触れるということがアートにおいての大切さを知った。触れることと「描く」ことは別のことだと思っていたので意外なつながりに驚いた。（ドイツ文学3年）

道路は，歩道は，壁は，日々人間を見ています。10年前も今も，明日も……。そこから何かしらのメッセージを受け取り，表現（フロッタージュ）することがこんなにも人に伝えるメッセージ性のある行為だとは思いませんでした。「裏にあることばをすり取った」と岡部さんはおっしゃってましたが，過去のことばと，現在のことば（すり取った人のメッセージ）が作りだす何とも言えぬ雰囲気が私たちに過去・現在あるいは未来を，想起させるのでしょうか。何か懐かしく，痛くてしめつけられるような思いがします。写すという誰にでも可能な行為から感じ，生まれるものもあるというのがわかり，貴重なお話をお伺いできてよかったです。（人文3年）

貴重なお話ありがとうございました。“もうひとつのヒロシマ”とは？，というところが気になる！（社会学3年）

フロッタージュといった芸術作品を初めてみました。エンピツと紙で作られるシンプルな芸術で，より直接的に都市のあり方を表現していると思います。何か生々しいものを感じました。小さい頃に遊んでコインを写しとったりしましたが，それとは全く違いとてもうったえるものを感じました。フロッタージュはとてもシンプルなもので，一般市民の子供たちもすることができることに驚きました。こすった時の感覚が一般市民のなかに残るということは芸術鑑賞の上で変わったタイプだと思いますが，身体で芸術を体感できるというのはすごいことだと思いました。（日本文学3年）

3年程ですが，広島に住んでいたことがあります。今年の夏，8年振りに訪れました。平和公園には独特の空気があると思いました。夕焼けの空を見ながら，私は今ある平和に感謝せずにはいられませんでした。戦争を体験していない私は“忘れない”ことすら出来ません。ただ，歴史を知っていくことや人々の思いを感じとることは出来るかなと，と思います。過ちと言われる戦争を繰り返さないために，感じることは重要だと思います。言葉にならないものの方が圧倒的に人に迫って来ることもあるからです。平和公園はそこに立っているだけで感じるものがあるし，（写真を通してですが）今日見せていただいたものからも何か迫って来ました。（人文3年）

幼い頃，屋外でスケッチする際に，コンクリートの地面の上に直接画用紙を敷いて描こうとすると，凹凸が浮き出されて，煩わしいと思った記憶があります。しかし，今日岡部さんのお話を聞いて，考えが変換されました。邪魔をしているのではなく，その地に刻まれた記憶がささやかに主張しているのではないか，と。基本的な技法であるけれど，非常に心理的な側面を映し出せると思いました。（人文3年）

フロッタージュという手法は実際に存在する物質に対して手で触れるので，リアルな感覚を得ることが可能なのだろうと予想します。対象となる事物に対し，想いをはせるには，恐らく最も効果的なのではないでしょうか。（ドイツ文学2年）

フロッタージュという技法は，痕跡の痕跡をとる作業だと思うのです。痕跡が痕跡として在るというだけ，アーティストの歴史観や抽象化の度合いなどが介入できない分，純粋な気がします。岡部さんの作品は，市民，子供たちとともくむワークショップがほとんどですが，そういう点が受動的でなくてすごいと思いました。能動的な行為は，記憶に鮮明に残ると思います。（人文2年）

原爆ドームの形状はとても印象的ですが，あれも当然ながら，立派なアーカイヴ・アートだったのだなと今更ながらに気がつきました。フロッタージュに使う画材のことなど，興味深かったです。（日本文学2年）

知ることによって作品が生み出され，知らせる為に作品が在るのだなぁと，つくづく思いました。（心理学2年）

記憶をとりだす作業の難解さ，重要さが感じられました。芸術を通して記憶を取り出し後世に伝えることは，日本の未来に大きな力を与えると思います。（ドイツ文学2年）

紙という物質を用いて土地の記憶を浮かび上がらせる，という手法は写真や絵画と違い生々しい実感として人々の心に入って来やすいのではないかと思った。それは他の媒体では表現しきれない凹凸やフロッタージュを行なった人の想いや実感が現われるからではないかと思った。紙という媒体は私達の身体と同じような意味合いを帯び，目に見えないものを浮かび上がらせるのは個々人の「記憶」や気持ちによるものが大きいと思う。今回の講義では写真による作品の紹介だったが，作品を直に接するとまた見るものに新しい意味を生み出すと思うため，是非作品を観に行きたいと思います。（ドイツ文学2年）

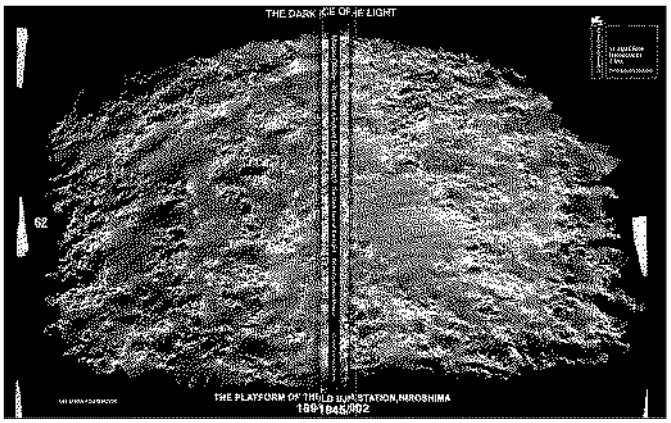
何かを表現するということは，そこに自分の解釈を付け加えることも同時に意味していると思う。しかし，擦り取ることでその痕跡を残すという行為は限りなくそれをデフォルメでなく単なる事実として残す行為なのではないかと思った。そういう意味で非常に大事な行為だと感じた。（人文2年）

人の記憶はコンピュータと違い，データ的なものではなく，同じ経験をしていたにしても感じ方やその記憶が同じになることはないと思います。ところが場というのは，歴史の中にあって，しかし何かメッセージ的なものを語ることはありません。その場に向かって今度は歴史を経験していない人々が身体を使って何かを擦りとろうとすることで，そこに場と人が記憶をめぐって（その場で起きた出来事を知った上で）無言の対話を成しているように思います。その感覚は作業の後も身体に残るのだろうと思います。そのことが記憶をつなぐというという意味でどのように働くか予想できませんが，人々が何かを感じることを可能にするきっかけとして，ワークショップは重要だと感じました。（文芸2年）

とても面白く，興味深いお話でした。日本人の知らない日本に残る戦争の痕跡が，多くあることを知りました。フロッタージュのもつ深みが心の中にぐ〜んと響いて離れがたいです。一つの作品を作ることによって生じる様々な障害を乗り越えるだけの力を秘めているのが凄さだと思いました。（映像4年）

岡部さんが擦りとっているのは，建造物や地面の表面でしかないが，その行為に伴う経験や，その作業現場に残った記憶をも同時に紙や布に擦りとっているんだろうと思った。作られた作品だけでなく，その作業自体に大きな意味があり，人々をつなげたり，記憶を呼び起こすきっかけになったりしているのが非常に興味深かった。（人文3年）

岡部さんが地域と連帯しながら作業することで，アートの価値が作品＝完成品から時間の共同性へ拡散しているように思いました。手を当てる「手当て」が気持ちを伝えるものだという話を聞いたことがありますが，手による作業が記憶の共有を呼ぶことに興味深く感じられました。（文芸4年）

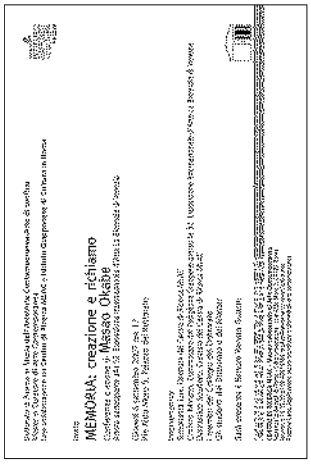


岡部昌生作品集「Masao Okabe: Is There a Future for Our Past?」東京大学出版会

「TAMABI NEWS Number 46 Summer 2007」多摩美術大学

「写真の交差通信 PHOTON No.6」写真の交差・写真研究誌フォトン

「岡部昌生 記憶を汲みあげる ATTINGENDO MEMORIE」ローマ日本文化会館



「岡部昌生トーク・ショー」ローマ大学現代美術ラボラトリー美術館

「岡部昌生×港千尋　ATTINGENDO MEMORIE」TOKI ARTSPACE

「Masao Okabe Studio Montparnasse」Item éditions

「岡部昌生×港千尋　記憶を汲みあげる ATTINGENDO MEMORIE」Gallery Q

「岡部昌生「都市の／皮膚」のインデックス」CAI02

「都市の／皮膚」のインデックス

第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館の展示を中心とした都市の往還は，それぞれの都市に触れ，都市の皮膚を剝ぎとるかのようなフロッタージュの連続する歩行でもあった。それぞれの都市での作業はひとつのプロジェクトを形成しながら，広がり，深まりかたちをなした。都市のなかに埋め込まれた場の時間と記憶に触れる膨大な手の作業は，この30年にわたる「都市は巨大な版である」という視点によって擦りだされたその総体と総和である。

第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館エントランス　撮影：吉岡早百合

Is There a Future for Our Past?
わたしたちの過去に，未来はあるのか
広島宇品駅プラツトホームの遺構から採取されたフロッタージュの作品など1,500点とともに，そのマトリックスともいえる4トンものプラットホームの被爆石が日本館の空間を埋めた。その被爆石を擦りとるワークショップが「ヴェネチアのヒロシマ」として会期中とおして行なわれた。
また，ヴェネチア建築大学の学生や市民，サン・ジュゼッペ小学校の子供たち，盲目の写真家ユージェン・バフチャル氏とのコラボレーションやワークショップなども積極的に行なうと同時に，市内に点在する今は使われていない広場の古井戸のプロジェクトも進めた。
「水の都市が雨水をあつめ，濾過してつかうためにつくりあげた，知恵の結晶だが，いまは閉じられつかわれていない。石の井戸を擦ると空洞の内部で共鳴が起きる。広場全体に音がひろがってゆく。眠っている人が目覚めるほどの大きさになる。擦りだされた石のかたちは，紙の上にうつされる。水に映される歴史の顔とはまたちがう，生活の痕跡が，紙に写される。」(港千尋「イメージが溢れてくる」『記憶を汲みあげる』)

主催：国際交流基金
アーティスト：岡部昌生
コミッショナー：港千尋
アシスタント・コミッショナー：高取秀司　高内利枝
コーディネーター：武藤春美
制作アシスタント：石丸勝三　澤口紗智子　真下紗恵子　今井里江子　港エレン　高橋あい　吉岡裕記　牧口秀樹　江連尚子　加納士朗　内藤瑞穂　Massimo Conca　Alessandro Pascolo　ほか多数の協力者と協力団体

日本館のインスタレーション「わたしたちの過去に，未来はあるのか」 撮影：港千尋

日本館のワークショップ「ヴェネチアのヒロシマ」 撮影：港千尋

日本館のワークショップ「ヴェネチアのヒロシマ」 撮影：高橋あい

日本館のワークショップ「ヴェネチアのヒロシマ」 撮影：高橋あい

サン・ジュゼッペ小学校生徒とサンフランチェスコ・デッラ・ヴィーニャ教会でのワークショップ　撮影：吉岡早百合

サンフランチェスコ・デッラ・ヴィーニャ教会でのワークショップ　撮影：吉岡早百合

ヴェネチア建築大学とのアルセナーレ(旧造船所)でのワークショップ　撮影：古家昌伸

ヴェネチア建築大学とのアルセナーレ(旧造船所)でのワークショップ　撮影：港千尋

アルセナーレ地区でのフロツタージュ　撮影：港千尋

ゲットー地区での「ヴェネチアの古井戸プロジェクト」　撮影：港千尋

「ヴェネチアの古井戸プロジェクト」 撮影：港千尋

アカデミアの広場での「ヴェネチアの古井戸プロジェクト」 撮影：港千尋

カンポ・ディ・フィオーリ　撮影：澤口紗智子

旧市街にあるカンポ・ディ・フィオーリ（花の野広場）はローマのもっとも魅力ある街の姿があって好きだ。18年前，野菜やくだもの，花売る朝市の元気のいいおばさんたちの声にはげまされ，ここで仕事をしたことを思い起こさせた。広場のまんなかにたつブルーノ・ジョルダーノ像のまん前の黒い舗石を擦りだしたことに想い重ね，いく枚かの「ローマの皮膚」を捲るようにとりだした。紙の直下の感触が，この古代からの都市がひとつひとつ手で石を積み，ひとつひとつ手で埋め込み構築されたことが変わらずあることに感慨をもった。
そこからほど近いゲットー地区の細い路地が交差するかつてのユダヤ広場。1591年，ジャコモ・デッラ・ボルタが造った大きな噴水は，1930年に隣の広場に移され，通りも広場の名前も失った。その場には，噴水の基盤を形づくる円形のかたちが舗石で組まれ多くの往来に磨耗して黒く光って在る。ローマ滞在のほとんどをここにたち，大きな円形の形を擦りとった。界隈の人たちが作業を取り囲み，声をかけ、時にワインや水をさしいれ振る舞い，当時の古い噴水の銅版画のコピーをくれた。私の美術の現場が，街と人と歴史をつなげ，記憶を想起させ，それぞれに刻む時間となった。

ANTICA “FONTANA in PIAZZA GIVDA”移設された噴水跡　撮影：港千尋

教会の壁に埋め込まれた墳墓の浮彫りの破片を擦りとる(サンタ・マリア・イン・トラステヴェレ教会)　撮影：港千尋

「ATTINGEND MEMORIE　記憶を汲みあげる」(ローマ日本文化会館)　撮影：エンリコ・ナトリ

STUDIO MONTPARNASSE, idem　撮影：港千尋

目覚め

港　千尋

誰かが気を失って倒れたとき，わたしたちは反射的にその人の身体に手をやり，擦るだろう。失われた意識は，手と皮膚のあいだに復活すると信じながら。
静まり返った夜中に，ぐっすりと眠っている人を起こすときも，そっと揺すってみるだろう。そうして夢の時から戻ってくるのを待つだろう。

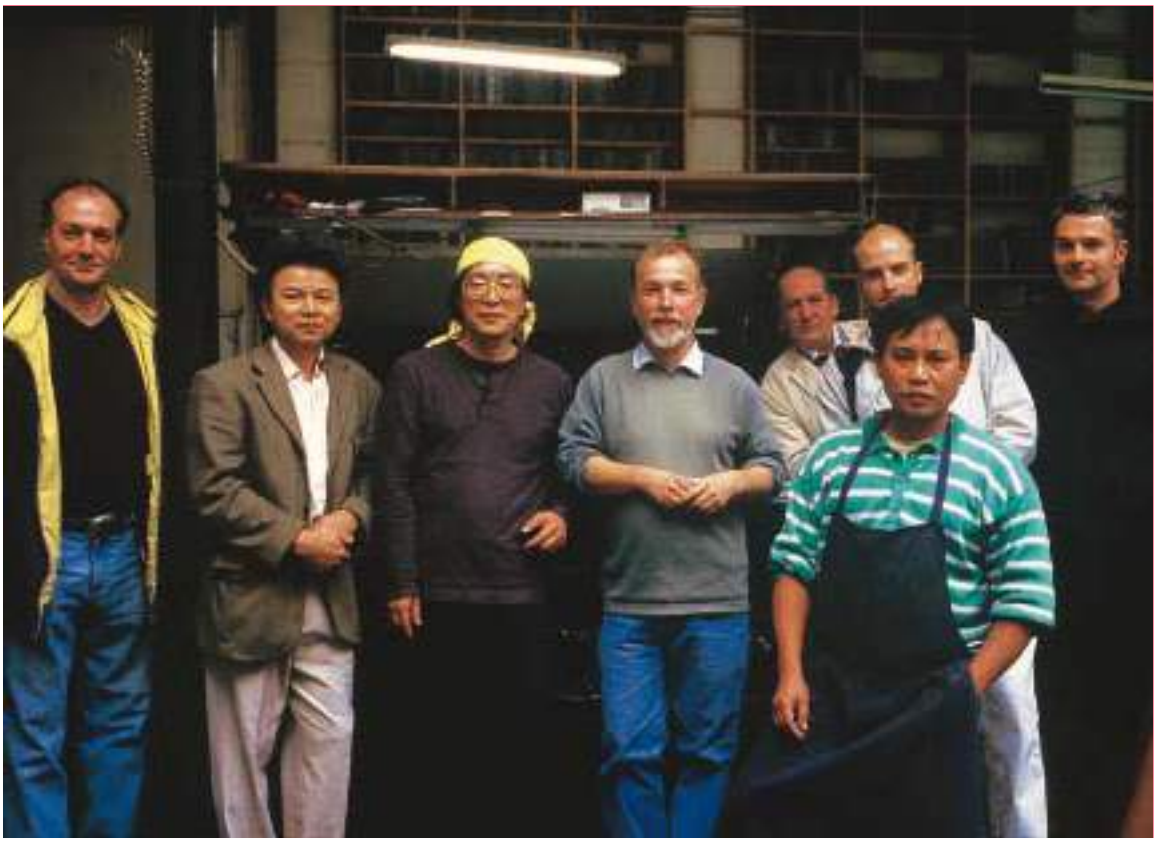
その手に一本の木の枝が握られていたら，震える葉がざわざわという音を立てて，虫や鳥を驚かせるだろう。その振動はさざなみのように，小屋のなかを満たしてゆく。その振動する木の枝は，テントのなかでは金属の鐘や鈴にとってかわられることもある。太古の昔から世界各地のシャーマンはそうやって，眷族たちを呼び集め，はるかな旅へと向かう。

その手に一本の鉛筆が握られていたら，繰り返される動作は線の往復を描き，やがてそれが面となって身体の表面を覆うだろう。反復する鉛筆の運動は，見えない状況を表面へ浮かび上がらせる。徴候が現れる。隠れている古代の遺跡の航空写真。
岡部昌生が擦りだしたのは，百年にわたって多くの芸術家たちが往来した，アトリエの床であり壁である。あらゆる色のインクとさまざまな声が吸い込まれている床が，腕のストロークによって，覚醒する。

黒い蛇が残す皮。
〈今〉の考古学。
あるいは無意識の地震計。

STUDIO MONTPARNASSE, idem　撮影：大津明子

etem edition. Parisでの「MASAO OKABE: STUDIO MONTPARNASSE」個展　撮影：港千尋



idemの職人さん　撮影：大津明子

光庭に人がたつ。ガラスの筒を通し石から擦られたかたちとそこにあった植物を見る。反対側から，光を浴びて見る人をみる。山の斜面の半分が被爆したその地中に埋め込まれたガラスの筒。そこから空が見え，仰ぐ顔に光が注ぐ。「ヒロシマ」のなかに「広島」を感じさせられる，と思った。
「閃光という瞬時に射す強い光に原爆のイメージを重ねた20年前の岡部作品から，美術とヒトが繋がり結ぶ新しいインスタレーション作品の光景によって，私自身にも20年という時間の流れを優しく回帰させてくれる作家の優しさをも感じることができました」(木村成代「ヒロシマ・モナムール　失った記憶を呼びさます」「季刊G」)

「HIROSHIMA MON AMOUR」(広島市現代美術館)　撮影：キクイヒロシ

開拓使が札幌に置かれて以降，原野だったこの街は瞬く間に開拓され，急速に近代化されていったのだが，とくに戦後の高層ビルの建設ラッシュとともに幾筋もの小さな川が暗渠になり，また多くの地下水脈が断ち切られてきたのだ。岡部昌生はこうした札幌という都市の原像と，水脈が走っていたはずの断面を透視した。《函の壁　1964/2008　水脈の境界面》はその結果としてのフロッタージュである。5メートルに及ぶ荒々しい壁面を擦り取ったこの作品には，闇のなかを縦横に走る水脈の音までが封じ込められているにちがいない。（佐藤友哉「都市／皮膚のインデックス」）

「函の壁1964/2008　水脈の境界面」（CAI02）　撮影：小室治夫

「広島宇品の土によるドローイング」(CAI02)　撮影：中優樹

「AFTER UJINA」(CAI02)　撮影：中優樹

後記

たしかに，「特別な年」の「特別なヴェネチア」だったと実感した。ジャルディーニに降り注ぐ初夏の陽光が，木々の緑を瑞々しく見せていた。その樹のしたを多くの観衆が祝祭の高揚した気分でくぐり抜ける光景は，やはり100年以上の歴史を重ね，世界遺産の壮麗な都市のなかで，国別参加で金獅子賞をきそうという一大観光事業として巨大な国際現代美術展を仕掛け展開する，大きなステージだと思わせた。これに「ドクメンタ12」「ミュンスター彫刻プロジェクト」が重なり，「アートバーゼル」が連なってこれを巡るグラン・ツァーがヨーロッパを「美の惑星直列現象」の特別な年として印象づけた。

「わたしたちの過去に，未来はあるのか」。アーティスト港千尋がコミッショナーとなった今回のこの共同作業は、幸運な出会いと展開だった。「物質と記憶」をテーマの中心に据えた展覧会の組み立て，展示やワークショップが「記憶・痕跡」というひとつの軸にそいながら展開していった。ヴェネチアの市民や学生，子どもたち，「ヴェネチアのヒロシマ」を手に感触して持ち帰った多くの人たち。盲目の写真家ユジェン・バフチャルや映像作家ビル・ヴィオラ，パリidemのパトリス・フォレストとの交流。私の美術が，ヒトと街を結ぶように，このビエンナーレ経験は私にとって「特別な」ものとなり，「ヴェネチア以後」の時間にもつながっていく。この記録の記述をそこまで広げ綴った。

「Is There a Future for Our Past?」(JR Tower ArtBOX)　撮影：小室治夫

「Is There a Future for Our Past?」(CAI02)　撮影：竹田真一郎

わたしたちが，この都市の深部に分け入り美術の作業をするにあたり，ヴェネチア建築大学で記号学や都市のデザインや建築全般にわたる研究に参加するフランチェスコ・アルヴィーゼ研究室から，多くの示唆を受けたことはさまざまな意味において意義深かった。主題のヒロシマの広島が，ヴェネチアとともに内海に位置する交易都市であり軍都でもあったこと。ウジナがビエンナーレと同じく近代の先駆けとしての歴史を数字で刻み，わたしたちの「記憶と痕跡」の主題が，記憶を持つことができなくなった世界遺産都市の「日本館」内外で展覧会やワークショップで実践されたこと。「ヒトと都市」，「ヒトとヒト」だけではなく「都市と都市」のことがらも浮彫りされ，「過去の現在」を意識させられた。後日，アルヴィーゼさんは都市論についての論文に，このわたしたちのヴェネチアでの美術について記述したいと申しでた。どのような眼ざしで捉えられたのか，興味深く楽しみにしている。

美術は，発したことばを受けとめるヒトがいてこそ表現となり，力となる。その感動をヴェネチア・ビエンナーレのおおきなステージで実感した。競うことではなく，価値を生みだす美術の力と手応えと共感，その人間の素晴らしさを受けとった。
札幌大谷大学と理解を示し活動させてくれた多くの人たちに感謝したい。これまで長く支えてくれたサポーターはじめ，多くの地の沢山の層の人々にも同じ気持ちを伝えたい。ここに綴られた膨大な記録と記述は，私の「解体・新書」ともいえるもので，これをテキストとしてまた，美術を探求する旅にしようと思う。